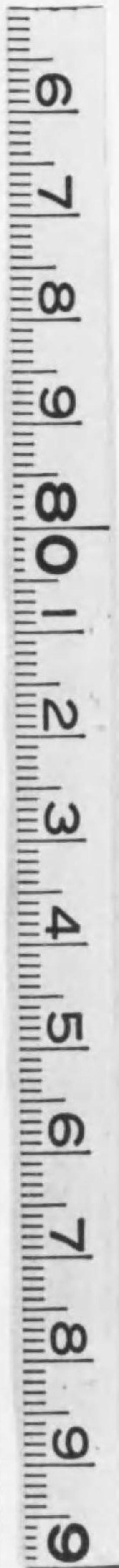




F.13
532

F13-Sh532-3
1200500763599



始



284

F13
SH.532
3



903
109

目次

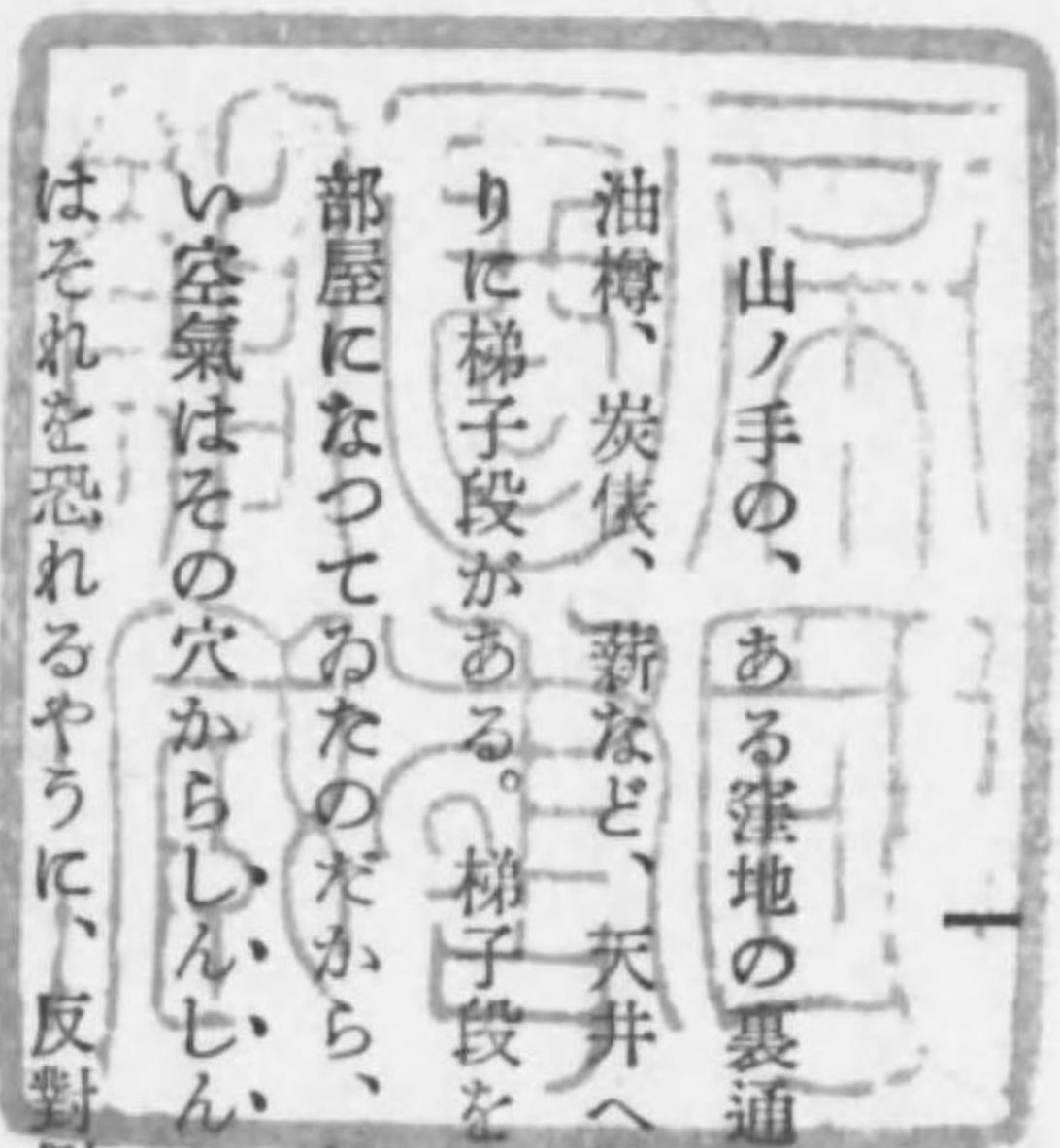
氷つた部屋	三
白鳥	一九
粉雪の降る夜	四六
裏街の灯	七〇
彷徨	一三六
兩腕を差し延べて	一八三
父親	二三九
北海流人	二六六
故郷	三三〇

彷彿

徨

著者自裝

氷つた部屋



山ノ手の、ある窪地の裏通り——酒屋の物置の二階だつた。階下は土間で、そこには酒樽、醬油樽、炭俵、薪など、天井へ届くまでに積まれ、その中に狭い通り道がついてゐて、その突き當りに梯子段がある。梯子段を上つた所にぐらぐらするす、すりだけ、障子もなく、いきなりそこが部屋になつてゐたのだから、部屋から言へば、そこに大きな風穴を持つてゐる譯であつた。冷たい空気がその穴からしんしんと押し上げて来る。それにその暗い穴がいやな氣持をさせる。自分はその隙を恐れるやうに、反対側の北の窓の下に机と火鉢を押しつけて置いて、そこにこつちりと小さくなつてゐた。ときどきぼんぼんのあたりを、冷たい手で撫でられるやうな氣がすることがあつた。

氷つた部屋

風よけの屏風を一つ買はうとはいつからかの計畫だったが、まだ買へずにゐた。堪へきれない時は、押入の襖を外して屏風の代りにすることがあつたが、さうすると汚ないものばかりを押し込んだ押入の中がまる見えに見えるのでやりきれない。それに押入の中からも冷たい細い風が、しかもしめつたかびの匂ひと一緒に流れ込んで来る。で、それも止めた。部屋のぐるりの隙間に目張りをしようと思つたこともあつたが、梯子段の穴を塞がない以上無駄だと思つたので止めた。

最後の手段は、蒲團を敷いて頭からすっぽりもぐつてゐることであつた。しかしこれもお腹がすいてゐる時は——さういふ時がまたしばしばであつた——どんなに縮まつても暖まらない。つひには節々が痛くなる。我慢しきれなくなつて足を伸すと、蒲團の裾は氷のやうに冷たくなつてゐる。腹が立つて起き上つてしまふ。

「こんな所にいつまでもぐづ／＼してゐたら、凍え死んでしまふぞ」

自分はいつもさう思つた。しかしさう思つたところでそれまでのことであつた。さういふ部屋にそんな風にして住んでゐる程であるから、それより以上の部屋に住み代へることの不可能であることは言ふまでもないことであつた。

部屋の前の電線がうなりを立てゝゐる夕方であつた。

自分は襦袢のほころびを縫つてゐた。その襦袢は毎夜足を縮めたり、伸したりする度に蹴破られて、裾の方がぼろぼろになつて、綿がみんな切れて、おつちてしまつてゐた。直さねばならぬと思ひながら、繕ふべき方法を知らない自分には、まるで手が出せなかつたのであつた。

それをいま繕はうとしてゐるのだから、よくよくであつた。せめていゝ毛布を一枚ほしいとそれをしみじみ思ひながら、かんじんよりを通すやうな恰好で針を動かしてゐた。

と、梯子段の下から、酒屋の女中の聲がした。

「あゝ」と答へて、急いで襦袢を傍へ押しつけた。

「お客さんです」さう言ひながら、ミシミシと梯子段を上つて来る。

自分は立つて行つた。

自分は梯子段の降り口に塞がるやうに立つた。女中は梯子段の中途から手を伸して名刺を出した。自分は躡んでそれを受け取つた。名刺を持つて来る客は珍らしいと思ひながら、見るとそれには峯翠山とあつた。それは父の名であつた。忠右衛門といふのが本名であるが、父は漢學者を自任してゐて、さういふ號をつけてゐた。しかしをかしいと思つた。父が息子に會ふのに名刺を

差し出すのは變だと思つた。同名異人ぢやないかと思つたので、
 「どんな人だ」と女中に訊いて見た。が、それでは不十分な氣がしたので、
 「どんな風態をしてゐる？」と重ねて訊いた。
 「白い髯を生やして、猫背に古ぼけたまはしを着てるわ」
 「あゝ解つた……上るやうに言つてくれ」

二

やつぱり父であつた。

自分は襦袍と敷き放しの蒲團をまるめて、大急ぎで押入へ投げ込んだ。そこへ梯子段を上る音がした。自分は一枚しかない座蒲團を火鉢の向ふへ敷いて梯子段の所へ行つた。父は梯子段を上り切ると帽子を脱いで隅へ置き、それからまはしを脱いでてすりへ掛けた。その間、口をきかなかつた。少し不機嫌だと思つてゐると、ニコ／＼しながら、

「突然上京した……驚いたらう」と言つた。

半年目ぐらゐで會つたのであつたが、禿げた頭の艶がなくなつて、少し灰色がかつて來たやう

に見えた。頭の天邊の少し横の所が親指で押した程にへこんでゐるのも、その時に始めて氣がついた。

「今日國からまつすぐに來たんですか？」自分は火鉢の所へかへりながらさう訊いた。

父は火鉢の向ふへきちんと坐つてから、

「うむ、まつすぐに來た。ところが、この家が解らなくて小半日探し廻つた。非常に困難した。

移轉の通知をする場合は、地圖も書き添へて置くべきものだよ」と父らしい言ひ方をした。

「來ることを前に知らしてくれりや、停車場まで迎へに行つたのに」

「ところが、そんな餘裕がなかつた。急な用事が持ち上つたのでな」

さういふと、父は頸髯をしごきながら、首を廻して部屋のうちを見廻した。自分は首を縮めた
 思ひがした。で、火鉢の火を掻き立て、炭をつぎ始めた。「急な用事」の内容を父が言ひ出す
 のを少しヒヤ／＼しながら待つてゐたが、なか／＼口を開かない。

やがて父はふくれた懐から風呂敷包を取り出してそれをほどいた。中から乾柿が出て來た。

「まつ子が丹精してこしらへたものだよ」父はそれを、無暗に食つちや困るといふ風に言つた。

まつ子といふのは、今年十五になる自分のたつた一人の妹で、父はこの子と二人きりで郷里の

家を守つてゐるのであつた。

禮を言つて一つ取つて一口食べたが、甘い柿を自分はいかにも澁さうにして喰べた。

三

電燈がついた。電線のうなりははつたり止んでゐた。が、空気は急に冷えて来た。

「飯はどうするのか」と父が言つた。

「外へ食べに行くことにしてゐる」と自分は答へたが、それだけでは誤解されさうなので、

「その方が經濟なんだ」とつけ加へた。

父は苦い表情をした。

「夕飯はまだでせう」と自分は訊いた。

「勿論」と父は一層苦い顔をした。まづいことを訊いたと自分は後悔した。

「ぢや何か取つて來ます、しばらく待つてゝ下さい」

自分は、自分の氣持に埋め合せをするやうに言つて立ち上つた。壁に掛けたマントを着て、そのマントで机の半分を蔽ふやうにしてその上に積んである三四冊の本を抱へた。

往來ではまだときどき空風が吹いた。その中を走るやうに歩いたが、そこでも今日の父に向つてゐるやうな或る冷たいとげつぽさを感ぜさせられた。

行きつけの古本屋へ行つて、持つて行つた本を金に代へた。そのかへりに蕎麥屋へ寄つて親子井を二つ頼んだ。

四

部屋へ歸つて來ると、父はひどく嚴肅な顔をして坐つてゐた。そして自分が坐るのを待つやうにして、

「この部屋は衛生によくない」と言つた。自分は黙つてゐた。

「東はどつちか」とまた言つた。

「こつちでせう」と自分は背の方を指した。

「すると、この窓は北向きだな。太陽の光線は入るまい」

「えゝ」

「甚だよくない。山ノ手といふ所にはこんな家はないと思つてゐたが、これぢや山ノ手の價値が

なら」

自分はそれにも黙つてゐた。

「一體お前は近頃何をしてゐるか」

さう言つた父の音聲には持ち前の怒りが現はれてゐた。自分はいつか首を垂れて火箸の先で火鉢の灰の上に字を書いてゐたが、その時、思はず顔をあげて父の顔を見た。父の眼はずわつてゐた。

「勉強をしてゐます」と自分は押し出されたやうに言つた。この前、同じ父の問ひに對して「小説を書いてゐる」と答へて、ひどく父の怒りを買つたことがあるので、今度はうつかりそんなことは言へなかつた。

「何の勉強だ」

「英語です」

「まだ英語を習つてゐるのか」

「えゝ」

「中學へ入つた時から習ひ始めたのだから、もう十二三年も習つてゐるぢやないか。それでもま

だ仕上らないのか」

「まだくです。本當にやつたらあと十年はかゝります」

「わしは五年で漢學を仕上げた。てつべんから十八史略をやつて、五年目には唐宋八家から四書五經を悉く読み上げて終つた。然るにお前はその倍以上の年月を費やしてまだ習ひ上げないとはそりや英語が六ヶ敷いからではなくて、お前の頭が駄目なのだ」

自分はまた黙つた。少し反感が湧いて來た。

「暮しも樂ぢやなささうだな」

「……………」

「人に迷惑などは掛けてゐないかな」

「少しはかけてゐます」

「そりやいかん……………非常にいかん。そんなことをしてゐるうちにだんだん世間を狭くしてしまつて、たうとう東京に暮せなくなるだらうが」

「……………」

「そんな破目に陥らない前に、田舎へ歸つたらどうだ」

この問題では、四五年前から幾度か父と言ひ争つてゐた。で、またそれに觸れなくなかつたので、それにも答へなかつた。

「まつ子も一二年したら嫁にやらねばならぬ。残るのはわし一人だ。貴様といふ息子があるのに親が自身で飯を炊いて食はねばならぬとは馬鹿氣たことぢやないか」

「……………」

「田舎の村の人はかう言つてる。息子に高等の教育を受けさせるといふことは、息子を息子でなくするやうなものだと。息子を東京へ出して學問させたものはみんなそれで懲りてゐる。しかしそんな話があらうかね」

「……………」

「それでも田舎へかへらうとは思はないかね」

「それでもとは何ですか」

「それでもとはそれでもだ」と父ははたき込むやうに言つた。

「兎に角今すぐは田舎へかへる氣がしません」と自分は反感から來る冷靜さを保つて答へた。

「それぢや、いつになつたらかへるつもりだ」

「まだはつきりわかりません」

「わしが死んでもか」

「……………」

「わしが死んで、お前がかへらないとすれば、あの家は潰れることになるのだが、それでも構はないかね」

「あの家に住む人はなくなつても、私が生きてゐる以上、ほんたうの意味の家は依然として繼續されてゐる譯ですが」

「馬鹿、總理大臣になつても、住むべき家に住まなければ、その家を潰したといふのだ」

「さういふ意味の潰し方なら結構ぢやありませんか」

「まだ解らないね。田舎が年々疲弊して行くのも貴様のやうな思想を持つ青年ばかりがふえて來たからだ。百姓は多くなるほど國は榮えて行くが、總理大臣のやうな人間ばかりが出來たら國は亡びてしまふ」

父の話はいつも具體的の話から始まつて、つひにはさういふ大きな問題——一種の經世家めいた話に擴がつて行くのがきまりであつた。そしてさうなると果しがなかつた。いゝ加減の所で喰

ひ止めねばならぬと思つたので、自分はまた應答することを止めた。

父は興奮して一人で論じ立てた。今の代の教育は亡國的傾向を持つてゐること、不生産的の間を造るやうな教育はなくてもいいこと、百人の大學卒業生より一人の百姓の方が大事であること、世界的の運動競技場より、一枚の畑の方が價値あること、「運動が必要なら東京中の公園をみんな畑にして、誰にでも鋤鎌を取らせるがいい」そんなことまで言つた。

自分は冷たい空風の中に眼をつぶつて立つてゐるやうな思ひで、ちつと黙つてゐた。

五

階下で蕎麥屋の聲がした。自分は立つて下りて行つた。井を載せた臺を受け取つて二階へ上つて見ると、その臺の上には雪の粒がかかつてゐた。自分は臺を父の前へ置いて、窓を開けて外を見た。いつか雪が降り出してゐた。往來が薄白くなつて、細かい雪が眞直ぐに降つてゐた。

「雪になりました」と自分は外を見たまゝ言つた。

「さうか」父はさう言つただけであつた。

やがて二人は井のものを食べ始めた。父は猫背を一層圓くして黙りこくつて食べてゐる。自分はときどき郷里の方のことを訊いたが、まるでバツが合はなかつた。

食べ終へると、父は音を立てて茶を飲んで、それから自分の頭越しに襖の方を見ながら楊枝を使つてゐた。自分も黙つたまゝ向つてゐた。ときどき紛雪がサラサラと窓の硝子に當つた。

自分は、父の急な用事といふのを訊いて見ようかと思つた。しかし訊かなくとも、もう大抵解つてゐた。父がさう言つて置きながらまだ言ひ出さずゐるその氣持も解るやうな氣がした。結局自分は訊かずゐる方がいゝと思つた。しかしその話をどちらからも持ち出せないことは、どちらに取つても寂しいことであつた。

父は眼をつぶつて黙想するやうな風をしてゐたが、やがて肘枕で横になつた。

「床を敷きませうか」

と自分は言つた——さつきから切口上で言つてゐる自分の言ひ方が、冷たい隔意を持つてゐるやうに父に取られやしないかと氣にしながら、何故かそれが直せなかつた。

「あゝ寝よう、今日はくたびれた」と父は眼をつぶつたまゝ言つた。

むやうにしながらソーツとこゝろんだ。自分はその高い圓い背の上へ掛蒲團を載せてやつた。父は両手で頭を抱へるやうにしてうつ伏したまゝ、しばらくちつとしてゐたが、

「くたびれた、くたびれた……」

とくゞもり聲を出した。それから頭を枕につけ、自分の方へぼんのくぼを見せて平らになつた。

さうして見る父は小さなよぼよぼの老人であつた。大きな問題を興奮して論じ立てたさつきの父とはとても思へなかつた。反感を持つて父の意に逆ふやうなことを言つたさつきの自分がちよつと滑稽になつた。

「蒲團がかたくて寒いでせう」

と言はうとして言ひそびれてしまつた。何か父を慰めるやうなことを言ひたかつたが、何故かそれは口には出せかつた。

自分は火鉢を抱くやうにして頻りと煙草をふかした。いくら縮まつても寒かつた。自分は例の襦袢を頭からかぶるやうに着て、座蒲團を火鉢の上に載せ、その下に手を入れて圓くなつた。それでも少しも暖まらなかつた。冷たい空気は梯子段の所からばかりでなく、背後の押入の襖の隙

間からも、窓の隙間からも、疊の隙間からもしんしんと浸み込んで来た。

「雪が降りしきつてるな」

さう思ふと、今夜こそこの部屋の中のものみんな氷つて終ひやしないかと思はれた。何もかも氷りつく、自分の身體も氷つて終ふ。しかし「父も」とは思ひたくなかつた。その癖一番先に父がさうなりやしないかといふ恐れを無理やりに感じさせられた。………自分はいつか、ラフカデオ・ハーンの「雪女」(Yuki Onna)を思ひ出してゐた。——吹雪の夜、獵師の父と息子が山峡の渡し場の小屋の中に寝る。父は眠りついたが息子は眠れずゐる。と、閉めた筈の戸が開いてそこから雪が煙のやうに吹き込む。その中から何もかも眞白な女が現はれる。女は眠つてゐる父の顔の上にだんだんとこゝろでホーツと息を吹きかける。息は白い煙のやうに父の顔を包む——父の息はそれきりパツタリ止む………まで思ひ出すと自分は眼が覺めたやうになつて部屋の中を見廻した。それから父を見た。肩の上の蒲團が動かない。自分は變にハツとして、ソーツと父の枕元に匍ひ寄つて寢息を訊いた。寢息は靜かにしてゐた。

自分はまた元の場所にかへつた。頭の中がシーンとなつてゐる。と、父がひよいと頭をあげて自分の方へ向きかへつた。そして、

「まだ起きてゐるのか」と言つた。

「えゝ」と自分は答へた。

「蒲團はこれしかないのだらう」

「えゝ」

「ちやこゝへ入つて寝るがいゝ。もう寝たらよからうが」

「えゝ」

と自分は答へたが、その時急に胴ぶるひがして來た。

(大正十三年十一月)

白鳥

結婚して、中央線に沿つた郊外に新居を構へて三月あまりした、ある初夏の日曜の朝であつた。日曜だと良人は、勤めのある日よりも早く眼を覺す癖があつた。

「おい……………」良人は、枕の上に腹ばひになつて、まだ眠つてゐる細君の方へ、さう聲をかけた。細君は、腫れぼつたい眼をこつちへ向けて、まぶしさうにしばたゝきながら、

「もうお目ざめ」とかすれた聲を出した。

「眠けりや、まだ起きなくもいゝよ」

「……ううん」と細君は、またトロ／＼と眼を閉ぢてしまつた。良人は、細君の赤ふくぶくとした片頬をまぢ／＼見てゐたが、思ひ切つて勢よく起き上つた。

雨戸を繰り、井戸端で顔を洗ふと、良人はその足で下の田甫の方へ下りて行つた。田甫の上には霧がもつくりともり、その霧の中に大きな太陽が橙色をして、すぐそこに浮いてゐるやうに見える。蛙がそちこちでグイ、グイと啼く。

彼は尻をはしよつて畦の上に躡み、煙草をふかした。體温と外氣の温度とが、全く飽和してゐる。いつか彼も、霧の中に溶けてむやうにとろ／＼と眠くなつた。彼はそこでも、夢見るやうな氣持で、微塵の波も立たない現在の結婚生活の隠やかさをふつくらと味つた。

二

小一時間ほどしてかへると、細君は掃除をすつかり済して、茶の間の長火鉢には湯をボン／＼たぎらしてゐた。

「いゝ天氣だな。どうだ、けふは奥多摩の方へ出かけて見ようか」良人は晴々とした聲でさう言つて、長火鉢の前へ坐つた。

「えゝ」と細君は、香りの高い新茶をついで良人の方へ差し出しながら、良人の顔をちらりと見て急に顔を赤らめた。そしてうつ向き、しばらくちつとしてゐたが、やがて食卓の下から一通の

手紙を取り出し、

「只今來ましたの、見て下さい」と食卓の上を迂らして良人の前へ差し出した。手紙は細君宛で、差出人は良人の知らない男名であつた。

「まだ封を切つてないぢやないか」

「えゝ、あなたが開けて見て下さい」

「俺はこんな人知らないよ」

「結婚の通知を出したとき、この人にもあなたが出して下さいましたわ」

「覚えてない」

良人は、手紙には觸れずに茶をすゝつてゐた。細君は曇つた顔になり、良人の顔色をうかゞつてゐたが、思ひ切つたやうに自分で開封し、中味を展げて再び良人の前へ置いた。良人はかうした細君の仕草から、その手紙がどういふ種類のものかほと想像が出来た。しかしかういふことは彼の全く豫想してゐないことであつた。

手紙の文句は「貴女の美しき結婚生活を蔭ながら讚美してゐます」といふやうな言葉の使ひ方であつた。文字も肩下りのきさな書き方であつた。全體の意味は……その後私は孤獨な生活をし

てゐる、學校を卒業しても職を求める氣にもなれない。もう日本での生活には堪へられなくなつたから、一人滿洲の野に渡る、永遠にさよなら、といふのであつた。

彼は、顔をつる／＼にして、長いだぶ／＼のズボンをはいたきざで固めたやうな學生を想像して、少し不愉快になつた。しかしそれは單に、さういふ學生に對していつも感ずる一般的の不愉快に過ぎなかつた。それ以上は進まなかつた。細君はしかし、良人は自分を疑つて不快な顔になつたのだと取つた。

「この人は叔父の家へよく出入してゐた△大學の學生でしたが、わたし大嫌ひでしたの」と細君は辯解がましく言つた。

「ふーん……………ご飯」良人はやつぱり澁つた顔のまま飯茶碗を細君の方へ差し出した。細君の顔は泣きさうになつた。

三

二人は割りに遅い方の結婚で、良人は三十五、細君は二十四であつた。それだけ結婚してまだ三月あまりなのに、三年も経つた夫婦のやうに落ちついた生活をしてゐた。良人は年齢より老け

て見え、大ていの方は四十に見た。が、細君の方はあべこべに、誰でもその年齢より三つ四つ若く見た。ぼつてりとした頬や、むつちりとした手首は、まだ娘になつたばかりの女の感じであつた。

彼が彼女と始めて彼女の叔父の家で見合ひをした時、彼は彼女の膝の上に置いた指先の、水仙の葉先のやうなトロリとした圓みを見て、それだけですぐこの結婚を成立さしてもいゝといふ氣になつた。これは男の單純さを示すものであるが、彼に言はすれば「彼女の指先に惚れた」のであつた。

が、案外に彼のこの「惚れ方」が當つた。彼女は年齢こそ喰つてゐたが、肉體も心も驚くほど若かつた。指先のトロリとした圓み、それが彼女の全體に行き渡つてゐた。何處にも角がなかつた。何處にも影がなかつた。内から言へば、波瀾や悲劇を惹き起すやうな尖つた心、解らないやうな暗い感情、といふものがぼつちりとも潜んでゐなかつた。

彼はその三年以前、鋭い神經を持つた陰影の多い女と一年ほど同棲し、結局裏切られてしまつた辛い經驗を持つてゐたので、今度の細君は自分に取つては理想的の女だと思つた。そして事實に於ても、晩春の日のやうな圓かな安靜な生活に入ることが出来た。

結婚して一ト月ほどした或る日、彼は友人の一人から、

「新婚の味はどうだ」と訊かれたとき、

「ねむつたい味だ」と卒直に答へると、友人はそれを變な風に解釋してカラ／＼笑ひ出したほどであつた。

四

良人は朝飯を食べながら、これ等のことを憶ひ出して、そしてきざな學生を想像しての不愉快さは殆んど消えかけてゐた。けれど細君は、良人が食べ終るまでも箸を取らうとしなかつた。良人は始めて細君の顔を見た。

「何を考へてゐるのだね、俺はそんなことを問題にしてないよ」

「……………」

「俺だつてお前と結婚する時童貞ではなかつたんだし、お前にばかり蟲のいゝことは欲求しやしない」

「それぢややつぱりわたしが、この人と變なことがあつたと思つてらつしやるの？」

「俺の眼はそこまで届かないよ。第一そこまで見ようとしなないよ」

「そんな曖昧なことぢや、わたしいやですわ」

「ぢやどうするのさ？」

「すつかり信じて下さらなくちや」

「信じろと言ふなら信じてもいいよ。が、信じなくとも俺には同じことなんだよ」

「またそんなことをおつしやる！ そんならわたしはもう……………」細君はさう言ひながらおろおろとなつた。

正直のところ彼は結婚當初から、彼女が處女であるかないかなどといふことを考へても見なかつた。彼の單純さがさうさせたのもあつたが、一つは人間としての彼女の圓かさが彼にさういふことを考へさせなかつたのであつた。これは彼女に備つてゐる一つの「徳」であるとも彼は思つてゐた。

で、今始めて彼女のさういふ問題を考へさせられたのであるが、眼の前にさういふ彼女を見てゐると、やつぱりよし彼女が處女でなかつたにしろそのために自分の心が曇つて來さうには感じられなかつた。つまりどつちであつたにしろ、彼には問題でなかつた。これは寧ろ本能に近い氣

持であつた。彼はこの氣持を彼女に理解させようといろ／＼努めたが、圓滿な彼女の神経はそこまで働かなかつた。それでたうとう泣いてしまつた。
奥多摩へ出かけることもそれぎりになつてしまつた。

五

その日細君は終日、蒸し暑い茶の間へこもつたきりであつた。良人は仕方なしに、一人散歩をしたり晝寝をしたりして退屈な時を過した。雲雀の聲が座敷の中までよくひびいて來た。

彼はとき／＼、あいつ、處女ぢやなかつたのかな、といふ風にフワリとそれを思ひ出したが、それは泡のやうに他愛もなく消えて何の影も残さなかつた。彼は用事にかこつけて、茶の間へ二、三度彼女の様子を覗きに行つたが、彼女は縫ひものゝ上に深くこゝめた顔を上げようとはしなかつた。

夕方になつた。彼女は襖の向ふから、

「お使ひに行つてまゐります」とよそ／＼しい調子で言つて臺所から出て行つた。が、いつもより三倍ほどの時間を費しても彼女は歸つて來なかつた。彼はちよつと不安になり、手拭と石鹼を

懐に入れ、風呂へ行く風にして、毎夕彼女が買ひ物に出る店通りの方へ出て行つた。けれど彼女の姿は見えなかつた。店通りから横へ入つた静かな屋敷通りの方を見た。と彼女は首を垂れ、長い生垣にひつついてポツリ／＼向ふへ歩いてゐた。

彼は急ぎ足で彼女のうしろへ近づき、出来るだけ穩かな聲で、

「秋子」と呼んだ。彼女はギクツとして振り向いた。その眼は充血してゐて涙が輝いてゐた。彼はそれを見ないやうにして、彼女の先に立つて歩きながら、

「お前はまだあのことにこだはつてゐるのだな、馬鹿な奴だ」と言つた。

「わたし、あなたにあやまらなければならぬことがあります」と彼女は改まつた口調で彼の背中へ言つた。彼は背中がむづかゆいやうな氣がした。

「あの手紙の男との事なら、今朝も言つたやうに俺は別に問題にしてゐないんだよ。それをお前の方でいつまでもこだはつてゐると、俺も義理づくで問題にしたくなるからね。いゝ加減にしろかないと……………」

「あの人との事ぢやないんです。あの人とはわたしほんとに何でもなかつたのですから」「たとへ何かであつてもそれが氣にならないんだよ」

「またそんなこと……………」

「ほんたうだ。これは俺の無神経で言つてるのぢやなく、今朝も言つた通りちゃんとした理由があるのだ。あとで家へ歸つてからまた話すが」

「あなた」

「なにさ」

「わたしは處女であなたと結婚したと、あなたは思つてらつしやる？」

「いやな訊き方だな」

「御免なさい、わたしうまく言へなくて……………でもあなたはどう思つてゐますの？」

道は屋敷通りからだら／＼と、もう暗くなつた田甫の方へ下りてゐた。そして二人はいつかその田甫道へ來てゐた。道端の草の中に螢が二つ三つ水つぼく光つてゐた。彼はそこで立ち止り、彼女の方へ振りかへり、

「ぢやお前は處女ぢやなかつたといふのかね？」と少し語氣強く言つた。と、彼女は倒れるやうに彼の前へ近づくと顔を彼の胸元へぐい／＼押しつけて、

「御免なさい……………御免なさい……………わたしそれをお詫びしなければ……………」と肩を烈しく顫はした。

彼は脚を踏ん張つて、しばらくさうした彼女を抱き支へてゐたが、やがて彼女の顎を下からグイと押し上げ、闇の中にほの白く浮いたその顔をいきなり抱きこんで、強く唇を吸つた。それは長い接吻であつた。

やがて彼は、

「しつかり立ちなさい」とすねてゐる子供に言ふやうに言つて、先に立つて歩き出した。

「で、相手はやっぱりあの學生なのか？」

「いゝえ、いゝえ！」

「ぢや誰だ？」

「……………」

「言へ、すぐ言へ」

「……………」

「言へよ、すぐに言はないと變になるぞ」

「叔父さんです！」

妙な切口上でそれを言ふと、彼女はクラ／＼と眩暈したやうになつてピタリと立ち止つた。

「お前は今朝から何も食べないのだから、食べなきゃいけないよ」

家へ歸つて夕飯の食卓に向ふと彼はさう言つた。が彼女は箸を取らなかつた。彼は葡萄酒を少し飲み赤い顔をして一人夕飯を済した。蛙の聲が小さな木魚を叩くやうに部屋の硝子窓によく反響した。

彼は蛙の聲をきゝながら煙草をふかしてゐた。すると、彼女はふいと立つて、次の間へ入つてしまつた。間もなく荒い息で吸り泣く聲がした。彼はそこへ立つて行つた。彼女は壁の下に突つ伏してゐた。彼は彼女の肩を持つて抱き起し

「いやだね、さう泣いてばかりぢや。俺はお前の言つたことが信じられないのだがね。あの叔父さんが、お前にそんなことをしようとはどうしても思へないんだよ」

「でも、それだけはほんたうなんです！」と彼女は吸り上げながら言つた。

「ぢやそのでん末をすつかり話してしまへよ。そして大びらに俺から赦して貰へばお前も晴々するだらう。すぐに心から赦せる氣になるかどうかは請合へないが、明日の中にも、しんから赦

せる心がひとりで湧いて來るに違ひないから」

「……………」

「叔父さんとさういふことがあつたのは一體いつ頃なんだ？」

「わたしが十八の時です」

「すると、……………今から六年ほど前のことだな」

「わたしは、そのことをもう長い間、思ひ出したこともなかつたのですけれど、今朝だしぬけにあんな手紙を見せられて、それで急にその事が、頭に湧いて來たのです。叔父さんだけを思ひ出したのでは、そんなことは少しも頭に湧かなかつたのに、あの厭味つたらしい學生のことを考へたら、不意にその事が浮び出して來たんです。わたし自分ながらびつくりしてしまいました。さうして思ひ出すともうわたし包んでゐられなくなつたので、それでも今日一日苦しんで考へ、それから打ち明ける氣になつたのです」

彼は彼女の言ふことを凡てそのまゝ受け容れて聞けた。しかし彼はそれには答へなかつた。下手に合槌を打つことは、彼女の氣持を良くか悪くかどつちかに興奮させるに違ひないと思はれた

からであつた。

「妓ぢや仕様がな。こつちへおいで」やがて彼はさう言つて茶の間へ來た。彼女は黙つてついて來た。

「それを打ち明ければ、俺がどういふ態度に出るか、それを考へて見たかい？」

「えゝゝ。でもわたしには解りませんでしたの」

「そのために二人の間に波瀾が起るとは考へなかつた？」

「それはするぶん考へたけれど、しんからそんな氣はしませんでしたの」

「俺を甘く見てゐるのだな」と彼はそれを口でだけ言つて見た。

「そんなことはありませんわ、決してそんなこと考へませんわ」彼女は、それを熱心に打ち消した。彼はそれも腹の底で肯定した。

「わたしは、あの叔父さんのことは、すっかり忘れてゐたのですけど、やつぱりそのころ、今朝手紙をよこしたあの學生がとてゝ厭な態度で言ひ寄つて來たことは、しよつちう思ひ出されて厭な氣持がしてましたの。わたしはその人の方へは自分の顔をまともに向けたこともないのに、あの人はほんとに厭味たらしいし、つこさで付き纏つて來て、その度にわたしは身體のどつかど汚れるやうな氣がしました。だからわたし、この事を、あなたに疑はれたらどうしようかと思ひまし

たの。實際は何でもなかつたのに、どうしてかう氣になるのかわたしにも解りませんでしたの」

「あゝ、その氣持はよく解るよ。誰にもさういふ事があるものだ。だから俺はそれをひねくれて解釋はしないよ。そんなことを波瀾の因にはしたくないよ」

彼はこの答へを、彼女と叔父との問題に對する答へともしたつもりだつたが、彼女には勿論それが通ずる筈がなかつた。また彼も一方では、彼女と叔父との問題をこれだけで片づけてしまふほどの單純な氣持にまでは行つてゐなかつた。何かしらもつと深いところに觸れて行つて、自然に湧いて來る解決を求めてゐた。しかしまた他方ではその問題にこれ以上觸れて行きたくない氣も多分にあつた。これ以上觸れて行けば、何かの悲劇に導くやうな不可解な暗礁にぶつかるとは少しも思へなかつたが、或る不快な嫉妬を感じ出して、そこから自分だけの憂鬱が湧き起りさうな氣がして來たからであつた。

彼は煙草をふかしながらごろりと寝ころんだ。彼女は長火鉢に凭れ、何か言ひ出しさうにして顔をあげたが、溜息をついてまたこゝんでしまつた。

三十分ほど沈黙がつゞいた。その間に、彼の胸の中では、彼女と叔父の問題が妙にくすぶり始めた。で、このまゝに話を残して置けば、それが後へ長い尾を引き、その暗い影を投げかけて、

何か不吉な結果を惹き起しさうに思はれて来た。彼の氣持は積極的になつた。

「あの叔父さんは、お前のほんたうの叔父さんぢやなかつたね？」

「え」と彼女は彼が口を開くのを待つてゐたやうに「去年亡くなつた叔母さんの方がほんたうの叔母さんですよ」

「十八といふとお前は女學校の……」

「女學校を出た年です」

「その時叔父さんはだしぬけにそんな事をしたのかい」

「……………」

「遠慮なしに言へよ、何を言つても構はないから。話が残ると、こつちの神經がその残した部分へ悪く働くからね」

「わたしにはだしぬけに思へましたけど」

「叔父さんは前から機會を狙つてゐたのぢやないかね？」

「わたしには解りませんでしたわ」

「とにかくそれはどういふ機會だつたの？」

「その少し前、叔母さんが女中をつれて南湖院へ入院しましたの」

「あゝ、叔母さんは肺をやられてゐたのだつたね」

「えゝ」

「そしてその時、お前は恐れたり拒んだりはしなかつたのかい？」

彼女はさう訊かれるとサーツと顔中を赭らめた。

「どうなんだ？ かうなつたら露骨に言つた方がいゝんだよ」

「でもわたしはその時、なんにも知らなかつたのですもの」

「處女と、處女でないとの區別を知らなかつたといふのかい？」

「それは知つてましたけど」

「本能的に恐れたり拒んだりする筈だがね」

「でもわたし、叔父さんが好きだつたのですもの」

「それとこれと譯が違ふよ。まさかお前も、處女を捧げてもいゝといふ意味で叔父さんが好きだつたのぢやないだらう？」

「そりやさうですけど、そこのところ何だかぼんやりしてましたの……」

こゝまで話して来て、彼は豫期通りある嫉妬に襲はれた。それもパツと燃え立つやうな嫉妬ではなく、しめつぽい煙が生あつたかい熱を含んでもや／＼と湧き起るやうな感じのものであつた。彼は惱ましい眼付で、ぼつてりとした彼女の襟足を見上げながら、

「……………そいつアしかしあんまり呆んやりすぎるな。だがそんなものかなア！」と感心したやうに言つて「一體お前が叔父さんの家に引き取られたのは、その何年前なのだね？」

「十五の春ですから、三年前からですわ」

「その時始めて叔父さんを知つたの？」

「いゝえ、その二年前、まだ叔母さんの家にゐた時分で、叔母さんもまだお嫁にならないころ、

叔父さんはよく遊びにいらしたの」

「へえ、そしてその頃はどうかんだ」

「わたし、その頃、叔父さんのお嫁になりたいと思ひましたわ」

「そんな年頃で？ お前も案外わせだつたのだね」と言つたが、そこで彼は、叔父の慾望に對して恐れたり拒んだりしなかつたらしい彼女の氣持が解けたやうに思つた。

「いゝえ、そんな意味でなしにですの。たゞ好きだつたから」

「ぢや叔母さんがお嫁になつた時、お前はがっかりしたらう？」

「かへつて嬉しかつたわ。叔父さんが親戚になつたのだから、こんどは遠慮なしに叔父さんのお家へも遊びに行けると思ふと、ほんとに嬉しくなりましたわ」

「なるほどね！」彼は腑に落ちたやうに云つてぼんやり天井を見てゐた。やがて、

「それで、さういふ事が何年つゞいたのだ？」

「何ですの？」

「いや、話は元へかへつてサ、お前の十八の時の……………」

「何年なんてそんな……………」

「ぢや幾月。」

「幾月なんて……………」

「ぢや何度？」

「……………その次の日あたしは南湖院へ行つてしまつたから、ほんの……………」

「だつてそこから歸つて来てまた……………」

「もうそれきりわたしは歸つて來なかつたのですわ。叔母さんの顔を見たら、わたしは急に悪い

事をしたとはつきり解つて来ましたの。それで女中を代りにかへして、わたしはずつとそこに看護してゐましたの」

「叔父さんが迎へに来なかつた？」

「いえ。十日ほどして来たけど、その時は叔父さんはもう東京での勤めを止めて、京城へ行く仕度をして来たの。京城へ行く話は前からあつたのですけど、急に一人で極めてしまつて、次の日すぐ發つてしまつたのですの。後で解りましたが、叔父さんも子供のわたしにそんな事をしたことを非常に後悔して、そして東京にゐたのではまたさういふ機會が來ることを恐れて、それでその時思ひ切つて京城へ行つてしまつたのださうです」

「そんな急に發つて、叔母さんが變に思はなかつたのかね？」

「でも叔母さんの長い病氣で、お金はすつかりなくなつてゐたし、東京の勤めより倍も割のいい京城へ行つて貰ふことは叔母さんのお願ひでもあつたのですもの」

「なるほど。で、お前は叔父さんに去られて性慾的に淋しくなかつたかね？」

「そんなことちつともありませんでしたわ。たゞそんな意味でなしにとき／＼會ひたいと思ひました。でもさう思ふことも我慢してました。それから一年半ほどして叔父さんは京城を引き上げ

て來ましたが、その時も叔父さんに會ふのを恐れましたの。ところが會つて見ると叔父さんは前とすつかり變つてゐました。もうわたしの肉親の叔父さんのやうになつてました。それでその時からわたしは叔父さんを恐れなくなつたし、前にあつた事も夢にあつたことのやうにすつかり忘れてしまへたの」

これで彼は、眼の前にもや／＼湧き起る、しめつばい煙がだん／＼明るく晴れて行くのを感じた。

七

残る問題はもうなかつた。そして夜は更けてゐた。彼は軽い氣持になり、彼女が次の間に吊つた蚊帳の中へ入つて寝た。

少し眠りかけて頭がぼんやりして來たとき、彼はまた眼の前にむせつばいものが渦巻くを感じ、それで變な風に目がさえて來た。暗い蚊帳の中でまぢ／＼と眼を開いてゐると、眼の前のむせつばいものはますます濃くなるやうに感じた。これは寧ろ生理的のものだと彼は思つたが、だから頭では彼女の問題に對してすつかり解決がついてゐながら、この生理的のものに支配されて

彼は少し意地悪になつて行つた。

「おい、もう眠つたのか？」

「いゝえ」と彼女はすぐ答へた。

「あの學生は馬鹿な奴か、圖太い奴か、どつちかだね」

「……………」彼女は答へなかつた。

「人の細君へあんな手紙を送れば、どういふ結果になるか、それを考へずにやつたとすれば大馬鹿野郎だし、あべこべにそれを考へた上でわざとやつたとすれば恐ろしく圖々しい奴だ。相手が俺でよかつたが」

「……………」それでも彼女は黙つてゐた。

「ところで、叔父さんとお前の問題だが、それを俺が赦せなかつたらどうする？」

「……………」

「とにかく俺に取つてはいゝ氣持のものぢやないからね」

「……………」

「おい、眠つたのか？」

「……………」いゝえ」

「明日、俺は叔父さんに會つて來ようかね」

「……………」

「會つて、叔父さんの責任を問ひ詰めようかね」

「……………」

「お前の罪は赦せると假定しても、叔父さんの罪は赦せないからね」

「……………」

「よし叔父さんの罪も俺は赦すとしても、人道上赦すべきものでないかも知れないからね」

「……………」

「叔父さんは二重の罪を冒したことになるんだぜ。一つはお前の處女を汚したこと、一つはそれを秘密にして、つまり俺を欺いてさういふ女と結婚させたこと」

「……………」

「何しろ俺は日本一の間抜けだよ……………」

彼はさう言つては彼女の反應——彼がいま無意識にも欲求してゐるものをしつくり充たしてく

れるほどの反應を待たつたが、それはつひに無駄であつた。彼は非常な物足らなさを感じた。やがて妙な空ろな寂しさをも感じて來た。で、彼は黙つてしまつた。まもなく蒲團の中で啜り泣く聲がもれて來た。

八

「あなた、あなた、すぐお目ざめになつて、わたし寢すぎてしまつて……………」

翌朝彼はさういふ彼女の聲で、びつくりして眼を開いた。

「もう何時だ？」

「九時少し前です」

それは彼が勤め先へ到着してゐなければならぬ時間であつた。彼は慌てゝ起きようとしたが、ふと思ひ直し、再び頭を枕へつけて、

「今日は休まう、頭も痛むし」と言つた。

「御免なさい、御免なさい……………」彼女は一生懸命に詫びた。

それから一時間ほどして二人は朝の食卓へついた。彼女の顔はひどく蒼かつた。いつもの赤ふ

くぶくとした頬は生白く見えた。まぶたが腫れ上つたやうにぼつくり膨らみ、唇は病的に赤かつた。さういふ顔色を彼は結婚して始めて見た。彼はそれをしみじみと見た。しかしよく見ると、さういふ顔色の中にも、彼に對する反抗的の影は少しも宿つてゐなかつた。悪意ある不愉快の色も全く浮んでゐなかつた。只素直に正直に純粹に自分だけを見詰めて苦しんでゐる色であつた。

彼は、彼女を抱いてやりたいほどの氣持になつて言つた。

「ゆうべは意地悪を言つてすまなかつた。寢るまで明るい軽い氣持だつたのだが、暗い中で寢つかれずにおたら、つひあんなことを言ふ氣になつたんだよ。今朝はもう元の氣持にかへつたから安心してくれ。俺は、お前といふ女は罪といふ影をぼつちりとも宿し得ない人間だと思つてゐるのだよ。罪を冒してもそれがそのまゝいつまでも残つてゐるやうな人間とは違ふと思つてゐるのだ。たとへれば、過去の罪を古傷として、後になつても自分からほぢくりかへし、その傷をますます大きくしてそして不必要な悲劇を惹き起すやうな人間がある、殊に女にそれが多いが、その反對に、過去の傷を、木の幹の傷のやうに、成長するにつれて新しい組織で埋めてしまつて何の跡も残さない人間がある、本能的にさうなる人間があるが、幸ひにもお前はその種の人間なのだ。さうなれば古傷は古傷ぢやなくなる。だから俺は、昨日手紙をよこした學生との場合でも、

過ぎたことを見ようとはしないと云つたのだ。第一見えないのだからね。これは叔父さんとの問題に對しても同じことだよ。ところがお前は昨日一日、叔父さんとの問題を自分からほざり出しその古傷を探さうとしてゐるやうなので内心ヒヤ／＼してゐたのだ。が、俺も悪かつた。古傷を探させるやうなことを訊いたり言つたりしたからね。殊にゆうべは既にその古傷を發見したやうにして意地悪く出て悪かつたよ。が、もうこの話は止さう。そしてすつかり忘れてしまはう。實際古傷はどこにもなかつたのだからね。叔父さんに對しても何とも思つてやしないよ。第一あの叔父さんに對して何とも思ふことが出来ないよ。あの叔父さんも古傷を新らしい血と肉で埋めてしまつた人だからね。それも只の本能からでなしに、精進努力してさうしたのだから、非常に尊い感じがする。しかも冷たい尊さではなく、暖かい親しみに包まれた尊さだよ。實際あの叔父さんとしばらく話し合つてゐると、何となし澄んだ静かな世界へ引きこまれてひとりで頭が下るやうな氣がするからね。だから今後幾度あの叔父さんに會はうと、俺はお前とのさういふ事件を少しも聯想できないだらうと思ふよ。お前だつてさうなのだから、これで何んにもなくなつた諱だ。根本からの解決がついたのだ。もう大丈夫だよ。それにしてもお前は凡てを正直に話してくれて非常によかつた。昨日のお前の正直な話しぶり、俺は餘計に、現在のお前は過去の傷を新

らしいものですつかり埋めてしまつてゐることを確めたよ。もうこれでおしまひ！」
「……………えゝ、えゝ！」と彼女は、彼の顔をすつかり見詰めながら涙をホロ／＼落した。美しかつた。

九

それから一時間ほどして、二人は郊外の公園の杉森に圍まれた池のはたのベンチに腰を下してゐた。まだ朝の靄の消え切らない水の面に、白鳥が三四羽、軽く静かに浮んでゐた。柔かくしつとりと湛へた濃緑の水の色と、大きな水玉のやうな純白の鳥の色とが、何とも言へない澄んだ朗かな静けさをあたりにひろげてゐた。それを無心に見てゐる彼女の顔には實に圓かな和やかな色が浮んで來た。彼はそれを片頬にほの／＼と感じてゐた。

さうしてゐるうちに彼は、それまで幾分もや／＼と晴れ切れずにゐた眼の前が、サーツと洗はれるやうに晴れ渡つて行くやうな氣がした。そしてこの晴れ方こそ本物だといふ氣が心から感じられた。

粉雪の降る夜

粉雪の降る夕方、吾妻橋から白鬚の方へ渡るボンボン蒸汽の中であつた。船内は石油のほひがして暗く寒かつた。Kは、煙草をふかしながら窓越しに、暗い河面へ注ぐ雪脚を眺めてゐた。と、となりから、

「すみませんが」と言つて、細い指先にはさんだ煙草をさし出したものがあつた。見るとそれは若い女だつた。火をすひつけてやりながら更によく見ると、白粉と口紅をこつてりと塗りつけたこは張つた顔半分が、すひつける火に染つてほの赤く映つた。そして甘ずつばいやうな匂ひが鼻先に漂つた。Kは直感した。これは川向ふの暗い街にすむ女であらうと。

さうとわかるとKは、少し酒にも酔つてゐたので、自分でも知らぬ間に持ち前の遊蕩心を湧か

してゐた。女はまた商賣柄すぐそれを感じたらしく、ぐつとKの方へからだを寄せて来て、

「寒いですわね」と言つた。

「仕方がない。お互ひに寒くないやうにすることですね」

すると彼女は、紅色のショールの中へ顎を埋めて、男の氣持に絡むやうに、ふふつと笑つた。

船が着いて岡へ上ると、Kは彼女と並んで歩き出した。彼は洋傘を持つてゐたが、それはわざ

とささずに、彼女のさした蛇の目の中に入るやうにして歩いた。しばらくして、

「どちらまで？」と彼女がきいた。

「寺島まで」

「さう、ぢや、ご一緒にねがひますわ」そこで彼女はKの方へちらりと笑つて見せて「お差しつかへなかつたら、あたしの家まで送つて下さらない」

来たな、と思つたKは、すかさず、

「ええ、お送りませう」

二十分ほど歩くと、明るい通りから暗い路地へ入つた。そこには雪が蒼白く積つてゐた。Kはやがて例の暗い街の中へ入り込むだらうと豫期しながら歩いてゐた。が彼女は、三四度折れ曲つ

た路地角の暗い家の前へ立つて、その雨戸の鍵を開けた。

「ちよつと待つてね」

彼女は中へ入り、梯子段をみし／＼上つて行つた。三四分ほどして、

「お上りなさいよ」と梯子段の上から忍び聲で呼んだ。それがいかにも祕密の快樂といふやうなものに豫想せしめる聲で、Kは思はず興奮した。

二階の座敷は四疊半であつた。鏡臺と食卓と、瀬戸火鉢とリリアンの飾りをつけた電燈と赤いメリンスの座蒲團と、すべてはあの一廓の中の一室を聯想せしめた。Kはオーバを着たまゝ坐つて言つた。

「君は獨立で商賣をしてゐるのかい？」

と彼女は、

「レツ」といふやうな目つきをして「そんなこと訊きつこなしよ」そして火鉢越しにKの手を握り「あんた、今晚、泊つてもいいんでせう」

そこで改めて彼女の顔を見ると、顎が尖り眼が冷たく唇が薄く、かういふ商賣をするにはひどく不向きの顔であつた。

「泊つてもいいが、大丈夫かい？」

「大丈夫よ、あたしの家ですもの」

「何だかいやに森として、氣味が悪いな」

「そんなことを言つたつて、もうかへしやしないわ」

「それに馬鹿に寒い。火をおこさうよ」

「そんなこと面倒くさいから、もう寝ちやひませうよ」

「ぢやなんか食べよう。君も夕飯はまだなんだらう？」

「ええ、でもそのうちナンキンそばが来るから、それを取つて食べればいいぢやないの」

彼女は、Kの手をしつかり握つた上に、尙も頭から壓へつけるやうに、そんなことを言ひながら、Kをその場から一步も動かすまいとした。ばかりでなく、一種いふべからざる壓力を持つた彼女のそぶりが、彼をその場にぐい／＼と押しつけた。

このためにKは、遊蕩氣分の大部分を打ち消されてゐたが、彼女がこんな風になつたのも、彼女がその一廓から獨立して單獨に人目を忍ぶ商賣をしてゐる弱味から自然に出て來たものだらうと解して、結局彼女の言ふなりになることにした。——自分の物好きをうすら寒く冷笑しながら

うしろの窓の硝子へ、ときどき粉雪がサラサラと當つた。

二

その夜更けであつた。

Kが便所へ立つて部屋へかへつて來ると、つけといた筈の電燈が消えてゐた。Kは、少し變に思ひながら、手探りにスイッチをひねつた。そして寢ようとして、ぎつくりして飛びのき、棒立ちに突つ立つてしまつた。

そこには、Kの足許には、顔に白い布をかぶつた人間が、しやつきりと寢てゐるではないか。

その枕許の小箱の上には、花と線香と蠟燭とがある。——それは死人であつたのだ。

瞬間、夢かな、とKは思つた。さう思ひながら部屋を出ようとしたが、兩脚が硬直して動かなくなつた。彼は叫ぼうとした。

と、次の瞬間、Kは息のつまるほど彼女に絡みつかれてゐた。彼女は何にも言はず、まるで暴力で彼を部屋から引き出した。そして廊下をへだてた部屋——そこが彼の寢てゐた部屋であつた

——そこへ彼を引きすり込むや、Kを蒲團の上へねぢ伏せた。そして彼の胸の上へ折り重なつて彼女は唸るやうに言つた。

「あんたは、こんな小さな家の中で戸惑ひしたりして……どうせ後で見て貰ふつもりだつたけど……あれはあたしのお父つあんよ……今朝がた死んでしまつたのよ……」

今までの彼女の態度の不可思議さが初めて解つた。彼は言つた。

「……苦しい。手を放して」

「こはがらない？ 逃げ出さない？ あたし、殺されても逃がしやしないよ」

「……とにかく手をはなして、わけを話せ」

「話すからこのまま蒲團の中へ入つてよ！」

下手に逆らふと殺されるぞ、とKは思つた。それほど彼女には一種の殺氣があつた。でKは彼女の言ふなりになつた。すると彼女は、片手を彼の首に捲きつけ、口惜しさうに齒ぎしりをしながらかう言つた。

「お父つあんが可哀相です。だからあたしはこんなに口惜しがつてゐるんです。あんたは迷惑でせうけど、災難でせうけど、あたしあんたに頼みがあるんですから、助けて下さいね、助けて下

さうね……」

「それぢや何だか解らない。順序を立てて話せよ」
 そこで彼女は漸く起き上り、着物をひつけて寢床の上に坐つた。その容子は、悲しみに壓倒されてゐるといふよりは、或る興奮で緊張しきつてゐるといふ風に、蒼白い頬を顫はしながら話し出した。その話は――。

三

一昨日の朝であつた。彼女の兄が泥だらけのズボンで、彼女のこの部屋へ踏み込んで来た。
 (この部屋は、Kが想像したやうに、彼女の獨立した棲家ではなかつたのである。彼女はやつぱり近くの一廊の中で稼いでゐるのであつたが、避難所兼休養所として、ひとりでこの部屋を借りてゐるのであつた。で、一廊の方で、朝、泊り込みの客をかへすとこの部屋へ来て一眠りぐつすりと眠ることにしてゐたのである)

さうしてやつと眠りついたばかりの彼女を、兄は叩き起し、その枕許に突つ立つて、
 「おい、金を出せ」といつたのである。まるで強盗でもするやうに。

彼女は、さういふ態度に出て来た兄を未だ會つて見たことがないので、勘からず驚かされた。気が狂つたのではないかとさへ思つた。

今までの兄は、青年らしい興奮を見せることはあつても、彼女に對してはいつも、見らしい寛大さと、彼女の商賣に對するつつましかやかな同情と理解とを寄せてゐた。また兄は彼女に對してさうしなければならぬ義務もあつた。といふのは、彼女はこの兄のために身を賣つたのであつたから。

しかし、この兄のためにと言つても、單に金が目的で身を賣つたのではなかつた。一口に言へば、兄の主義の實行運動の資金を得ようとしたためであつた。その一年ほど前、兄はK町のモスリン工場へ勤めてゐた當時、或るストライキの刺戟から熱烈な反資本主義者となつた。そして工場から追ひ拂はれた。兄はその足で實際運動の仲間に入つた。同時に資金の必要に迫られた。と、兄は、當時場末の怪しげなカフェーに働いてゐた彼女の所へ来て、ローザ・ルクセンブルグといふ女革命家の話をして、

「同志のためには牢獄にも入り、殺されもする。お前がその身を賣るくらゐ何でもない筈だ」と言つて、何百圓かの資金をつくるため此一廊へ身を賣ることを彼女に頼んだ。はじめ一ト月ばかり

りは彼女はそれを頑強に拒んだが、まるで死にも狂ひの兄の熱と力とはつひに動かされた。そして承諾した。

兄は泣いて感謝した。彼女はまた、曾つて非常に不幸な結婚をしてゐて、人の一生なんでもはどんな生き方をしても結局はみんな同じことだ、幸も不幸もあつたものぢやない、といふ捨て鉢な考へを一方に持つてゐた時なので、いざ暗い街へ身を沈めると腹をきめると、それほどそれが苦痛でも厭やでもなかつたのである。

さうして彼女がその街へ入つて間もなくであつた。或る日、父親が突然、一人の巡査に伴はれて、彼女が住みこんでゐる家へ訪ねて來た。父親は、丸ノ内の或る役所の小使兼掃除夫を勤めてゐたが、その勤めに出る時の小倉服で、彼女の前に立ちはだかつて叫んだ。

「けふ限り、親子の縁を切るぞ！」

そこで彼女はうつかり、

「どうして？」と訊きかへすと、父親はいきなり彼女の頬をなぐりつけて、

「馬鹿、くたばりやがれ！」と叫んだ。「貴様の兄は國賊になりやがつた。貴様は畜生になりや

がつた。二人共、今日限り、俺の子供ではないぞ！」

父親はさう叫びながら、興奮で顔中を涙にまみらした。すると、ついて來た老巡査も興奮して言った。

「あなたは國民の手本だ、人民の模範だ、國寶だ、政府から表彰される人だ。そして死んだなら銅像に立てられますぞ！」

父親はますます興奮し、地んだを踏みながらまた叫んだ。

「わしはたつた二人の子供しかない。その二人を今勘當するのだ。わしは飢ゑ死んでも、二度と子供の世話にはならぬぞ！」

老巡査は、父親の肩へ手を置いてまた言った。

「だれがあなたを飢ゑ死にさせるものか。日本中の人が、死ぬまで幸福に暮さして上げます！」やがて父親は泣き泣き引き上げて行つた。

かういふいきさつ、即ち彼女は、兄の主義のために身を賣らされ、その身賣りのために親子の縁も切られた、といふいきさつの後だつたので、兄は、その責任を一人で背負つて、月に一度は必ず彼女をその暗い家に訪ねて來た。そしてまことのことつた言葉で彼女の安否を訊ねた。彼女は、兄のその生眞面目さが少しをかくしくもなつて、いつもかう答へた。

「淋しくも辛くもないわ。平氣よ」

しかしほんたうを言へば、彼女は何が何だか解らずに夢中で生きてゐるのであつた。今の暗い生活に對してもさうであるし、父や兄に對してもさうであつた。父の言つたこと、したこともほんたうに思はれ無理もなく思はれるし、兄の言つてゐること、してゐることもほんたうに思はれ當然のこのやうに感じられた。また老巡査の言つたことも嘘とも思へなかつた。父はほんたうに國家から表彰されて、生涯幸福に暮せさうにも思はれた。

彼女はこれらのことを考へて、結局どれが最も正しくほんたうのことか解らなくなつたまま、最後に自分の現在の上の考へ及ぶと、すべてを投げ出してかう言つた。

「どうとも勝手にやりやがれ」

兄は、三月に一度の割合で、彼女の乏しい墓口から何十圓かを取り上げて行つた。その度に兄は、いつもよりは深い同情と理解をこめた言葉で彼女の職業の辛さを慰め、その上、例のローザ・ルクセンブルグの牢獄生活の話をした。それを話す時の兄の顔は、熱と力で赤くなつた。そして大きな額が妙に尊く光つて來た。彼女はついホロリとなつて、兄のためには死んでもいいと思つた。

さうして一年ほどした一昨日の朝、その兄が、まるで強盜のやうな身なりと劍幕で彼女の枕許へ立ち、金を出せ！ と叫んだのである。彼女がびつくりし、兄は氣が狂つたのではないかとさへ思つたのも無理もなかつたのである。

四

彼女は蒲團の上へ立ち上つて、兄の肩をゆすぶりながら大きな聲で言つた。

「兄さん！ どうしたの？ しつかりしてよ」

と、兄はあべこべに彼女の肩をゆすぶつて、

「大きな聲を出すな。俺は今、人を殺して來たんだ。……今朝、暗いうち、踏み込まれて、俺は逃げながら射つてやつたんだ」

「……………」

「だから、もう一刻もぐぐづしてゐられないんだ。早く金を出せ」

「金を持つて、どこへ行くのさ」

「上海へ高飛びするのだ」

「だつて、あたしに、そんな金はないよ」

「馬鹿いへ、貯金があるはずだ」

「……………」

「まだ解らんか、貴様も射つぞ」

さういふと兄は、上衣の内ポケットから短銃を取り出した。それを持つた手が興奮でふるへてゐる。その顔は殺氣立つて、醜く、引きつってゐる。そして、それ以上いらさしたなら、兄はほんたうに引き金を引かねない有様である。

彼女は、箆筒の抽斗から、貯金の通帳を取り出して、兄の手に渡した。すると兄はそれを彼女の手へつつかへして、

「貴様が行つてさげて来い。ありつたけさげて来い」

彼女は、何もかも滅茶苦茶になつちまへ、と自分に言ひながら寢巻を着物に着がへて外へ出た。

金を下して歸つて来ると、兄は梯子段の下に立つて、ズボンの泥を落してゐた。彼女はそこで黙つて金を渡してやると、それを碌にも見せずポケットへ押し込んで、

「ありがたう。これであと三年後を待て。でなけりや五年後を待て。いいか、俺のすることを信じてゐろ」

さういひながら兄は梯子段を走り上つた。そして、

「おい、俺の靴はどこだ、靴がないぞ！」と叫んだ。二階へ上つて靴のことを言つてゐるところ

兄はよつぽど慌ててゐたのである。

「靴は下にあるぢやありませんか」

「よし、解つた。大きな聲を出すな」兄はさう言ひながらまた梯子段を走り下りて来て、

「おい、もつと金がないか？」

「それがありつたけよ」

「おかみ（彼女を抱へてゐる家の主婦のこと）から借りて来い」

「だめ。もう借りられるだけ借りてゐるのを見さんも知つてゐるでせう。もう一錢だつて貸してくれやしないよ」

「よし、そりや悪いことを言つた。そこでいいか、タクシーで中央線だぞ。うまく行きア、モスコーだぞ」

そんなことを言ひながら兄は靴をはいて、狭いたたきの上で足踏みをしてゐたが、やがて硝子戸を開けて、野良犬のやうに飛び出して行つてしまつた。

彼女は、呆然としてしまつた。世界中がガタガタにぶち毀れてしまつたやうな気がした。彼女は、玄關の上り段へ腰を掛けて、いつまでもちつとしてゐた。

と、昨夜の十時頃である。彼女はいつもの家の障子のかげに坐つて、そこへうろついて来る男を呼んでゐた。そこへ、背廣を着た男が入つて来て、いきなり障子の横の扉を開け、

「お前の名は何といふのだ？」といふ。彼女は、それが刑事だとわかつたので、素直に名をいつた。

「それが本名だね？」

「さうです」

「ちや、ちよつと来い。頼みがある」それから少しくだけた聲で、「寒いから着物をどつさり着て出るがいいぜ」

いつもとは調子が變つてゐる、と思ひながら彼女は、コートを着、ショールを掛け、手袋をはめて外へ出た。背廣の男はそれを見て、

「よし、その支度ならいいだらう」

街角まで来ると、そこに一臺のタクシーが待つてゐた。彼女は、その男と並んでそれに乗せられた。

タクシーが走り出してしばらくしてから、彼女はやつとかう思つた。

——人を殺したといふあの兄のことで、警察へ呼ばれるのだらう。

タクシーは、夜更けの街の中を可なり長い間走つて行つた。さうして着いたところは大きなコンクリートの建物の玄關先であつた。背廣の男は、彼女をそこで下して、建物の裏へ廻つた。そのトタン塀の木戸を開けて、地下室へ下る段々を下りて行つた。ドアを開けて一室へ入つた。そこには、金ボタンの服や背廣を着た男が四五人ゐた。みんなストーヴを圍んで、中の二人は夜食の辨當を食べてゐた。男の臭氣が、ストーヴの熱にむされて、むつと彼女の鼻を打つた。

「御苦勞、これかい？」

「これだ」

「汚ねえ白首だな」

「まだいい方だ」

そんなことを言ひ合つた。それから背廣の男は、彼女を金ボタンの服を着た男の前へ連れて行き、

「ぢや、お頼みします」と言つた。

金ボタンは、立ち上り、外してゐた襟のホックをはめながら、

「お前の商賣はなんだ？」と言つた。

「……………」彼女は黙つてゐると、

「罰當りの商賣をしてるから、碌なことはないぞ」さうして、背後のドアを押し開け「こつちへ来て見る」

その部屋は、石膏壁のまつ四角な部屋であつた。まるで棺の中のやうであつた。隅に一つの寢臺が置いてあり、そこに一人の老人が寝てゐた。

「お前は、このお爺さんを知つてるかい？」

金ボタンは、突然さう言つた。その老人は暗く陥ち込んだ目をつぶつてちつと仰向けに寝てゐる。見ると、それが彼女の父親だつたのである。一年前に彼女を勘當して、それきり顔を見せなかつた父親だつたのである。

五

「ぼやぼやしてゐちや駄目だよ」と金ボタンは言つた。「もう少しでお前のお父つあんは凍え死ぬところだつたんだ。今日の夕方省線の停車場の便所の中につ倒れてゐたんだぜ。それをここへ連れて来てやつたんだ。それから醫者を呼んで診察させると、身體もひどく弱つてゐるが、それよりこの寒さで手足の自由が利かなくなつたんだらうといふんだ。こんな年寄りをそんな目に會はせて、お前は罰が當るとは思はないか」

「……………」

「そこでだ、とにかく家へかへしてやらうとして、住所を訊いたが、爺さん容易に言はない。それをやつと言はして、その家へ使ひをやつたところ、そこには鍵がかかつてゐて、誰もゐないといふ。お前は、こんなお父つあんをたつた一人で住まはして置くのか？」

「……………」

「仕方がないので、それから身寄があるかないか、息子か娘があるかないか、それを訊いたが、またそれも容易に言はない。それをなだめすかしてやつとのことで、お前の名とお前のゐる場所

をきき出したのだ。一體お前は誰のために商賣をしてゐるのだ。親のことも構ひつけないで商賣してゐるやうな奴は、一日も生かして置けないぞ！」

「……………」

三十分の後、彼女は父親をそこから連れ出すことにした。警察でタクシーを貸してくれた。でそれへ父親を乗せて、彼女が骨休めのために間借りしてゐる寺島の家へ連れて来た。

二階の彼女の部屋へ蒲團を敷き、運轉手の手を借りて父親を寝かしてから、彼女は初めて父親へ言つた。

「お父つあん、かんにんしてよ、かんにんしてよ……」

しかし、父親は何とも言はない。つむつた目を開けようともしない。

「お父あん、何か食べたい？ なんでも取つて来るから、いつてよ。何がいいの？」

それでも父親は口を開かない。ただ、彼女が口を開く度に、その額に暗い影のやうなものが宿るばかりであつた。

「お父つあん、お父つあん！」

彼女は、父親の顔へ口を寄せ、泣きさうな聲で叫んだ。と、父親の頬には、堪らなく苦痛の色

が浮んだ。

彼女はその時になつて初めて、父親の頑固な沈黙と、その苦痛の色との謎を解くことが出来たのである。——一年前、自分はこの父から畜生と呼ばれ、そして勘當されてゐるのだ。さうして現在もその畜生の生活をしてゐて、勘當されたままになつてゐるのだ。父が自分の言ふことを聞かうとせず、顔も見ようとしないのはそのためだと。

彼女はもうものを言ふことを止めた。黙つて外へ出て、まだ起きてゐる蕎麥屋を探し、あたたかいものとお酒を取つて来て父親の枕許へ置いた。しかし父親はそれに振り向きもしなかつた。

もうどうしていいか解らない。とにかくかうして幾日か一緒に暮すうち、父親の心も和らぐだらう、それを待つより外はない。さう思ひながら、火鉢に靠れてゐた。

トタン屋根に、あられがサラサラとこぼれて止んだ。そして夜は更けて行つた。

夜明けに間近い頃であつた。彼女は火鉢に靠れたまま、ついうとうととした。と、父親が妙な呻り声をあげた。はつとして眼を開くと、父親は、痩せ細つた片手をあげて、宙を掻き廻してゐる。彼女は傍へ寄つてその手を持つてやりながら、

「お父つあん、どうしたの、夢？ 夢？」と訊いた。

すると父親は、彼女の手をしつかり握つて自分の胸の所へ持つて行つた。

「胸が苦しいの？」

父親はかすかにうなづいた。と思ふと、眼を開けて、彼女の顔をまじまじと見守りはじめた。

やがてその目から涙がぼろぼろこぼれた。彼女はどうしていいか解らなくなり、

「お父つあん、お父つあん！」と呼びながら、ハンケチでその涙を拭いてやつた。が、涙は止め度なくこぼれる。——しばらくして、瞳孔が大きく開いて来て、息を一つ大きく吐いたかと思ふと、ガクリと顎を引いた。父親はそれきりで死んでしまつたのである。

六

父親は、何が原因で死んだのか、彼女は先づそれを知りたかつた。それから、父親のからだをどう始末すればいいか、次にそれを考へねばならなかつた。彼女は、その前日、ありつたけの金を兄に取られてしまつてゐたので、父親のからだを、火葬場へ送ることも出来なかつたのであつた。

彼女は、夜の明けるのを待つてその家を出た。幸ひ、階下に住んでゐた一家族がその十日ほど

前、他へ引つ越してしまつてゐたので、父親の屍を二階へ寝かしたまま、玄關の戸に鍵をかけて外へ出た。

先づ彼女は、父親の勤めてゐた役所へ行き、父親の最近の容子を訊いて見た。が、だれも小使兼掃除夫の父親の容子などを注意してはゐなかつた。唯一人、給仕の少年が、前日の父親の容子に就てこれだけを語つた。

「昨日のおひる頃、S警察署から電話がかかつて来て、それで出て行つたきり歸らなかつたんですよ。何だかとても顔色をかへて慌てて、辨當箱を置いて行つたり取りに來たり、また置いて行つたり取りに來たりしてゐました」

これを聞いたとき彼女は、からだ中がゾーツとするやうな興奮を覺えた。人を殺したといふ兄がつかまつて父親は警察へ呼び出されたのに違ひないことが解つたからだ。同時に父を行き倒れさせたほどの激動はそこから來たのであることが解つたからだ。父親の死の原因に對する疑問がはつきり解けたと思つたからだ。

この時である。今まで解らなかつたすべてのこと、どれが正當で、どれが間違つてゐるか、何がほんたうで何が嘘であるか、それらが痛いほど彼女の眼の前に現はれて來た。滅茶苦茶になつ

ちまへ、どうとも勝手になりやがれ、と捨て鉢にしてゐた今までの生活のすべてが、彼女の前に整然とした形を取つて現はれて来た。その彼女の目には、父の死の原因をつくつたと思はれる兄の行動も警察の仕打ちも全く映らなかつた。ただ、老いぼれた父親の小さなからだを土塊のやうに踏みじつて行く、途方もなく偉大な、そして人造人間のやうなからくりを持つた怪物がのしのしと歩いて行く姿が映つた。

彼女は強く首を振つた。そしてしつかりとした足どりで歩き出した。とにかく父親の葬式を済ますだけの金を工面しようと。

彼女は叔父の所へ行つた。が、玄關ばらひを喰はされた。いとこの家へ行つた。そこでも断られた。もう一人のいとこの所へ行つた。そこでも断られた。

彼女は上野驛の便所へ入つた。そこで彼女は微笑さへしながら顔へ白粉と紅を塗つた。そして口入屋へ出かけた。お妾にでも達磨茶屋の女にでもなりますからと、その前借を申し込んだ。がその場で金を渡すことは絶対に出来ないといふ断られた。

もう手段は盡きた。彼女は父親の屍のそばへ歸るために吾妻橋からボンボン蒸気に乗つた。尙も何かの手段にありつかうと考へながら。

X

彼女は、Kを相手にこゝまで話して、最後にかう言つたのである。

「あたしはさうしてあなたをこの家へ連れて来たんです。何のためにつれて来たか、もうよくお解りでせう。どうぞお父つあんの中からだをお骨にするだけのお金を出してやつて下さいね。……お願いですわ……」

そこで彼女はしばらく黙つてゐたが、やがてまた興奮して来て、叫ぶやうにかうつけ加へた。「いつかお巡りさんがあたしの前で、お父つあんへかう言つたでせう——あなたは國民の手本だ、日本中の人があなたを生涯幸福に暮さしてくれる、そして死んだなら銅像に立てられると。それだのお父つあんは、野たれ死ぬやうにして死んでしまつて、そしてお葬式も出して貰へないでゐるぢやありませんか。……それでこのあたしが、お父つあんの屍をとなりへ置いて、お父つあんが畜生だといつたやうなことをしなければならぬんです。それでお父つあんの屍の始末をつけなければならぬんです。……なぜ、どうして、こんなことをしなければならぬのか、……そしてそれを思ふと、それを思ふと、あたしは口惜しくて口惜しくてならないんです……」

裏街の灯

一

踏切番の仙造に取つては、今年十八になつた娘の三重子が、この世でたつた一人の生活の道づれであつた。若草の莖のやうに明るくのび／＼と育つた三重子のからだを見てゐると、仙造には何ものにも代へ難い有りがたい神の賜物のやうに思はれた。

その三重子を、京橋のある喫茶店へ勤めさせるやうになつたとき、仙造はむつかしい顔をして言つた。

「性のよくない金は一文も取つちやならねえぞ。おれ違ア、たとへ干ばしになつて死んだとて、お前のからだは賣りやしねえんだからな」

三重子は、父に言はれた通り、生娘らしくつゝましく勤め、理由のない金は絶対に受け取らな

三月ほど過ぎた。それはある四月末の夜更けであつた。消防自動車のサイレンが、寝しづまつた街の空気を引き裂くやうにふるはして表の電車通りを走り抜けた。

父の仙造は寢床の上に起き上つた。となりの三疊の間に、一時間ほど前に勤めからかへつた三重子が、縫ひものをしてゐる。それへ彼は呼びかけた、

「三重子、まだ寝ねえのか？」

「えゝ、もう少し」

「ちよつとおいで」

「なアに、火事でせう？」

「火事のことぢやねえ。ちよつとおいでよ」

「なにさア……」

三重子は、面倒臭さうに答へたきり、立たうともしない。

仙造は立ち上つた。はだかつた寢巻の襟をかき合せながら、仕切りの襖を開けた。そして「三重子」と、こんどは、きめつけるやうに言つて、三重子の前にキッチンと坐つた。

三重子は、ハツとして目をあげた。その目を仙造はしつかりと見据えて、
「その着物は、お店のおかみさんが買ってくれたとお前は言つたが、さうぢやねえだらう？」
「どうして？」

三重子は、まぶしさうな目つきをした。

「どうしてぢやねえ。ほんとのことを言へ」

「だつて、さうなんですもの。もう青葉だといふのに、冬からの着たきり雀ぢやしど、いからつて
おかみさんが買ってくれたのよ」

「おかみさんが、きたきり雀だといつたなアほんとうだらうが、買つてくれやしねえだらう」

「だつて……だつて、ほんとに買つてくれたんですもの」

三重子は、目を伏せ、膝の上のうす紫地のセルを取り上げ、手をわざと大きく動かして、襟を
くけはじめた。仙造は、それを苦々しく見ながら、

「お店へ勤めるとき、お父つあんが言つて聞かしたことア忘れやしねえだらうな」

「……………」

「昨日の朝、その反物をお前が見せたとき、お父つあんは、なんだか、いやアな氣持ちがしたん

だ。第一、給料もろくにくれねえ店が、そんなもんを買つてくれる譯がねえぢやねえか」

「お父つあん、もう止して……………」

「お父つあんをごまかさうたつて駄目だよ」

「あたし、いくら何だつて、そんなこと……お父つあんがしぢやならないと言つたことなど、し
やしないぢやないの」

「ぢや、どうしたんだ。はつきりと言つて見ろ」

「……ほんとは、お店のお友達からお金を借りて買つたのよ……」

さう言つてゐるうち、膝の上に置いた三重子の手の甲に、涙がポトリ／＼と落ちて來た。

「ほんとにさうか。ほんとに、客から貰つたものぢやねえのか？」

三重子は、黙つてうなづいた。

「お前が、着物の着てえ盛りだてえことア、お父つあんもよく知つてるよ。おまけに、この三年
ばかりといふもの、着物らしい着物も買つてやらなかつたてえことも、百も承知だよ。それだか
ら……それだからお父つあんは……」

言ひながら仙造は、寢巻からはみ出した膝の頭をびしやり／＼と叩いたが、しまひの方の言葉

は妙に澁つたくふるへた。

三重子は、さういふ父を上目づかひに見てゐたが、いきなり縫ひかけのセルの上につつ伏してくつ／＼と咽び出した。

仙造は、それにはビツクリして、

「馬鹿野郎、泣くことアねえ」と立ち上り、握りこぶしで目をふきながら、寢床へかへつた。

二

さらに一ト月した五月末のある正午近い頃であつた。その頃仙造は、友達の家族を救ふため、自分の踏切番の仕事の半分を、その友達に分けてやつてゐた。つまりその友達と一日交代に勤めて、自分の月給を山分けにしてゐた。そのために生活がますます窮迫することは目に見えてゐたが、彼の律義心が承知しなかつたのである。で、その日も彼の休み日に當つたので、彼は軒下に玩具のやうに並べてあるさつきの鉢の、ちやうど見頃に咲きかけたのを取り出し、長火鉢の猫板の上に置いたり、茶箆筒の上に載せたりして、ためつすかめつ眺めてゐた。

と、三四十分前にお店へ出かけた三重子が、忘れもの、と言つて戻つて来て、三疊の間の押入

れを開け、何かごそ／＼とかき廻はして、そして出て行つた。

すると、それと殆んど入れ違ひに、

「御めんなさい」といふ、聞き馴れない聲がした。

仙造は立つて障子を開けた。そこには、セルの羽織を着、角帯をしめた商人風の若い男が立つてゐた。

「ちよつと伺ひますが、只今、十七八の娘さんが、お宅へおかへりになりませんか？」

「へえ……あなたは、どなたさんで？」

仙造はげんな顔をした。

「その娘さんに、ちよつとお目にかゝりたいんですが」

「娘はたつた今、また出て行きやしたが、一體どんな御用で？」

「またお出かけですか。おかしいですね」

「何がおかしいです！」

仙造は、こいつ、うさん臭い奴だ、といふ色を露骨に現はした。するとその男は、紙入れを取り出し、そこから一枚の名刺を抜いて差し出しながら、



「手前は、かういふものですが、あなたは、こちらの御主人でござんせうか？」
 「へえ、娘の親爺ですが」

そして名刺の肩書を見ると、「尾張屋呉服店外事係」としてあつた。その呉服店は、表の電車通りにある、この界隈での一番大きな店で、彼も勤めの行きかへり、必ずその前を通つてゐた。そして季節々々に、シヨールウインドウに飾られる流行新柄の着物を見る度に、いつも同じ着物ばかり着てゐる娘の三重子を思ひ出し、憂鬱な腹立たしい思ひに包まれるのであつたが、今、その名刺を見ると、彼は何か苦つぽいやな氣持ちが胸元に湧いて來るのを感じた、彼は、ザラ／＼に伸びた額のひげをこすりながら言つた。

「わしで解ることなら、御用を話して貰えてえですが」

「さうですか」と、その男は、生白い片頬にちよつと苦笑を浮べて、

「實は、さつき、お宅の娘さんが、手前の店から反物を一反お持ちかへりになりましたんで、そのお代をいたゞきに上りましたんで」

「……………あの娘が、反物を、金を拂はずに持つて來たてえんですか？」

「へえ。それで直接娘さんにお話すりやいゝんですが、ちやうど今日は、店の十週年紀念賣り出

しで、大ぜいお客さんが居りますし、往來でも具合が悪うござんすので、それに以前からお顔だけは存じて居りましたので、他分ご近所のお方だと存じまして、尙ほ更ら人目のある所ちやお話しにくうござんしたので、失禮とは存じましたが、つい後をつけてお宅まで伺つたやうなわけにして……………」

「左様ですか。……………左様ですか……………」

仙造は、上り框に膝をそろへて坐つて、面を伏せた。さつき、忘れものといつて戻つて來た娘が、押入れをごそ／＼さして、そ／＼と出て行つたのは、間違ひなく、その反物を隠して行つたのだ、とわかつた。仙造はまた、一ト月前のことを思ひ出した。あの時のセルの反物も、或ひは三重子が、今日と同じやうなことをして持つて來たものではないかと思はれて來た。その反物を見たとき、彼は何かいやな氣持ちがしたのは、やつぱりそのためだと思はれた。だから彼がそれに就てなじつた時、三重子は、彼がビツクリしたほどに、いきなり咽び出したのもあつたのだ、と思ふと、彼は娘を、生活の光とも神の賜物とも感じてゐただけ、一時にあたりが眞暗になつたやうな氣がして來た。

「……………それで、その品物は、どんなものなんでございませうか？」

仙造は、頭を下げたまゝ訊いた。

「品物は、あらい格子縞の明石でござんすが……」

仙造は立つて、三疊の間へ入り、その押入れを開けた。そこには三重子の蒲團が入つてゐる。

仙造は、その蒲團を一枚々々押し上げて見た。蒲團に浸みてゐる三重子のからだの甘つぽい臭ひが漏れて来る。

反物は出て来た。仙造はそれを恐いものを持つやうにして、番頭の前へ戻つて来ると、

「何とも申し譯ござりません」と頭を深く垂れて言つて、反物を差し出した。番頭は、それをちよつと手に持つて見たが、すぐぼんと投げ出して、

「これは娘さんが折角お持ちかへりになつたんですから、そのまゝにしていたゞいて、そのお代をいたゞきたいんです」

「へ………ごもつともで。……そのお代は、なにほどでございませう？」

「十八圓でござんすが」

「へえ………へえ………」

十八圓は愚か、その十分の一の金も彼のふところにはなかつたのである。

「御近所のことでもございますし、そのお代さへいたゞけば、手前共の方でもおんびんに済ましたうござんすから」

「へえ………へえ」

仙造は、ます／＼深く頭を垂れてさういつてゐたが、やがて、忝げ上つた額を敷居へピッタリとすりつけて、

「番頭さん、お願いでござります。今、この家に、お金といつては、その十分が一もござりませぬので、どうぞこの品物をお持ちかへりになつて、それで……」

「そりや困るんです。第一それぢや、お宅の娘さんは、はじめつからお金を出さずに、この品物をお持ちかへりになるつもりだつたといふことになりますんで、さうなりますと事はおんびんに済まされなくなりますんで」

「へえ………だから娘が悪いのでござります。娘ももう十八にもなりました、只で品物を持つて来ることがいゝか悪いかぐらゐは、よく解つてゐるはずで、それでもさうして持つて来たのは、娘めぬすつと根性がした業でござります。それに疑ひはねえのでござります。………だけど番頭さん。わしは、あの娘のたつた一人の親でござります。身内といつては外にだれ一人ねえのでござ

ります。わしはあの娘ばかりを慕しの頼りともし、楽しみともして生きてゐるのでござります。その娘が罪人となつて警察へ引かれて行つたのでは……」

彼は、からだをよぢりながらさう言つてゐたが、いつか聲がかすれて、そしてぐつと言ひつまつてしまつた。

「……弱りましたな。しかし手前の方といたしましては、品物を持ちかへつてそれでケリをつけるといふわけには、どうしても参りませんので。第一そんなことをしましては、お店の主人に對して手前の申し譯が立ちませんし」

「そここのところを、まげて大目に見ていたゞきてえのでござります。その代り、娘めが歸つたらうんととつちめて、二度と再びそんなことのねえやうにいたしやす。……こんなこと人様に聞かせることぢやありませんが、實は、五年ばかり前に、あの娘の母親といふ奴は、わし共を棄てゝある男の家へ逃げて行つてしまつたです……。それからこつち……」

仙造はそこでまた言ひつまつた。木枯らしを聞くやうな寒い聲である。それをまたふり絞つて「それからこつち、わしは母親の代りにもなつてあの娘を育てゝ來たんですが、やつぱり片親ではうまくまゐりません。そこへ持つて來て、わしは踏切番です。でくの坊のやる仕事にやつとあ

りついでるもんです。だからこの何年といふもの、わしはあの娘のために、普段着一枚買つてやれなかつたのでござります。それだからまた娘もつひ……。お金を拂はなきア、どうしても表向きになさるといふなら、このわしを訴へて下せえ。わしがお店の品を萬引きしたといふことにして下せえまし……」

番頭もこれには弱つた。尖つた顎を引つ張りながら稍しばらく考へてゐたが、

「それぢやかうしていたゞきませうか。今日一日、といつても晩の十時頃まで——十時すぎには店を仕舞ひかけますんで、それまでに何とかお金を工面していただゞいて、届けていただゞくといふことにませうか。それでもし出来ませんでしたら……」

「へえ？」と、仙造は、目をあげて番頭の顔を見つめた。

「いゝえ、もし、それでどうしても出来ませんでしたら、仕方がございませんから、品物を手前の方へ引き取ることにはいたしませう」

「……へえ、へえ……」

仙造は、もう一度敷居へ額をピッタリとすりつけた。

番頭はかへつて行つた。その聲音が路地から消えても、仙造は敷居から顔をあげなかつた。

やがて彼は、反物を持つて三疊へ入り、押入の蒲團の間へ、もと通り差しこんだ。

三

仙造はもう、娘のしたことを微塵も責める氣持ちはなかつた。それより、娘が、可哀さうで可哀さうでならなかつた。

彼は、せまい家の中を歩き廻つては坐り、歩き廻つては坐り、そして溜息をつき、齒を喰ひしぱり、頭髮をかきむしつた。さうして夕方になると、彼は何かを追ひかけられるやうにして家を飛び出した。

それから一時間ほど後、彼は、山の手のある洋館の玄關の前に立つてゐた。そこは五年前、彼と娘とを棄て去つた、彼の元の妻の棲む家であつた。呼りんのボタンを押すと、かすかにビューと鳴つて、白粉をいやに白く塗つた女中が出て來た。

彼は、出来るだけ落ちついて言つた。

「わしは、仙造と申すものですが、奥さまにちよつとお目にかゝりたいので、女中が引つこんで、稍々しばらくして、のつばの書生がのそりと現はれ、

「何の御用ですか？」と高い所から見下した。

「奥さまにお目にかゝりたいので。この玄關で結構でございますから、どうぞちよつとの間」と彼は丁寧な頭を下げた。

「奥さまは、只今おでかけですよ」

書生は、彼の下げた頭へ足を載せでもするやうな言ひ方をした。

彼は、むつとした。自分達に砂を掛けるやうにして逃げ去つた女房を、奥さま〜と呼んだことも、たまたまなく忌々しくなつた。どうせ居留守を使つてやがるのだ、と思ふと、一旦玄關を出て見たが、そのまゝ門の外へ出ては行けなかつた。

彼は、石の門柱のかけに立つて庭の方を覗いた。居間の窓から漏れるらしいあかりが、庭の植込みをまだらに照らしてゐる。それがいやにしつとりと涼しさうである。畜生！ 彼はそんな氣で、植込みの下を、あかりの届かない庭の奥の暗い方へくゞつて行つた。

と、さつきの書生が、口笛を吹きながら裏の方から出て來て、門の鐵の扉を、ガチャリ〜と閉めて行つた。

「ちえッ。さつきはひとを玄關から閉め出しといて、こんどは門内へ閉め込みやがる。どうしろ

といふんでえ」

彼は、妙にふて／＼しくなつた。植込をすかして、あかりのある室を見ると、開け放しの窓を背にして、一人の女がぐでんとあほのけに椅子へ掛け、そばのテーブルの皿から何かつまみ上げては口へ運んでゐる。その黒く影になつた肩の恰好を見て、彼はすぐ女房だとわかつた。さうわかつて、その姿を見てゐると、自分でも思ひかけない、胸元がふるふるやうなむか／＼した気持ちがかこみ上げて來た。今まで五年間、彼の胸の底に潜んでゐた鬱憤が、一どきに湧き上つて來たやうに感じた。

彼は、植込みの中から姿を現はし、づか／＼とその窓下へ寄つて行つた。すると窓の中の彼女は、のけぞつたまゝ、

「だアレ、秋山？」といつた。秋山とは、さつきの書生のことであらう。それが、いやに甘つたれた言ひ方なので、仙造は、そこでもある不快なことを聯想した。仙造は、げんこつを突き出すやうな聲で答へた。

「わしだ、仙造だ」

彼女は、とんぼかへりするやうにして椅子から立ち上つた。そして、窓下の、あかりに照らし

出された仙造の姿を、まるで白痴のやうに大きな口を開いて見詰めたが、そのまゝドアの方へ逃げ去らうとした。

そこでもし彼女が逃げ去つて、さつきの書生や女中が飛び出して來たら、何もかも目茶苦茶になる。仙造は、窓の中へ首をつき出して、息聲で彼女をたぐり寄せるやうに言つた。

「おい。わしは亂暴をしに來たんぢやねえよ。ちつとばかり頼みがあるんだ」

彼女は立ち止り、手をあげて、外へ出る、外へ出る、と合圖をした。

「いや、手間は取らせない。まアこゝまで來てくれ。ほんのちよつとした話なんだ」

彼女は、肩で息をしながら、

「なんの話？」とやつと口を開いた。

「まア、さうビク／＼しないでくれ。何もわしは、お前をとつつかまへに來たんぢやねえ」

「だから、何の話さ？」

彼女は、再びさう訊きかへしながら、今にも大きな聲をあげて家中のものを呼び集めさうである。仙造は、さつきの、むか／＼した気持ち、胸の底から湧いて來た五年間の鬱憤を、もう一度胸の底へ押しつけて、出来るだけ下手にやはらかく出るより外はなかつた。

「實はな、金を少しばかり……」

「ぢや、ゆすりに来たのね」

「冗談ぢやないよ。さつきはちゃんと玄關から申し込んだのに、お前が出て来ねえから、こんどはこの庭から申し出たまでなんだ。それもさ、今、門を出ようとする、書生さんに閉め込まれたんで、つひこんな所から……」

「まア……」彼女は、仙造に對する警戒と輕蔑をどつちやにした顔をして、窓の方へ寄りながら、

「あなたはあたしを、こゝの旦那にもう一度賣らうつてのね？」

「そりやどういふことだね？」

「さうぢやないか。一番はじめにも、あなたはうちの旦那からお金を取つたぢやないの」

——ふざけたことを言ふな、貴様がそのからだを勝手に賣つときやがつて、とさう仙造は叫ぶうとしながら、シャンデリヤのあかりに照らされた彼女のからだを、上から下へ見下した。むつちりとしたうなじ、柔かく盛りあがつた胸、肩、腰、それらは、別れて五年間に、仙造がその倍ほどの年を取つたのに反して、逆にその年だけ若がへつたやうに張り切つてゐる。

仙造の息は、思はずはづんで来た。嫉妬とも憎惡ともつかぬ一種異様な興奮がわく／＼と湧き上つた。——頭の芯が、カーンと鳴り出し、視線が花火のやうに亂れて来た。

この場合、もし仙造がふだんの仙造だつたら、この思ひもかけぬ興奮に驅られて、相手を殺しかねないやうな悲劇を演じたであらう。が、その日の仙造は三重子の萬引きの問題で、すつかり悩み悶へ疲れてゐた。で、彼の體力も意力も、その興奮を絶頂としてポツキリと折れた。

仙造は両手を窓わくに支へて、ぐたりと頭を垂れた。その垂れた頭の中では、

「我慢しろ、三重子のために、何もかも我慢しろ」といふ聲がした。

彼女は、さういふ彼を上からジロ／＼と見下し、もうすつかり落ちつきを取り戻した。

「だからあたし、二度も三度も賣られたくないのよ」

仙造はやつと頭をあげ、

「八重子」と、哀願するやうに彼女の名を呼び、

「むかしのことは言はないことにしよう」

「ぢや、おとなくしく歸つてちやうだい。そして二度と再び来ないでちやうだい」

「あゝ、だから今日かぎり、二度と来やしないから、今の頼みだけはきいてくれ」

「まア、圖々しい……」

「……でもあらうが、しかし、このわしのために金を貸せといふんぢやねえ。お前が残して行つた娘の三重子のために貸して貰えてえんだ」

「三重子のことなら、去年もあゝして人をやつて、あたしの方に引き取らうとしたのに、あなたが承知しなかつたぢやないの。承知しない以上は、人に迷惑をかけない決心だつたんでせう」

「そのことも言つてくれるな。あの三重子をさう易々と手ばなせるくらゐなら、わしはこんな苦勞はしやしねえ。頼むから、なんにも言はないで、貸してくれ、……貸してくれ……」

さう言つてゐる仙造の姿は、彼女の前に完全に敗北した姿であつた。事實彼は、口こそ出さなかつたが、腹の中ではかう言つてゐた。

「わしはお前に負けたのだ。お前の『旦那』にも負けたのだ。それから『金』にも負けたのだ。さうして今日、かうやつて来たことは、その負けた恥を上ぬりしに來たやうなものだ。だが、それもこれも、娘だけはだれにも負けさしたくないからだ。一人前の人間として世間を通してやりたいからだ」

腹の中でさう言つてゐると、仙造には娘の三重子が、またたまらなく可哀さうになつて來た。

三重子はあの哀れな心をどのやうにして堪へてゐるだらうと思ふと、その痛々しさがそのまま彼の胸にもつきつきと感じて來た。

彼はまたも地べたへこどもやうに頭を垂れた。

彼女は、さういふ彼の姿に、ペツと唾でも吐きかけるやうな顔をしたが、やがてその部屋を出て行つた。そして間もなく取つてかへすと、二つに折つた何枚かの紙幣を、窓の上にポタリと置いた。まるで、迷ひ子の犬に菓子を與へるやうに。

ちやうどこの時、門の外に自動車のホーンが二聲うなつた。と、彼女は急にあわて、
「早く、早く出て行つてちやうだい」と、また紙幣を取り上げ、仙造の手の中に押しこんで、その胸をぐいぐい庭の方へ押し出した。

仙造は、さつき潜んだ庭の奥の植込みの中へ、ひよろ／＼と入つて行つた。
その間に、門の扉はさつきの書生の手でもう一度開かれた。そこをニツカポツカをはいたガニ股の小さな男が、ことり／＼と入つて來た。ヘン旦那様のおかへりだ、と見てゐると、その後から、のつぽの書生が、ゴルフのクラブサツクをかついで入り、鐵の扉を再びガチャリと閉めて行つてしまつた。

仙造は、暗の中でしばらく息を殺してゐた。やがて木の枝から扉の上へ乗り移つて、そこから往來へ、人通りの絶えたのを見すまして、すべり降りた。

四

仙造は、その足でまっすぐ、尾張屋呉服店へ來た。もう十時を過ぎて、店は仕舞ひかけてゐる。彼はそこで今日の番頭を呼んで貰つて金を渡し、また幾度も頭を下げて引きさがつた。

家へかへると、彼は先づ臺所へ入つて水道栓から水をじやア／＼出し、そこへ口を持つて行つて顔中水を浴びながらがぶ／＼と飲んだ。さうしてさつきの鉢が載つてゐる長火鉢の前にポツツと坐つて見ると、三重子の問題はこれで一先づ片づいたといふホツとした氣持の裏から、くやしさと哀しさと腹立たしさとが、陶先へごく／＼とこみ上げて來た。

「ばいた！ 畜生！ 豚め！」と仙造は、さつき女房に向つて言へなかつたことを、そこでつばを飛ばして言ひ出した。

「おれが、てめえのからだを賣つたと？ それぢやてめえは賣られたつもりでゐやがるのか！ たつた五百や六百の金で賣られたつもりでゐやがるのか！ ふさげるねえ。……あの、白粉をの

たくつた女中はどうしたつてんだ。あのつぼの書生に甘つたれたのはどしたつてんだ。……あのガニ股のチンチクリン、ゴルフとは笑はせやがる。ワイロ取りの請負師が半ズボンの代りにニツカポツカをはいて、あつばれ一流の實業家たア恐れ入つた。……畜生、見てやがれ……」

仙造の目からは、涙がポロ／＼こぼれた。そこへ格子が開いて、

「たゞ今」

三重子が勤めから歸つて來た。

仙造はわけもなく立ち上り、手の平で頬の涙を拭つた。それからまた坐つて、

「三重子、待つてたよ」と言つた。

「どうしたの？」

「いや、ハ、ハ、ハ、。なにさ、ちつとばかりお前をよろこばすことがあるのさ」

「さうオ……」

三重子は、いつかのうす紫地のセルの上に、うす汚れた羽二重の赤い帯を胸高にしめ、心もちうす青い顔をして仙造の前に立つた。

「まア坐りな。實はさ……それ、あの松つあんがさ……」と、仙造は言ひかけた。

「松つアんで、だアレ？」

「それ、わしの友達の、この月始めからわしの勤めを半分分けてやつてるあの踏切番の松つアんがよ」

「あゝあの人。それがどうしたのよ？」

「あの男がさ……ね、つまりその……」

と仙造は、つばをどつくりと呑んで、

「その男がさ、その、お金を拾つたんだ。千兩あまり、ぞつくり現金でな。……それでさ……さつそく警察へ届けたところ、落とし主がもう来てゐて、つまりその場でその謝禮金を百圓ばかり貰つたといふわけさ。……ね、それでさ、その松つアんがさつそくわしんとこへ飛んで来て、半分取つてくれといふんだ。わしがそんな金を取るわけがねえといふと、お前は命の恩人だ。みんな取つて貰えてえが、まア半分だけ、是非とも取つてくれと言つて、たうとう……」

と、仙造は、ふところから、はだかの紙幣をつかみ出し、

「この通り、置いて行つちまつたんだ。お前がいらねえなら、娘さんに着物でも買つてやつてくれ、と言つてさ、ハ、ハ、ハ、」

仙造はそこで更らに陽氣に笑はうとしたが、その顔は妙に苦つぽく歪んで来た。彼はその顔を

三重子からそむけるやうにして、

「それでわしも折角だから貰つといたといふわけで……そこでさ、松つアんも言つてくれたやうに、これでお前の着物を買へるだけ買つてやりてえが、一度手に持つて見ると、わしもちつとばかり慾が出て、まアさし當り、半分だけお前にやらうと思ふのさ。ね、だから、それで着物なり帯なり好きなものを買つてくれ。……この何年、ろくな着物も買つてやれなかつたのがお父つアんは何より辛かつたが、けふばかりは思ひがけねえこんな金が舞ひこんで来て、何といふ日だか、ありがたいやら嬉しいやら……」

仙造の聲はいつかおろ／＼になつた。

三重子は、さういふ父をちつと見守つてゐたが、これも泣きさうになつて、

「お父つアん、あたしいゝの。お金も着物もいらぬの」と言つた。

「まアさういふな。わしが貰つた金でも、立派に通用するんだからな」

「さゝのよ。さらさのよ」

三重子は、強くかぶりを振つた。

「いゝから取つて置け。その代り、お父つあんが常日頃言つてきかしてゐるやうに、勤めの店のお客から、性の知れねえ金は、絶対に貰つちやならねえぞ。そんな金を貰つたら最後、お前はそこからだを買はれたと思はなきアならねえんだぞ。お金も尊い。けれど女の操ほど尊いものはねえんだからな……」

「……………」

「こんなこと、お前とわしとで話したかアねえが、そしてお前もよく承知してゐるだらうが、お前のおつ母さんは、金のために操を賣つた奴なんだ。金のためにお前を棄て、わしを棄て、あのげすな男のところへ走つて行つちまつた奴なんだ。おつ母さんは、このわしが金ほしさにおつ母さんをあの男へ賣りつけたやうなことを言ふが、冗談ぢやねえ。あの時の金は、あの二人が自分達の罪を塗りつぶすために出した金なんだ。それはお前もよく知つてゐるだらう。それをまたべん／＼と受け取つたわしも大馬鹿ものだが、いや、わしはどこまでも大馬鹿もので、今更らどうにもならねえが、お前は、お前だけはお金に敗けたあのおつ母さんのやうな女にも、またこのお父つアんのやうな人間にもさしたくねえんだ。……なア、そればかりが、お父つアんの苦勞なんだ。わかつたな……わかつたな」

娘が金に負けて人のものをかすめて来たことは親としての仙造の律義心の大きな嘆きであつたが、すべては自分の責任だと思ふことで、自分一人の嘆きで済むやうに思はれる。だが、もし三重子が、金の誘惑でその身を賣り汚したとなると、親としての愛情の嘆きばかりでは済まされないうものがある。我慢にも、我慢のしやうがないくやしい悲しみが、全身を駆けめぐらうと思はれた。そこでは、あの不貞な妻に依つて味ははせられた苦い悲哀を、こんどはそれ以上強烈に娘に依つて味ははせられるやうな氣がする。いやそれとは別の、もつと純粹な苦いくやしい悲哀であらう。ともかくそれは今の彼には思ひも及ばない深い感情の悲嘆であらう。たつた一人の娘を守り育てゝゐる獨りの父親のみが感ずる悲嘆であらう。それは、全く考へただけでも恐ろしいことであつた。だから一口に言へば、

「外にはどんな罪を犯してもいゝが、からだだけは汚してくれな」といふことになつた。それが彼の正直な告白であつたのだ。

と言つて、それをそのまま三重子の前にぶちまけることもならなかつたのである。仙造は、きつちりと坐つたまゝ頭を深くこめてゐる三重子をしみ／＼と見守つた。と、美しいうなじのおくれ毛が、こまかくふるへてゐる。それは、これ以上仙造が何か言つたら、こんど

こそ身も世もなく咽び崩れるであらう一瞬の姿であつた。

仙造は、これはものにさはるやうに言つた。

「なんだか、とんでもねえ話になつちやつたな。つい、年寄りの愚痴で。……さア明日の勤めがある、寝るとしよう」

五

三重子はその夜一睡もしなかつた。涙が次から次と頬を傳つたが、その涙の中に没つてはゐられなかつた。その夜の父の容子も言ふことも、腑に落ちないことばかりだつたからである。

父が、自分の隠し犯した罪を知つて、あゝいふことを言つたのなら、自分はもう二度と父に顔を合はされないと思つた。しかしその罪の品物は、彼女が晝の間に隠して置いたまゝになつてゐることを思ふと、それを知つての繰り言とは思はれなかつた。

では外に何があつたのだらう。第一腑に落ちないのは、父が差し出したあの金であつた。その金を出した時のそぶりであつた。それからその金に就て説明した父のものの言ひ方であつた。どもりながらつまづきながら一語々々つなぎ合せて行つた父のあの言葉は、どう考へても實際にあ

つたことの説明とは受け取れなかつた。

ではどうして手に入れた金なのだらうか？ 三重子は自分がしたやうなことを父に當てはめて考へて見た。もし父も、自分がしたと同じやうな罪を犯してゐるのだとすると、それはみんな自分のために犯した罪に違ひなかつただけ、自分はもう生きてゐられないといふ氣がした。もし、明日の朝にでも警察の人が踏みこんで來たら、自分は隠してある品物まで出して見せて、そして父の罪も自分で着ようと思へた。さう考へるとまた涙が流れて來た。

「けれど父に限つてそんなことがあらうはづがない。絶対にない！」

三重子は強く打ち消した。今、自分自身を包んでゐる重い黒い影を拂ひ除けるかのやうに打ち消した。

三重子は、一ト月前に犯した罪——父には友達から借りて買ひ求めた反物だと言ひ抜けて済んだあの事件に對しては、ほんのちよつとした過失であつたと思ひこむことで、その暗い影を吹き消してゐた。事實、盗まうといふやうな意識は全くなく、たゞその場の出來心でしたことであつた。が、けふ再び同じことを犯した時、彼女はゾツとした。この前の盜心がいつか胸の奥に大きく育つてゐて、それが今日突然、表へ現はれた來たのだ、といふ氣がしたからであつた。

しかしさう思ひこむことは、彼女の生存に致命傷を與へることになる。彼女は自分へ言つた。「いゝえ違ふ。たゞ一圖に着物がほしかつたの、それだけなの」

するとまた、涙がこみ上げて來た。

そのうち三重子の頭はぼーつとして來た。その、ぼやけた中へ何かかうしみとくと暖かく浸みて來るものがあつた。それはその夜の父親の、いろんな腑に落ちないことを言ひながら、その言葉以外に浸み出してゐる蜜のやうな慈愛であつた。いや只の父の慈愛といつては言ひきれないもつとしみとくとした潤ひのある、ぢかに肌に觸れて來るやうないつくしみであつた。

三重子は、このいつくしみの中にしつくりとひたり、赤ん坊のやうに目をつぶつた。とまた涙がまぶたを漏れて流れて來た。

さてその翌日の夜のことである。三重子は、勤め先である京橋の喫茶店に、いつものやうに、グリーンのガウンを着て、殊更らにつましく立ち働らいてゐた。五つきりないテーブルと、三重子の外に二人の女しかゐないこの小さいな喫茶店も、酒が賣れるやうになつてから、客だねも自然と變つて來た。大部分は、若いサラリーマンと學生であつたが、中にはそのどつちともつかぬ、えたいの知れない青年もゐた。

時田といふ、店では「トキ」さんと呼んでゐる青年も、このえたいの知れない仲間の一人であつた。學生服を着たり背廣を着たり、時にはニツカボツカをはいて來る。蒼白い顔に神経質な目を輝かしてゐるが、それが時に一種の高尙さを示すかと思ふと、時によたものの野卑さを露骨に現はす。金のある時はシャンパンを抜かせて、店中のものに飲ませたりするが、無い時は、おかみから圓タケ代をせびつて行く。

で、三重子などの目には、この青年が最もえたいの知れない男であつたが、それが、その夜もやつて來て、新調のあひ服をつけ、ズツクのカバンをぶら下げ、剃り立ての顔をてら／＼光らしながらスタンドの前へ立つて、

「おい、けふは若様の御旅行だぞ」と言つた。

「さう。ぢやお伴の光榮を」と、スタンドの中のおかみが受けると、

「どうかと思ふよ」と顎をつき出し、「おい、三重子、もう仕度はいゝかい」と、レコードをかけてゐる三重子の方をかへり見た。

「あら、もうお約束すみ？」

「あつたりめえよ」と時田は、カバンをスタンドの上に投げ出し、片肘で顎を支へて、

「ところでおかみさん、相談があるんだ」
「なにさ」

「五六枚貸してくれよ」

「おや、人のお金で旅行しようての？」

「うん、僕の分はあるんだが、三重子の分がねえんだ」

「チャツカリしてるわね」

「いやなら止せ」と、時田はタバコのケースを取り出し、中から金口二本をつまみ上げ、一本をおかみの手へ渡して、

「實はね、家の親爺とおふくろが避暑するてんで、家をめつけに行くんだよ」

「どつかに別荘があつたぢやないの」

「あんな別荘なら行かない方がいゝとさ」

「だが」

「おふくろがさ。俺のほんとおふくろならなぐつちやうんだがな」

「おかげで、トキさんは、旅行が出来るんぢやないの」

「この頃一人旅なんて、はやらないよ」

「二人分の金はなし……」

「のすぞ。……貸さねえんなら、これからある所をゆすつて来ようかな」

「肉切り庖丁を貸したげるわ」

「ピストルでなくつちや駄目だ。なにしろ相手は強盗なんだから」

「まア、強盗の家へゆすりに行くの。トキさんもえらくなつたもんね」

「おだてるなよ。こりや全くほんとの話だよ。といふのは、ゆんべおれんちへ、一人の強盗さんがお入りになつたんだ。おふくろが、一人で居間の椅子へ掛けて、サクラランボを喰つてるとね、

一人の男が庭口からのそりと入つて来て、開け放してある窓からぬつと光るものをつき出し……」

「金を出せ！」と、おかみが口を入れた。

「うん、その通り。そこでおふくろめ、顫ひ上つて、家にあり合せの金をみんなぶつつけてやつたといふのさ」

「いゝ氣前だわねえ」

「おふくろのすることは萬事その通りさ。ところでその後が面白えんだ」

「おひやを上げようか」

「チンフキズを出せよ。……ところでさ、うちの運ちゃんがその強盗の逃げて行くのをめつけたんだよ。ちやうどそんな時、親爺を車からおろして、その車を裏のガレージへ入れてると、向ふの塀の上から、そいつがすり下りてるところだつたんだ。こいつくせもんだと見た運ちゃん、さつそく後をつけて行くと、さすがは強盗だね。悠々と電車通りへ出て、そこでまた悠々と電車へ乗りこんだてんだ。普通の運ちゃんならもうとつくに『泥棒』とどなるところだが、家のものア運ちゃんでも變つてるんで、奴もその後から一緒に乗りこんだといふんだ。そしてそれから電車を二度も乗りかへて、たうとうそいつの家までついてつたといふんだ」

「そこで、泥棒ツとどなりこんだの？」

「どなりこむどころか、運ちゃん、穴熊の巢でもめつけたやうに喜んちやつて、家へ飛んでかへり、先づおふくろまで報告に及んだんだ。事の真相を確めてから、そいつの寝込みを襲つて『強盗を手づかまひにした勇敢なる運ちゃん』てな三面記事を書かしたかつたんさ。ところが、その時のおふくろの言ひ草がすばらしいぢやねえか。あれんばかりのお金は、あたしの買ひものを二度三度節約すりや浮ぶんだから、そんなに騒ぎ立てないでくれ。旦那様にも言ふほどのことぢやな

いから黙つてゐな、とさ。大したもんだらう。しかし、そいつを聞いて黙つてゐられないのは僕さ。みすく強盗の巢をつき止めときながら、知らん顔をしてるてえ手はあるめえ。第一おふくろのその安つばい高慢ちきな寛大さが癪だらう。そこで僕は断然その強盗の家へ逆襲してやらうと決心したんだよ」

「そしてどうするの？」

「金をとつかへしてやるのさ。盗まれた金の何倍かの金をね」

「相手は強盗よ、さうカンタンに出しやしないわよ」

「出さなけりや、強盗犯人として警察へつき出してやるのさ、ね、この通りちゃんと地圖も出来るんだ」

時田は、ズボンのポケットから紙片をつかみ出し、スタンドの上へひろげて、

「ね、こゝが吾妻橋さ。こゝが停留場で、そこを入つてかう曲ると、これが尾張屋といふ呉服店で、その先の路次をかう入つてかう曲ると長屋があつて、その一番端の家なんだ。軒下にさつきの鉢を並べてあるところまで見届けて来たといふんだから、確實なもんだらう」

「ふうん……」と、おかみは感心してゐたが「三重ちゃんのお家、この邊ぢやなかつたか知ら」

と、三重子の方へ言った。

三重子はこの時「ミネトシカの湖畔」といふレコードをかけて、それに聞きとれてゐるといふやうな風に、椅子に凭れて目をつぶつてゐた。おかみはもうそれには構はず、

「とにかくちよつと面白いわね。あたしもついて見ようか知ら」

「そして分け前を取らうてのかえ。冗談ぢやねえや」

「だつてあんた一人ぢや危険よ」

「虎穴に入らずんばつてことがあるよ」

「虎穴ぢやなくつて、熊の穴ぢやなかつたの」

「ちえ、何でもいゝよ。久しぶりで今日は愉快だ」

時田は、そばへ運ばれてあつたチンフキズのグラスを取りあげ、ぐいとあほつて、そしてカバンをぶら下げ、

「あばよ」

「ほんとに行くつもり？」

「行かなくつてさ。おかみはまだ、俺を知らねえな」と時田は凄しい目をして、ニタリと笑つた。

それから出口の所まで行つて、三重子の方へふりかへり、

「三重ちゃん、ついといでよ。……怖い？……馬鹿だなア。ちや後で電話をかけるぜ」

六

外へ出た時田は、煙草に火をつけて、どつちへ行かうといふ風にしばらくイんでゐたが、やがて尾張町の方へブラリ／＼と歩いて行つた。

京橋から尾張町までの間に彼は五六人の相棒に出會ひ、何かこそ／＼と話したり、悪口を言ひ合つたり、五十錢玉一つをつかみ出してやつたりした。その相棒の中には、ペラ／＼の洋装をした唇の眞赤な女もゐた。

尾張町から裏通りへ入つた。そこのあるビルディングの二階に、最近開いた「シネ・ショット」といふのがある。スクリーンに映る映畫の飛行機を、空氣銃で射つ遊びである。彼はその中へのそりと入つて、十發ほど打つた。さうしてそこを出ようとすると、そのうす暗い出口の所に、三重子がしよんぼりと立つてゐた。

「おい、どうしたんだ」

さすがの時田にも、それはあまりに意外だったと見え、ビツクリした顔をしてさう言った。が
すぐ神経質に目を光らして、

「だれかと來てるの？」

「……いゝえ」

「ほんとかい？ 誰かに引つばられて來たんぢやねえのかい？」

「いゝえ」と三重子は視線を外らしながら、

「あなたについて來たのよ」

「ほんとか。そいぢやついて來いよ」

時田は先に立つて階段を下りた。

外へ出ると時田はまた、

「おい。ほんとに僕について來たのかい？」と眞面目な顔をした。

「ほんとうよ」

さう答へた三重子の聲は少しふるへた。時田はそれでやうやく信じたらしく、

「さう。どうして今まで黙つてゐたの？」

「……何だか、聲がかけられなかつたの」

「おかみに斷つて來た？」

「……ええ」

「僕について行くつて？」

「いゝえ、そんなこと。氣持が悪いから家へかへさして下さいと言つて」

「そいつアうまく言つた。あのおかみ、あゝ見えてなかく陰險なんだから」

「……………」

「そして、こんばんは僕につき合つてくれる？」

「……………」

「ねえ。いゝんだらう？」

「……………え」

三重子はかすかにうなづいた。その容子が、喫茶店で見る三重子とはまた變つた、いかにもう
いゝらしい生娘に時田の目には映つた。

時田は柄にもなく胸をときめかした。それに、今まで幾度かこの三重子を誘ひ出さうとして、

いつも失敗したので、彼はもう諦めかけてゐた矢先でもあつたのだ。

圓タクのたまりへ出た。時田は、三重子の肩へ軽く手を置いて、

「ぢや、乗らうか」とさゝやいた、

「えゝ。……でもあなたは、旅行にお出かけなんでせう？」

「今晚出なかつていゝんだよ。それとも三重ちゃんも一緒に出る？」

「それは、いや」

「ぢや、横濱まで行かうか」

「あんまり遠すぎるわ」

「ぢや、もつと近いところへ行かう。でもその前にちよつと行つて來たいところがあるんだがな」

「どんなところ？」

「そら、さつきあのおかみに話したらう。吾妻橋の先の泥ちゃんの家さ」

「まア！ そんなところ止して！」と、三重子はいきなり強い語調になつた。それが、時田の身を案じての忠告のやうに聞き取つた時田は、

「大丈夫さ。そこらに歩いてるよたもんを二三人引つ張つてつて、そいつらにやらせりやいゝん

だから」

「いや、いや、そんなこと」

三重子は泣きさうな聲で肩を振つた。

「ぢや止すよ、あしたでもいゝんだ。しかしこいつばかりは大威張りで公然とゆすれるんだからなげちや勿體ねえんだ」

「そんな話、もう止して」

「よし。乗らう」

車が走り出すと。三重子は時田から顔をそむけ、窓の硝子越しに、移り行く街の灯を見てゐるやうに見せてゐたが、實は目元にたまる涙をひそかにごくり／＼飲みこんでゐるのであつた。

時田は口笛を吹きながら、その三重子の肩をぐいと引き寄せて、

「ね、このまゝ鎌倉あたりまで行つちやオカ。金はあるよ」

「……いや。……そんな所より、どつか人のゐない静かな通りを歩きませうよ」

「そんな通りなんて、東京にやありやしなよ」

「あることよ。あることよ！」

それから四五十分の後、二人は多摩川べりを歩いてゐた。そこは三重子の注文にもかなつた場所であつたが、時田がもくろんでゐる『一夜の宿』を貸す家もある場所であつた。

時田は三重子と肩を並べて、とりあへず、人通りのない高い堤の上の道を、野面の方へ歩いて行つた。半圓の月が、ほの青くかすんで、眞黒な地平線の上にかゝつてゐる。叢で、夏蟲がジーンと鳴いてゐる。堤の下の眞暗な田甫の中ではぐいぐいと蛙の聲がしてゐる。それだけで、見える限り草の葉一つゆれず、奥の奥までしーんとしてゐる。その静けさは、東京の眞中からいきなり出て來た二人の身に、一種の壓迫を感じさせた。

しかし時田は、その壓迫を利用することを知つてゐた。三重子の肩へすとすり寄り、

「何だか、息がつまるやうな静けさだね」と言ひさま、手首をぐいと握つた。

三重子はギクリとしてその手を引つこめながら、

「……あたし、恐くないわ」と言つた。

「と言ひながら、この手がふるへてるぢやないか」

「これ、恐いからぢやないの」

「あ、さう」と時田は、少し息を弾ませながら空を仰いで、

「あゝ……………」と、異様な溜息をついた。

「ね、時田さん」

三重子が、妙に改まつた調子で呼びかけた。

「なに？」

「あたし、あなたにお願いがあるんですけど……」

「何さ、今さら改まつて。何でもツケ／＼言つてくれよ」

「でも……」

「でも、どしたのさ？」

「なんにも訊かないで下さる？ あたしのお願ひをきいても」

「訊くなといふなら訊きアしないよ」

「ね、ね、……あたし……」

それでも言ひきれない三重子は、自分ながら息苦しくなり、思はず、時田に握られてゐる手を引きしめながら強く打ち振つた。

この動作を何かの衝動のやうに感じた時田は、この時、全身をふるはしながらいきなり三重子

のうなじへ絡みついで来た。

三重子はビツクリした。と同時に本能的に兩腕を時田の胸に突つ張つたが、突つぱりきれなくなると、押し出されたやうに、

「あたしのお願ひをきいて下さらないんですか？」

「だからなにさ……」と言ふ時田のほてつた息が、三重子の頬を、舐めるやうに吹きかゝつて来た。

三重子は夢中で言出した。

「お金を……お金を貸していただきたいの」

「なアんだ。そんなことか。有るだけは貸してやるよ。みんなやるよ」

「ほんと？」

「ほんともくそもあるもんか。持つてるので足りなきア、あした例の泥棒んちから取つかへしてそれもみんな上げるよ」

「そんなに入らないの」

「だつて、今はろくに……百圓もありやしなげ」

「そんなに……その半分でいゝの」

「うゝん、みんな上げるつたら」

さう言つてゐる時田の薄い唇が、三重子の目の上で痙攣的にふるへたかを見ると、それが嚙みつくやうに、グツツと三重子の唇へおつかぶさつて来た。

三重子は、首を左右にふりながら子雀のやうにちゞこまつた。足元の草の露があたりに飛び散つた。

何十秒かして時田の腕が少しゆるむと、三重子はその腕からすり抜けて、河面の方へ向つて辛うじて立つた。全身がカツとほてり、視線が波のやうにゆれた。月を浮べたほの白い河面が、底の方で浮いたり沈んだりした。

「三重ちゃん、泣いてるの？」

「……いゝえ」

「僕がきらひになつた？」

「いゝえ、泥坊の家へゆすりに行くなんて、そんな不良みたいなことを止してくれたら」
取り亂してはゐない、といふことを見せるためにも、三重子はそれを一生懸命にいつた。

「ありがと、そんなことはもう止すさ」

三度目の聲は、三重子の耳たぶのところでしたかと思ふと、こんどは、蛇の胴のやうな迫力を持つた二本の腕が、彼女の肩から胸を兩腕ごと、キツシリと絞めつけてしまった。

三重子は渾身の力で身をよちらうとしたが、もう身動きも出来なかつた。

十

三重子の父仙造は、マッチできざみをすひながら、路地を入つて来る登音に、ちつと耳を傾けてゐた。茶箆筒の上の置時計はもう夜半の二時過ぎを指してゐるのに、まだ三重子が歸つて來な

いのである。

どんなに遅くとも一時までには歸宅した三重子であるのに、今夜に限つてどうしたことであらう？ 圓タクに轢かれたのではなからうか。ギヤングに浚はれたのではなからうか。それとも……その先は、思つても見たくない堪らなく不愉快な事件が聯想される。

ゐたゝまらなくなつた仙造はたうとう立ち上つた。入口の雨戸に南京錠を下して、路地へ出た。支那そば屋のチャルメラが電車通りの方をほそくと鳴き通る。どつかで木魚を叩く音がし

てゐる。錢湯の湯を流した匂ひがむせつぽく漂つて來る。

電車通りへ出た。彼はそこで寒さうにイんで、ときどき前を走り抜けて行く圓タクに目をやつた。青白くまつすぐに走つてゐる電車線をはるかまで見すかした。しかし三重子らしい姿はどこからも見えて來なかつた。

彼は首をふりながら再び家へかへつて來た。

それから更らに一時間あまりした時であつた。三重子の登音に違ひないのが、路地を入つて來た。仙造は胸をドキ／＼さして喜んだ。

登音は、近づくにつれ忍び足となつたが、やがてそれもしなくなつた。家の中の容子を覗つてゐる氣配だ。入らうとして入り得ずためらつてゐる風にも思はれる。待ちきれなくなつた仙造は、こつちから聲をかけた。

「だれ？ 三重子？」

「え……、あたし」

仙造は立つて、一旦掛けた鍵を外して雨戸を開けてやつた。三重子は下を向いて立つてゐた。

「早くおはいら」

「……おそくなつて済みません」

仙造はそれには黙つて、長火鉢の前に来て坐つた。後から戸じまりをして上つて来た三重子は仙造の前へ坐つて頭を下げ、

「お父つあん、ごめんなさい」と、少しかすれた聲で言つた。

その三重子の姿を見た瞬間、仙造は全身に悪寒を感じた。想つても見たくないと思つてゐた不愉快な恐ろしい事件を、三重子のその姿から直感したからであつた。仙造は、つき上げて来る興奮をおさへて、三重子のからだを見つめた。

一旦亂れたのを手さぐりで束ね直したらしい髪、着くづれた襟元、歪みつぶれた帯のお大鼓。

「三重子」

仙造はだしぬけにさう叫ぶと、片手をのばし、三重子の額をぐつと押し上げ、その顔をギリギリと見据えて、

「お前は、お前は……お父つあんにいふことがねえのか？」

「……………」

三重子は、釣り上つた目で、父の面をしつかり見返したきりであつた。

「お前は言へねえのか。……………お前はその姿で、お父つあんの前へよくも、のめくくと歸つて來られたね。このばいた、畜生！」

仙造は、平手で三重子の片頬をピシリとなぐつた。しかし三重子はちつとうつ向いた姿勢を一分も崩さなかつた。それがまた仙造の怒りを煽つた。

「何てえ圖々しい畜生だ」

仙造は、こんどは三重子の頭髮をつかむと、疊の上へどしどしと叩きつけた。

「出て行きやがれ。くたばりやがれ。……貴様のやうな奴は、けふ限り娘とは思はねえぞ」

三重子は、疊の上に押しつけられた頭をそのままにして、ぐつともいはなかつた。仙造はその頭へ一語一語叩きつけるやうに叫んだ。

「わしが、常日頃、あれほど言つてきかしてゐることを、何と思つてやがつたんだ。この耳は、この頭は、何のためにひつつけとくんだ。犬でも三べん教はりやちやんと呑みこむんだぞ」

仙造はもう息がきれて來た。彼は顔中くしゃくにし、口から泡を吹き、そしてフー／＼と荒い息を吹いた。

まったく彼は、三重子の外の罪はすべて許せても、三重子のからだが犯した罪は絶対に許せな

かつたのだ。だからその逆に、三重子がその身を賣り汚しさへしなければ、外の罪はどんな罪でも我慢出来る気持ちであつた。その前の夜、殺しても足りないと思ふ女房の家へ出かけ、乞食のやうに頭を下げて金を貰つたのも、そしてその金で三重子が呉服屋で犯した罪をそつと拭ひ消して置いたのも、いはゞその「我慢」がしたことであつた。又そのやうな「我慢」に堪へてゐたのも、三重子の體だけは少しも汚されてゐないのを知つてゐたからであつた。

だが、今となつては、彼は何のためにあの豚のやうな女房の前に頭を垂れて哀願したのか、またあの生つ白い呉服屋の番頭の前に平身低頭して許しを乞ふたのか、まつたく譯がわからなくなつてしまつた。

そればかりではなく、たつた昨夜、あの涙の出るやうな金を三重子の前へ出して、貧乏を佯びながら、着物なり帯なり買ふがいと云つたばかりなのに、それをも今日はもう頭から踏みにつてしまつてゐる。まつたくこいつは馬鹿か、畜生か！

「やい、こら、何とか言へ」

「……………」

「畜生め、何とも言へねえんだな」

仙造はたうとう立ち上つた。そして三重子の襟上を両手に掴み、その身を引きずり上げて、どうしてくれようといふ風に全身を波打たせてゐたが、何かかう堪らなく息苦しくなり、棄てるやうに手を放した。そしてそのまませまい玄關のたゞきへ出て、雨戸の鍵を外した。もう家の中にはゐたたまらなくなつたのである。すると、三重子が、唇を噛ひしばつて咽びながら仙造の肩へすがりついて來た。

「お父つあん、お父つあん……………」

「畜生！ うるせえ」

仙造は力一ぱい押しつけようとした。が、全身の力ですがりついた三重子の手には意外な力があつた。

「あたしの話をきいて、…………あたし、こればかりは死ぬまで言ふまいと決心してただけど、もう言ひますから、みんな言ひますから、もう一度坐つて、坐つて…………」

「…………言ひわけをするてえのか、そんなものは聞かねえぞ」

「言ひわけやありません。お父つあんのことです。お父つあんの身についてのことなんです」

「わしの身がどうしたといふんだ？」

「それを話しますから、坐つてよ……」

三重子は、父の手をぐいぐい引いて、元の座へやつと坐らせると、

「けふお店で。お父つアんのことで、恐ろしい話をきいたのよ」と切り出して、それからその夜にあつた一切を、とぎれ／＼に話し出した。

それはいふまでもなく、あの時田が、喫茶店のおかみを相手に話した昨夜の強盗事件だつた。仙造の耳には途方もなく馬鹿々々しい話であつたが、その真相を知らぬ三重子は眞剣である。

「あたしは、その事件を聞くと、もう夢中になつてしまつたのよ。その時田といふ男は、不良團をそゝのかしてこの家へあばれこんで来る計画を立てゝゐるんですもの。そしてもし盗まれた金の何倍かのお金を取りかへせなかつたら、お父つアンを強盗犯人として警察へつき出してやると息まいてゐるんですもの。あたしはそのお金を何とかして自分の手でつくらうとしたの。そのお金さへあれば、お父つアンを救へると思つて、そればかり夢中で考へて、その男の後について多摩川の方まで行つたんです。その男はお金を持つてゐたので、さうしてついでに行つてその金を何とかして借りようとしたんです……」

「それでその金を借りて來たのか？」

「……ええ」

「借りただけで済んだのか？」

「……………」

「それだけで無事にかへれたのか？」

「……あたしが馬鹿だつたんです」三重子は吐き出すやうに言つた。

「もういゝ、先を言ふな！」

仙造は、泣いていゝのか笑つていゝのかわからないといふ顔をした。

八

仙造は兩腕を組んではしごき組んではしごきなら、荒い息を吹いた。——この世にこんな馬鹿けたことがあらうか。その時田といふ男は、女房を盗んだあのガニ股の亭主の伴ではないか。三里子は選りに選つて、その男にその身を踏みにじらしてゐるのではないか。それもみんなあの女房が自分を強盗呼ばはりしたことから起つたことぢやないか。それにまたあの女房の口にそんな

ことを言はせるやうなへまをした自分が、何といふ頓馬の大間拔けだ。何もかも途方もない目茶苦茶だ！

ところで仙造は、この馬鹿げた口惜しい憤りを三重子の前で口に出すわけには行かなかつた。それを口に出すからには、その前夜、あの豚のやうな女房の前に乞食のやうに頭を下げて、そして金を貰つた自分の惨めな姿を話さねばならぬし、またなぜさうまでしなければならなかつたかを説明するためには、三重子が呉服屋で犯した罪を拭ひ消すためだつた。といふことも言はねばならなくなるし、しかしそれが言へるくらゐなら仙造ははじめからあんな苦勞はしなかつたのである。

仙造は兩腕で頭をかゝへて、長火鉢の横へゴロリと寝た。何か大聲で怒鳴り出したいやうな氣持ちだ。その中で彼は自問自答した。すると自分はやつぱり強盜犯人といふことになつてゐなければならぬのか。さうだ、さうするより外はないやうだ。ひよつとしたら三重子は今、その身を冒されたのもすべて父の罪を救ふためといふ一つの言ひ譯をつくつて、自暴自棄にもならず自分を救つてゐるのかも知れない。

仙造はそこで寝返りを打つた。そして自問自答をつゞけた。——しかしこんな考へ方つてある

ものかな。毒を以て毒を制へる、といふことがあるが、こんな馬鹿な意氣地のない制へ方つてあるものだらうか。今の一時はそれでおさまるとして、やがてまた飛んでもない悲劇がそこから湧き出やしないか。

仙造の全身にはあぶら汗がにじみ出て來た。いくら割つても割り切れない大きな黒い塊がどつかりと眼の前にあるのだ。彼はこの年までにこのやうな塊に幾度ぶつかつて來たか知れないが、今度の塊にもし負けたら、萬事おしまひだと思つた。

「冗談ぢやねえぞ！」仙造はむつくりと起き上つた。

その恰好は、周圍を取り巻くこの途方もなく出鱈目な世界に向つて、雛どりを庇ふ親鶏のやうに捨身でぶつかつて行かうとするもののやうに見えた。その眼にはまた三重子に對し、今までとは全く別な可愛いさが新らしく輝き出したやうに見えた。

仙造は、やうやく三重子へ言つた。出来るだけ靜かに、しかし腹の底から出る聲で言つた。

「全く冗談ぢやねえぞ。よし、よし、もうお前を責めやしねえ。お前も、お父つあんを救ふためにしたことなら、なんにも自分を責めることアねえ。……だがな、このお父つあんが強盜犯人だなどといふことは夢にもねえことだよ。それは出るとこへ出りやはつきりすることだ。これはお

父つアんが、誰の前でも大きな聲で言へることだ。……やがて言ふ時が来たら、ありのままを言つてやる、が、今夜はこれで打ち切りとしようぜ」

三重子は黙つて、長い間泣いてゐた。やがて父の顔をまじく見つめて、

「あたし、もうあの喫茶店をやめて、そしてどつか外の、たゞ手足を働かせればいゝやうな仕事をめつけるわ」と言つた。

「うん、それもよからう。それからゆんべもらつて来た金も返してやるがいゝぜ」

窓のすり硝子が、いつかほの青く色づいてゐる。夜が明けかけたのだ。仙造は、三重子の顔を、溢れるやうなあたゝかい目で、しみじみと見守りながら言つた。

「あゝ、もう朝だぜ。ちつとばかり朝の空気を吸つて来ようか」

やがて二人は、朝の色で卵色にうすれた裏街の灯の下を、隅田公園の方へボツ／＼歩いて行つた。

(昭和八年六月)

彷徨

一

給をネルに着がへてK病院へ診察を受けに行つた妻は、三時間ほどして歸つて来ると、自分の机の傍に坐るなり息ぜわしく、

「脊椎カリエスですつて！」と言つた。

「カリエスとは？」

妻は昂奮してゐて、あとがすぐ言へなかつた。しばらくしてから説明した——ほつとけば致命的の病氣だ。脊骨の芯が腐つてだん／＼曲つて来る。そしてそこから膿が出るやうになる。さうなつたら三年や四年では癒らない。だからすぐ手當をしなければいけない、と。

この少し前まで妻は、外の病氣で三月あまり病院通ひをしてゐたばかりなので、また病氣かと

聞くと自分はいゝ顔は出来なかつた。病氣そのものよりも、それに伴ふ貧乏と、妻のヒステリーが自分には堪らなかつたのである。

「どういふ手當をすればいいのだ？」

「あまりテキパキした療法はないさうですの。ギプス・ベットといふのを造り、それに寝て絶對安靜にしてゐるのですつて」

「ギプス・ベットとはどんなものだ？」

自分があまりつけ／＼言ふので、妻ははら／＼しながら、

「……わたしにも解りません……それから毎日背中日光浴をすること、出来るだけ滋養物を食べること……さう言はれて来たせいかな今日は分けても背骨がつき／＼痛んで……」

「しかしそりやいゝ病氣だ」と自分は大きな聲を出した。「寝てゐて、うまいものを食つて、そして日向ぼっこをしてゐるといふんちやまるで極樂浄土だ。俺もして見たいよ」

妻は顔を伏せてしまった。やがて、膝の上に置いてある手の甲に、涙がぼとり／＼落ちて来た。で、自分はそれ以上意地悪を言ふことを止めた。

その夜妻は、茶の間へ早くから床を敷いて、病院で注意されて来たやうに、脚を伸し仰向けに眞直ぐに寝た。自分は長火鉢に凭れてぼんやり煙草をふかしてゐた。庭で蛙がグイ／＼啼く。

自分は今もう、妻に對し意地悪ではなくなつてゐた。むしろ妻の氣持に添ふやうになつてゐた。妻にもそれが解つたらしく、妻はふと言つた。

「あなた」

「なんだ」

「わたしが死んだら、あなたはどうかなさる？」

「少し困るね」

「嘘をおつしやい。せい／＼するでせう」

「あるひは、さうかも知れん」

「それごらん、どうせさうなんだから」

「……………」

「わたしは、あなたが死んだら……………」

「どうするね？」

「わたしも死ぬ」

「そりや困るよ。來世は俺もせめて一人で暮したいね」

「さオ、ちややつぱりわたしが死ぬば、ほんとうにせい／＼するのね？」

「それとこれとは話が違うよ」

「いゝえ、同じことよ。わたしにはよく解つてます……………でも、あなたがわたしより先に死ぬやうなことは決してないわね」

「さうとは極つてやしない。第一俺はお前より十年も餘計に年を取つてゐるんだから」

「それでも駄目、もうちゃんとして極つてるの。わたしは今度の病氣で死ななければ、また外の病氣が出て來て、それで死ぬに極まつてるの。さうしてわたしが死んでしまへば、あなたは直ぐにまた……………」

そこで妻はくるりと向うを向いてしまった。通りの方から、ラヂオのヴァイオリンの獨奏が聞えて來た。自分は聞くともなくそれに耳を傾けてゐたが、

「おい、横に寝ちやいけないと言はれて來たんだらう！」と言つた。

妻は黙つて仰向きになつた。そして、

「あなたは、わたしが死ぬば直ぐ結婚する相手があるのでせう？」と艶のない聲で言つた。

「まだその話かい？」

「逃げるおつもりね」

「逃げはしないよ。しかし俺にそんな相手があると思つてるのか？」

「とぼけていらつしやる。今頃になつて隠したつて間に合ひませんよ」

妻は今度は眼を光らして自分の方を見た。自分はまぶしさうな眼付をした。と、妻は腹を極めたやうに、

「そりや十何年も前から戀し合つてゐるといふのですから、わたしより可愛いゝのは當り前かも知れませんが、それちやわたしが堪らないわ。それも胸の中で思つてゐるだけならまだいゝのですけど、わたしに内緒で何處かで會つたり、一しよに旅行をしたりしてゐるのですもの、あんまり人を踏みつけてますわ！」

「……………何だか問題が外れちやつたね」

「少しも外れやしません」

妻は天井をギロツと睨めてゐる。自分は少し乗り出して、

「それぢや正直のところを言ふがね……おい聞いているのか？」

「よく聞いてゐます！」

「さう怒るな。なるほどその女は、俺が中學四年時分からだからもう十五年にもなるが、その頃と今とを一緒にして考へちや困るな」

「それも嘘です。何年前か、その女の人がお嫁入りする時、あなたはその人にかう約束したといふぢやありません——もしあなたが破鏡の嘆を見るやうなことがあつたら、僕はいつでもあなたを引き受けます。僕の心の中には、あなた一人を容れるだけの席はいつでもつくつて置きますからと……そしたらやつぱりその破鏡の嘆となつて……」

「一體だれがそんなことを言つたんだ？」

「あなたのお姉さんが言ひました」

「しかし、それも十年前の話だよ」

「十年前に約束して、そして近頃それを實行することになつたのでせう」

「馬鹿言へ！ さうなつたらかうして安閑としちやゐられないぢやないか」

「だから安閑としちやゐないでせう年中ソワ／＼として」

「フン、ぢやいよ／＼正直をいふが……女といふ奴は蟲がいゝものだね。その女は意外にもそれから十年して、つまり去年の春に、お前の所謂「破鏡の嘆を見て」東京へ一人で出て來たのだが、その時その女は、俺がお前と結婚してゐるのを知ると、非常に失望したり恨んだりしたよ。だが十年も経つうちには、俺の心だつていくらか成長するからね、その女が易々と入れるやうなそんな空地はなくなつてゐるよ。女から言へば、頼りない薄情な男かも知れないが、實はそれが本當で自然だからな。だから俺はありのまゝの心をその女に言つてしまつたよ。するとその女は、非常に寂しい顔をした。むしろひねくれた顔をして、そしてそれから俺と會はうとは思はな

いんだ。だから俺からも會はうとは思はないんだ」

「な」

「これからも會ひませんか？」

「會はな」

「出鱈目おつしやう」

妻はそれを部屋中にひびくほどの聲で言ふと、顔を夜具の中へ埋めてしまった。

三

一日置いた次の日は、妻のカリエス療治の道具であるギプス・ベットを造る日であつた。これは、今まで何かにつけて世話になつてゐるK病院のOさん（妻のカリエスもこの人が発見したのであつた）の世話で、中野のN病院で實費だけで造つて貰ふことになつた。Oさんの注意で自分もそのN病院へ妻と同道すべきであつたが、實は自分はこの日、妻の謂ふ「破鏡の嘆を見た」女と會ふことになつてゐた。

どういふ氣持で會ふにしろ、未だに妻に秘密にさういふことをしてゐるのは何といつても晴々しない氣持だつた。殊にその日はさういふ日であつただけいふ氣持ではなかつた。けれど會はずには濟されない事情があつた。自分は仕事の用にかこつけて妻より先に家を出た。用の濟み次第病院へ駈けつけるからと言つて出た。

彼女は、上野の動物園の鶴や鶯鳥の啼き聲の聞えるやうな場所に、一人で、二階住ひをしてゐ

た。臺所から黙つて梯子段を上つて行くと、彼女は亂れた髪をかぶり、北窓の下の壁に凭れて單衣を縫つてゐた。

「おとゝひからかゝつてまだ仕上らないの」彼女は縫ひかけを持ち上げて見せて寂しく笑つた。過去十年を、自分で自分の着物を縫ふやうなことをしなくも濟むやうな安易な有閑生活をして來た彼女は、今となつては海の魚が岡へ引き上げられたやうなものであつた。

「今日は金が出來ないんだが」自分は先づそれを言つた。彼女は髪を掻き上げて何か言ひさうにして、黙つてしまつた。

自分はそこで、妻の病氣のことや、今日N病院で造るギプス・ベットのことなどを話し、その費用さへどう工面しようかに迷つてゐると言つた。

「質草があればそれで間に合はして上げるのだが、それもきれいに無くなつちまつたし」さうも言ふと、彼女は顔を急に赤くして、

「わたし、お嫁入りの時の裾模様と丸帯を持つてゐるのですけど」と言つた。自分はまたさういふ品物に手をつけることは何かの祟りがありさうで氣持が悪かつたが、外に手段はなかつた。

間もなく自分は大風呂敷包みを抱えてそこを出た。そして行きつけの質屋で用を濟し、再び彼

女の部屋へとつてかへすと、彼女は襦袢にくるまつてごろ寝をしてゐた。

「やつとこれだけ借りて来たよ」さう言つて、質札と金を彼女の枕元へ置いた。が、彼女は襦袢の中から顔も見せず、

「どうも済みませんでした」と言つたまゝ、枕元の金も自分の方も見ようとしなかつた。

自分は、病院の方へ心が急いでゐるので、構はずそのまゝそこを出てしまつた。しかし氣持は妙にくすぶつたまゝ尾を引いて彼女の方に惹かれた。

四

N病院では、Oさんも來てゐて自分を待つてゐてくれた。自分は妻の顔を見たとき、氣持がひどくちぐはぐになつてゐるのに氣づいた。自分は妻に尻を向けてOさんと對してゐた。

「珍らしく早く發見できてよかつたですね」とOさんは言つてくれた。自分は、自分のいこぢから妻の病氣を手遅れさせてゐやしないかと氣に咎めてゐたので、ホツとした氣持で、心から禮を述べた。そして、

「幾月ぐらゐで全快するものでせうか？」と訊いて見た。

「さア………とにかく必ず癒りますから心配はないですよ。この前K病院へ奥さんが見えた時は整形外科のBさんもYさんもそれから部長のS博士も診たんですが、みんな意見が一致してましたよ。第四胸椎が冒されてゐるのですが間違ひなし全快する性質のものだといふことだつたです。去年、九州の醫科大會で、カリエスでは權威のT博士の研究發表に依ると、ギプス・ベットに寝てゐること、患部の日光浴をすること、滋養物を取ること、この三つの療法をとれば、九五パーセントまでは全治するといふことだつたです。博士はこれまで、その療法を約五萬人の患者に實驗して見て、今のやうな結果を得たといふんですから確實なものですよ」

それを聞くと、妻は、傍の自分にも解るほど深い溜息をついて、急に安らかな顔になつた。その後で、

「三月ぐらゐしたら、癒るでせうか？」と訊いた。

「さア………」とOさんはそれにはやつぱり迷ふ風だつた。「とにかく氣ながに療治しなければならぬ病氣ではありますよ。急いぢやいけませんよ。まア浮世を離れたつもりでうんと香氣に寝てゐることです。たまに起ることはいゝが、長起きは禁物です。起きてゐて針仕事をしたり編み物をしたりするのはもつと禁物です。それから臺所をしたり、重い物を揚げたり、あなたの所

も井戸でせうが、水を汲んだり、バケツを提げたりは大の禁物です。構ふことはない、旦那様に飯も炊かせ、雑巾がけもさせて、あなたは済して寝てゐなさい。それからね、それからね……」

とOさんは少し禿げ上つた白い額をちよつと赤くして、妻と自分の顔を工合悪さうに見たが、また急に眞面目になり「禁慾生活、これを破るのは何よりの禁物ですよ」と言つた。

「え、え！」と自分は反射的にしつかりとそれに答へた。

妻は少し顔を伏せた。そこへ看護婦が顔を出して、

「用意が出来ました」と告げた。

妻は、手術室で素裸體にされた。

「腰巻も取つた方がいゝんだが」と言はれて、妻は壁の方を向いてもち／＼してゐたが、ソツと自分の方を見て、小鼻をしかめた。

「いや、それはしてゐても構ひませんが、汚れるからこれにくるまりなさい」と一人の醫員が、ネルの大巾の布を出してくれた。妻は、それにしかへると、なるべく下の方へ、と言はれ、もつともつと注意され、臍の見えるあたりまでその布をすり下ろされて、耳まで顔を赭くした。

さうして妻は、手術臺の上に向つ伏せに寝かされた。その病院つきの二人の醫員にOさんも

加はり、看護婦二人と、自分も手傳ふやうに言はれ、都合六人がかりでギプス・ベットは造り始められた。どういふことをされるかといふ不安で、妻は、自分にも解るほど身體を緊張させてゐた。自分もいゝ氣持ではなかつた。

自分はOさんの指圖で、手術臺の端から下向きに出てゐる妻の頭を、額のところ支へ持つてゐた。そして妻の軀體は、正確なベットを造るために、料理される鰻のやうに眞直ぐに眞直ぐにと引き伸ばされた。さうして見る妻の身體は、夫である自分の眼にも驚かれるほど痩せ細つて長かつた。結核菌が脊椎を冒してカリエスとなつたので、肺を冒されるよりは、傳染性がないだけでも救はれてゐる、と言はれてゐたが、さういふ身體を今更ら見ると、或ひは肺までも冒されてゐるのではないかと疑はれた。

巾四寸、長さ七八尺あるといふ白布が、伊達巻のやうに巻かれ、それが四十本ほど、床の新聞紙の上に置かれてあつた。その白布は、布目の中にたつぷりと石膏粉を含ませてあつた。その傍には湯を入れたバケツが一つ置いてあつた。

一人の看護婦が、そのバケツの湯の中へ、卷いた白布を四五本づつ浸した。布目の中の石膏粉が湯に溶けて、ねばりつくやうになるのを待つて、看護婦が一本づつ取り出し、一人の醫員の手

に渡す。その醫員は、手術臺を挟んで立つてゐるのさんと、も一人の醫員に、白布を持たせる。二人はそれを互ひにたぐり寄せるやうにしてほぐしながら、妻の背中へちかに張りつけ始めた。妻はちよつと身體を顫はして、一層筋肉を緊張させた。

一本が済むとそれに繼ぎ足して二本目が張りつけられた。五本ほどで、背中から尻の上までべつたりと張りつかった。

「あつと、頭、頭」そんなことを言つて、六本目から、肩の布につゞけて首から頭の上に張りつけ始めた。耳から下を残して頭は圓く圓く張りつけられた。凡てこれらは、恰かも妻の軀體を型として一つの張子を造るやうなものであつた。

圓い頭が首の所で少しくびれて、それが急に擴がつて肩となり背となり、更らに盛り上つて尻の上まで一通りその白布が張りつくと、脚はネルにくるまつてゐるので、妻の身體で見えるものは足先きりとなつた。その鈍感な曲線を描いた白い身體を自分は見てゐるうちに、厭な氣になつた。そしてその氣持をまぎらすために、何か言はうとし、苦笑しながら、

「まるで木乃伊を造つてるやうですね」と言つてしまつた。言つてしまつて自分はハツとした。

木乃伊はひどいと氣づいたのである。他の人達は平氣な顔で手を動かしてゐたが、妻にそれがど

う響いたらうと、氣になり出した。

「おい、大丈夫かい？」自分は妻の耳元へ囁いた。

「ええ」妻は、低いが力のこもつた聲で答へた。自分の今言つた言葉などは何とも感じないほど他のものに對して緊張してゐることがそれで解つたので、自分はホツとした。

石膏の布は、一枚一枚と張られて行くうちに、妻の上半身の型なりにだん／＼と厚い層をなして行つた。自分はその層の上から妻の横腹あたりの呼吸運動を見てゐた。最初はそれがはつきり見えてゐたが、層が厚くなるに従つて次第に微かになり、半ば過ぎると、もう自分の眼には感じられなくなつた。見てゐて自分は不安になつて來た。

「おい、大丈夫かえ？」自分は再びそれを高い聲で訊いた。看護婦の一人がチラリと自分の方を見た。

「え」さう答へた妻の聲が、氣のせいか息苦しさうであつた。自分は頭を下げて、妻の息聲を聴き取らうとした。

「大丈夫です。かへつて氣持のいゝもんです。暖かい布にくるまるんですからね」一人の醫員が元氣よく言つてくれた。

やがて四十本の石膏布が殆んど張りつかつた頃、石膏粉は固まりかけた。三人の醫者は、代る／＼指先で叩いて見た。叩かれると、白布の層はコツ／＼といふ音がした。その音には自分はまゐつた。妻には殊にどうひゞくだらうと思ふと更らにまゐつた。妻の生きた身體から無生物——石か枯木か、そんなものゝ音を聞くといふことは實際堪らなかつた。

自分は、自分の掌へ全神経を集めて、妻の額から頬の邊を撫でるやうなことをした。その手觸りで、無生物ではない、生きてゐる人間——立派に呼吸をしてゐる妻を實感しようとしたのであつた。これは自分ながら切ない氣持であつた。

自分は、何か妻の身にしみるやうな言葉を言ひかけたかつた。が、さう思ふと涙が出さうになつたので、唇を喰ひしばつて黙つてゐた。

仕事は濟んだ。そして石膏粉がすっかり固まるのを待つて、ギブスはすつぽりと妻の身體から抜き取られた。妻の身體は直ぐむく／＼と起き上つた。自分はホーツとした。しかし手も足もない頭だけの人の形をしたギブスが、傍の寢臺へ仰のけに置かれたのを見ると、自分はゾツとした。無生物であるべきそのギブスが、妻の身體のある生氣を奪つて、何かグロテスクな生きものゝやうに見えたからであつた。

自分はそれを見ないやうに窓の方へ立つて行つた。妻は、上氣した顔をあげて手術臺から下りた。背中の肌や髪にこびりついた石膏粉を一人の醫員が剥ぎ取つてゐてくれる。自分がそれに代つてしようとしたが、自分はその妻にも寄りつけない氣持で、窓から庭の鳳仙花の赤い色を見詰めてゐた。

五

ギブス・ベットはそれから三日して、幾分恰好よくされ、肌へ當る内側は柔かい布で包まれて出来て來た。しかしさうして見ても、形のグロテスクさには變りはなかつた。妻はそれを見ると顔中に皺をつくつて、そんなものに寝てゐるのはいやだと言ひ出した。

「今になつて何を言ふのだ」と自分は言つた。

「だつて、あの日は氣が張つてゐたので何とも思はなかつたけど」と妻は口を尖らして「自分の抜殻がそこにあるやうで、それにまた自分が入つて寝るなんていやです」と言ふのであつた。

自分も、そんなものに入つて寝てゐる妻を見たくはなかつた。けれど二人が今になつてそんなことを言つてはゐられなかつた。自分は、自分の氣持にも妻の氣持にも逆襲するやうにつけ／＼

と言つた。

「そんな病氣になつたのが因果なんだ。黙つて寝てることだ」

「そんな言ひ方つてないわ、わたしが好きでなつた病氣ぢやあるまいし」

「そりやさうだらうが、俺のせいでもないんだからね」

「あなたまでがそんなことを言ふんなら、わたしはどうすればいいんです。わたしの心の中はそんなところか……どうせわたしは死んでしまつた方がいゝんでせうから……」

そんなことを言つてゐるうちに妻は泣き出してしまつた。

さうしてギプス・ベットは何かの死骸のやうに座敷の真中に抛り出されたまゝ、自分も妻もそれに觸れようとしなかつた。

妻は黙つて床を敷いて寝てしまつた。それは醫者の注意を思ひ出して寝たのではないことは解つてゐた。が自分も黙つて隣りの自分の部屋へ引き込んでしまつた。妻の啜り泣く聲がしばらく聞えてゐた。

しばらくして、背後の襖が開いて、

「あなた」と妻が寝ながら聲をかけた。

「なに？」自分は机に向つたまゝ答へた。

「この間、ギプスを造つた日、あなたは何處へいらしたんです？」

自分は黙つてゐた。

「あの日、女の人に會つて來たでせう？」

「……………」自分は、背中にある不快な表情を現はしながら尙も黙つてゐた。

「隠していらしたつて、わたしにはよく解つてます。あの日、それがあなたの顔にちゃんと書いてあつたんですから……………」

あゝいふ場合、さういふことを見抜くことにかけては、多くの人妻と同じやうに妻にも不思議な本能が備はつてゐた。かうなつてはそれを打ち消すだけ自分の不利になるばかりか、妻を病的に昂奮させることが解つてゐた。そこで自分はやうやく妻の方へ向き直り、ぐつと下手から、

「それがどうなんだ？」と柔かく切り出した。

「どうなんでもありません。あなたほど腹黒い人はありません。もうわたし何も言ひませんからその女の人の所へ行つてしまつて下さい」

「おん出さうといふのかえ？」と自分は笑つた。

「ご自分でおん出たくつてゐるのぢやありませんか」

「さうひねくれるな。あの女はまア謂はゞ動物園の駱駝見たいなものだ。現在の生活には少しも心が動かないで、昔のサハラか何處かの砂漠の生活ばかり夢見てゐるのだ。動物園の駱駝をお前も見たことがあるだらう。あのうつら／＼してゐる眼付を見てゐると、誰でもさう思ふから。あの女もあれだよ。季節毎に流行の着物を三重ねもつくり、履物を一度に三足も買つて貰つた過去の結婚生活ばかり夢見てゐるのだ。それに子供は置いて來てあるのだし、お前のギプス・ベットぢやないが、現在の彼女は、過去の彼女の抜殻なんだよ。さういふ女と新しい戀など生れよう筈がないぢやないか」自分はこれをわざと浮々した調子で言つた。

「二人で動物園を見物したのでせう？」

「さうぢやないんだよ」

「わたしには駱駝だか抜殻だか、お目にかゝつてゐないんですから解りません。とにかくする時は男らしくして下さいね。こゝを泥見たいなことは止して下さいね。それだけはよくお願ひしときますよ」

妻はそれを、とゞめを刺すやうに言ふと、びしやりと襖を閉めてしまつた。自分はギプス・ベ

ツトを造つた日以来、妻に對し新たなる何かを感じてゐたのであつたが、今日の妻はそれを引きさらつて行くやうに感じた。さう感ずるだけ自分の氣持が妻にびつたりしてゐないのだ、また根本の罪は自分の方にあるのだ、とさう思つて見ても不愉快は容易に去らなかつた。いやな一日であつた。

夜になつて妻はやうやくギプスへ入つて寝た。

「寢具合はどうだえ？」自分は腫物に觸はるやうに遠くからソツと訊いて見た。

「えゝ、何だかかう身體全體が、力のある大きな掌でしつかり支へ上げられてゐるやうで、割りに氣持がいいの」妻もそれをこつちの氣持に合せるやうに言つた。

「そりやいゝ、お蔭でお前の寢相も直るといふわけだね」

妻は始めて微笑した。その夜自分は、全身に非常な疲労を感じてゐた。が、押して机に向つてゐた。けれど十二時近くなると、眼先がくらむやうになつたので、倒れるやうに床へ入つた。眠つてゐると思つた妻が、この時ふと眼をあけて、

「これへ入つて寝てると、一人ぼつちになつたやうで淋しくて寝つかれないのよ。今夜だけ傍へ寝てくれない？」とほんとに心細さうな聲を出した。

「だが、Oさんの注意を忘れたら大變だぜ」

「そんなことぢやないんです！」と妻はそれをムキになつて言つた。で、自分は、狭い敷布團の半分へ、固いギプスと肩を磨り合せるやうにして寝た。

何時頃か、自分は、變に鋭い妻の泣き聲で眼を覺した。自分はすぐ枕元のスタンドをひねつて、

「おい／＼」とギプスの肩をゆすぶつた。ギプスは小舟のやうにころ／＼揺れた。

「あゝ眼がまわる、眼がまわる……………」妻はさう言ひながら頭をあげて自分のギプスを見下した。

「夢を見たのか？」

「あゝ恐かつた。わたし、まだ生きてゐるのに棺の中へ入れられたとこなの」

「このギプスがいけないんだね」

「えゝ、やつぱりいゝ氣持ちぢやない。今夜だけこれに寝なくもいゝ？」

「……………」でも、今夜から馴らすのだからね」

「わたし、とても辛い」

妻は手を伸してスタンドの灯を消した。しばらくすると妻はまた一人しく／＼泣き出した。自分は眠つたふりをしてゐたが、その時ばかりは妻がしみ／＼可哀相になつた。

六

妻はそれからギプスへぎつちりと寝て暮すやうになつた。そしてさう矢鱈に泣くやうなこともなくなつた。しかし自分だけが勝手に極めてゐた「三月ぐらゐ」の日が経つても、カリエスは目に立つて良くはならなかつた。一時間も起きてゐると、脊骨は堪らなくづきり／＼痛んで來るといふのであつた。妻は少し焦れ出した。

十月始め、妻は盲腸炎に冒されて四五日苦しんだ。妻は、今度こそこれで死ぬのではないかと思つたらしかつた。が、Oさんの手當でそれは癒つた。再發し易い病氣だからこの後は注意しないと危ないと言はれ、妻はまたそれを氣に病み始めた。

この頃から自分は、上野の彼女のことを頻りと氣になり出した。考へてゐると譯もなく憂鬱になつた。夢にも見た。夢では、十幾年以前のすがし／＼い戀心を感じた。自分は今更らのやうに彼女と自分との交渉の深さを感じた。けれど一方に病身の妻のことを考へると、かう感ずること

がまた自分を憂鬱にした。結局自分は彼女を訪ねることを我慢してゐなければならなかつた。が、十一月に入つて自分はつひに彼女を訪ねた。訪ねて見ると彼女は上野の宿を引き拂つてゐた。自分はある不安を感じながら、引き移つた先の高田馬場の下宿を訪ねた。そこは下宿兼旅館の看板で、主に學生相手の宿であつた。彼女はさういふ宿の二階の四疊半にゐた。自分がその部屋へ入つて行くと、彼女は薄汚れた横顔を見せて小さな瀬戸火鉢の上にこゝみ、口を尖らして火をおこしてゐた。その顔をあげてぢろりとこつちを見上げた。その眼は充血してゐて鋭どかつた。

「わたし、あなたは死んでしまつたのかと思つた」と彼女は言つた。

「済まなかつた」と自分はそれだけを言つて坐つた。

「でもよく忘れずにいらしたのね」彼女は皮肉に口を歪めて「實はね、わたし今度いよく決心して、日本の内地を離れてしまふの」

「内地を離れて何處へ？」

「あなたなんぞの解らない所へ。來て下さらなくともあなたの言ひ譯の立つやうな所へ」

「行きたくなれば僕は何處までも追ひかけて行くよ、一體何處だね？」

「樺太」

「樺太へ……ほんとうに？」

「ほんとうですよ。わたしの女學校時代の友達が、大泊の病院の看護婦をしてゐるの。その人の世話で、わたしも看護婦見習としてそこへ住み込むつもりなの」

この嘘とも本當ともつかぬ彼女の言ひ方に對して、自分はしばらく呆んやりしてゐた。

「どうしてまたそんな所へ行く氣になつたのだね？」やがてさう訊いた。

「どうしてつて……どうしてつて」と彼女は言ひ激んで「名古屋のあの人がね（別れた良人のこと）家の女中に子を産ませたんですつて。それも男の子を。そして家のすぐ近くへ大事にかこつとくんですつて。……それを知つてからわたし、もう口惜しくつて口惜しくつて……」

「まだそんなことにこだわつてゐるのだね。ちやんと正式に離縁しちやつた人ぢやないか」

「だつて、わたしの子供を一人残しとくぢやありませんか。あの子は女だから、今度男の子が生れたりしたらどんな目に會はされるか。……あの子のためには、わたしはもう一度あの家へかへつてもいいと思つてゐたのに」

「それはとにかく、それと樺太へ行くことにどういふ關係があるのだね？」自分は、彼女の言ひ

たがつてゐることにはわざと觸れずに話を元へ返した。「看護婦の見習までするつもりなら、東京でいくらでも出来るはずだが」

「それにもいろ／＼の譯がありますの。實はね、あれから、あなたがわたしの所へ來なくなつてから、わたし飢ゑ死ぬやうな目に會つたの。それで、思ひ切つてあなたを頼つて行かうかと幾度思つたか知れないけど、御病氣の奥さんのことを思へば、そんなこと出来るわけのものぢやなし、そのうちにわたし、奥さんにひどく恨まれてゐることがはつきり解つて來たの。あたりまへのはなしですけど、夢にまで奥さんが出て來るのよ。一度もお目にかゝつたことのないあなたの奥さんの顔が、夢でははつきり解るのよ。それがとても恐い顔で、わたし、聲をあげて眼を覺したことがありますわ。一度はわたし、奥さんの前に手をつけて泣いて謝つたことがありますの。すると奥さんも一しよに泣き出して——あなたがそこにさうしてゐる間は、わたしは夜もおちおち眠れない、生きてゐるのがとても辛いから、いつそのこと一しよに死んで下さい、とおつしやつたの。わたしその夢にはびつくりしちやつたわ。それから、覺めてゐる時でもしよつちう奥さんの姿が眼に見えて、外を歩いてゐる時など、奥さんが不意に路次から飛び出して來さうな氣がしてならないの。それでわたしもう東京にはゐたくまらな氣持になつたの。わたしはあなた

の奥さんに對して知らず識らず大變な罪を犯して、それでこんな罰を受けるのでせうから仕方がありませんわ。それにわたし自身も東京の生活にはすつかり行きづまつたのですから、どこへでも出て行く氣になつたの。さういふ氣になると、何處へでも行つて何でもする氣になつて、どうせ何處かへ行くなら思ひ切つて遠い所の方がいゝと思つて……」

そこまで言ふと、彼女は火鉢の上に顔を伏せてしまつた。

自分は、何も言へなくなつた。自分は油と垢で汚れた彼女の襟元を息苦しい氣持で見詰めてゐたが、急に立ち上つて、

「外を少し歩かう、まだ日があるから」と言つた。

「いや、いや！」と彼女は強く拒んだ。しかし自分は執拗くそれを促がした。彼女はしぶ／＼立つて、鼠色の肩掛けを頭からかぶるやうに掛けて自分の後へついて來た。

山手線のガードをくゞつて、戸山ヶ原のスロープを彼女は喘ぎ／＼登つてゐたが、ふと立ち止つて、

「わたし歸る。歩きたくない」と言ひ出した。自分は彼女の手を執るやうにしてまた促がしたが彼女は重苦しい反感の色さへ示して、そこを動かうとしなかつた。

「ぢやこゝで別れよう。近いうちまた必ず行くからね、今日の話は落ちついてもう一度考へ直して見てくれ。あなたの頭は少し何かに痺痺してゐるやうだよ」自分はさう言つて別れた。別れて見ると、自分は彼女がまたひどく可哀さうになつた。氣持ちは妙に分裂した。そしてその收拾が容易につかず、つかぬまゝ自分は家へかへつて來た。

七

分裂した氣持は、自分にも意外な執拗さをもつて、頭の中にも視覚にも聽覺にまでも或る妙な陰影をつくつた。これは自分の始めて經驗する氣持であつた。

この陰影はギブスに寝てゐる妻にも反映せずにはゐなかつた。しかも妻に反映したものは、より以上の亂れた陰影となつて自分にかへつて來た。やりきれなくなると、凡ての原因は妻のギブスにあるやうな氣がし、自分はひとりそのギブスを憎んだ。

妻はギブスには馴れ切つてゐた。朝、背中の日光浴をする時、妻は、汗と脂肪でしめつぽくなつたギブスの内側を乾かすため、自身が長々と寝そべつた傍へ、そのギブスを自分の子供かなんぞのやうに寝かして冬の陽に當てゝゐた。自分はそのギブスを仇敵のやうにいつも睨めてゐた。

妻が便所へ立つた場合などは、そのギブスは、ぼこりと凹んだ暗い顔を出して布團の中に寝てゐた。不用意にそれを見た時、自分はいつもゾツとした。

「起きた時は、ギブスはすつかり布團の中へ埋めて置けよ」自分は、恐い顔をして妻に言つた。けれど今度は、頭のないギブスが尻の方を變に高くして、もつくりと布團の中に埋つてゐるのを見ると、またゾツとした。

「もつと何とかならんのか！」自分は今度はさう叫んだ。

夕方、布團を片づけて部屋を掃き出す時などは、妻はギブスを部屋の隅に立てかけたりして置いた。立てかけるとギブスのいやな形は更らにはつきりといやな形となつて眼に迫つた。

「馬鹿、無神經！」自分もうムキになつて怒鳴つた。

「そんならどう置いたらいいの？」妻ははら／＼しながらさう訊く。

「押入へ入れて置け！」

が、また別の時、何かの用でその押入を開けると、ギブスは暗い中にうす白く横たはつてゐることがあつた。そんな時、自分は後じさりするほどひどく脅かされた。

「なぜむやみと、こんな中へ入れて置くのだ！」自分は更らにさうきめつけた。

「それちや、この家の中には置いとく場所がないぢやありませんか」

「ありやしないよ。あつて堪るものか。そんなものを置いとくに都合のいゝ家に住んでゐたら、俺達は滅亡しちやう！ 實にこいつは堪らなく不吉な影と形を持つてやがる。そいつのゐる間は、この家に運は向いて来やしない。俺だつていつまでもうだつが上りやしない。俺はもうこの家から飛び出しちやうぞ！」

それは雨の降る夕方であつた。自分はこれを、妻に向つてとなく、ギブス・ベットに依つて象徴されてゐる家の中の何かしら不吉な暗い影に向つて罵り叫んでゐる氣持であつた。實際そんな時は、いやな形の暗い影が、家中にうよ／＼してゐるやうな氣がして仕方がなかつた。

妻は呆氣に取られ、押入の前でおろ／＼してゐたが、やがて眼を涙で光らせながら自分の方へ詰め寄つて來た。

「……だから、サツサとこの家を出て、あの女の人の所へ行つたらいゝぢやありませんか。ギブスがいやなのぢやなくて、わたしがいやなのでせう。そんな廻りくどいことを言はないで、この前にもお頼みしといたやうに男らしくキツパリ言つて、行つてしまつて下さい。……わたしがカリ

エスになつてからこつち、あなたは一日だつて明るい顔をしてたことがないぢやありませんか。いつも心の中でわたしが死ぬやうに祈つてゐるのでせう。そしてあの人と一しよになることを思つてるのでせう。けれどわたし、もう殺されたつて死にやしませんよ。カリエスで脊骨が蝦のやうに曲つたつて死にやしませんよ。だからわたしが死ぬのを待つてゐずに、今、あの人の所へ行つてしまつて下さい。今すぐ出て行つて下さい！ わたしはもうそんな顔を一日だつて見てたかありません！」

さう叫んでゐるうちに、妻は疊の上へばたりと突つ伏してしまつた。髪をくしやく／＼に掻きむしり、十本の指を釘のやうに折り曲げて疊をガリ／＼引つ掻いた。そして齒を噛み折るやうに齒ぎしりをした。

自分は僻易して、妻の肩へ手をかけて引き起さうとした。すると妻は、疊へ頭をすりつけて起きまいとした。見ると、疊の上に一筋血が流れてゐた。

自分はいきなり妻を抱き起した。口のまわりが血にまみれてゐた。顔はすっかり蒼くなり、眼は焦點を失つてゐる。「あツ舌を噛んだのだな！」と自分は思つた。さう思ふや、片手に拳をつくつて、妻の口の中へぐいと押しこんだ。さうされると妻は、栗鼠が物を喰ふ時のやうに両手で

こつちの手首を持ち、頭を痙攣的に顛はしながら渾身の力で、口の中の拳を、カツと噛んだ。コリ／＼といふ音がした。自分は指が噛み切られた程の痛さを感じた。しかし「もつと、もつと噛め、もつと噛め！」と叫んだ。

妻は二度ほど力限り噛むと、ぐつたりとなつて拳を離した。自分は傍の食卓の上にかけてた白布の端を引き寄せて、妻の口の周囲から中までよく拭つた。そして口を開けて見ると、舌の傷は案外に微少で、先端の皮がちよつとむしれてゐただけであつた。だが、鮮やかな血はそこから盛り上るやうに湧いて、すぐ口の中一杯を眞赤にした。で、自分は立つて脱脂綿を取つて戻り、それを舌の傷へ當て、その上を妻に片手でおさへさせた。妻は全身の筋を抜かれたやうにぐつたりとなつて、言はれるまゝにしてゐた。

やがて自分は、噛まれた指の痛みを感じて來た。見ると、人差指と中指の關節の上が各々、二枚の歯でくびれるほどに噛まれ、皮が切れ血が滲んでゐた。これはまた意外な深手であつた。見てゐると痛みが一時に加はつて來た。

自分はその腕をつけ根からだらりと下げたまゝ、

「お前は、自分の舌の代りに俺の指を噛み切つてしまつたぜ。それでお前自身の災難は免がれた

のだからよかつたが」と自分でも解るほど苦い笑ひをもらした。

妻は、夢から覺めたやうにまじ／＼と自分の顔を見上げてゐたが、脱脂綿をくわへた口の中でアワ／＼と唾者のやうなことを言つた。そして大きな粒の涙をぼろ／＼落し始めた。

「泣かなくともいゝよ。が、二度とは御免だぜ。俺達の方ではどうにもならない原因で悲劇が生れる場合とはかく、これんばかりのことに逆上して、取りかへしのつかぬ悲劇を起しちや、お互ひに浮ばれないからね」

自分は全身にしみる傷の痛みを感じながらしみ／＼とこれを言つた。言つてゐるうちに自分の眼頭にも涙が滲んで來た。

八

〇さんの言つた通り、妻の盲腸は再び冒された。〇さんがまた診に來てくれて、

「今度はいけませんね」と言つた「二三日したらこの痛みは一先づ落ちつきますから、そしたらすぐK病院へ入つて手術させよう。ほつといたら死んでしまひますよ」と妻と自分の顔を等分に見た。妻は泣くとも笑ふともつかぬ顔をした。〇さんは笑ひながら、

「なに大したことはないですよ。手術は三十分で済みます。そして二週間で元の身體になつて退院できますからね」と柔かく言つてくれた。

「その手術がカリエスに影響しないでせうか？」自分はそれを訊いて見た。

「大丈夫でせう。手術後一時身體が弱りますから、その點で幾分カリエスのバイキンを繁殖させる譯ではありませんが、目に見えて悪くなることはありません。よしあつたところでこの盲腸を低つとく譯には行きませんからね」

自分はこれに對しては只暗い顔で答へるよりしかなかつた。これは全く弱り目に祟り目だと思つた。考へるといよ／＼暗憺たる氣持になつた。

それから五日して、よその家では正月の支度に取りかゝるやうな時分、自分の家は空家のやうにして妻をK病院へ入院させた。Oさんの特別の世話で、手術料無し、入院料半額といふことで妻は三等室の窓に近いベットの一つを當てがはれた。Oさん、及びK病院の親切に對しては自分達は心から感謝してゐた。

一日置いて次の日の午後、妻の盲腸の手術はOさんの手で行はれた。自分はその手術前に、ギブスを病院に持ちこみ、手術後の妻の身體をすぐそれに寝かせるやうにしなければならなかつ

た。また手術の際にも立ち合はねばならなかつたが、自分はわざと時間をおくらしして、日が暮れかゝり、大丈夫手術が済んだと思はれる頃、家を出た。たとへ隣室にゐても、手術に立ち合ふことは現在の自分には堪へきれさうもなかつたからであつた。

何ほこの日自分は、下宿の彼女を訪ねる約束を四五日前の手紙でして置いた。指を嚙まれた事件以後、自分の氣持には彼女を訪ねる餘裕がなくなり、つゞいて妻の盲腸で、彼女の樺太行問題を非常に氣にしながら、その後一度も彼女に會つてゐないのであつた。しかし今日だけはその約束を破つて眞直ぐ病院の妻の所へ行かう、さう思つて停車場へ向つた。電車に乗ると、人中だけに持つて來た、ギブスのいやな形が眼について困つた。どう包みかへ、どう置いて見ても、その形は妙な輪廓となつて風呂敷の外へ浮き出して來るのには全く持てあました。

手術後の妻の姿も眼に浮んで來た。しかもその姿はどう浮かへて見ても、ギブスの中に寝てゐる姿以外の姿にはならなかつた。妻の寝姿にはいつかギブスが付きものになつてゐるのであつた。それほど自分の眼には、この半年あまりの間に、ギブスと離れずにゐた妻の姿が深く強く眼の底に焼きつけられてゐるのであつた。自分は今更らのやうにさういふ自分に驚き、そしてその自分の惨めさを嘆息するやうな氣持になつた。

自分は、今度の病氣で妻が死ぬやうなことはないと思つてゐた。しかしこのいやな形のギブスが妻の身體にあつて取りついてゐる以上は、手術後の経過がはか／＼しくないと思はれてならなかつた。手術の傷の方では癒らう／＼と努めても、このギブスが傍から何かしら不吉な暗示と刺戟を與へてそれを邪魔しさうに思はれてならなかつた。これは妻に取つては殊に不愉快な想像に違ひなかつたが、いつかの木乃伊の想像と同じやうに妙に頭の芯にこびりついて離れなかつた。さういふものをあの病室へ持ち込んで行くことは、第一、夫れ／＼の病氣で苦しんでゐる同室の患者に對しても不快な思ひをさせやしないかといふ氣がした。眞直ぐ病院へ行かうとした自分の氣持はそこでちぢれてしまつた。

電車が新宿へ着くと、自分はそこで上野行へ乗りかへてしまつた。やつぱり約束通り下宿の彼女を訪ねよう。そして彼女の問題も片づけ、また自分の氣持の轉換するのを待つて後、病院へ行かう。さう思つたのであつた。ギブスは、高田馬場驛へ一時預けにした。驛員は毀れものぢやないかと念を押し、中を覗き、えたいの知れないものを見ると、へえ！と言つた。石膏像です、と自分は言つたが、變な不愉快を感じた。

下宿の彼女は買物に行つて留守だ、といふことであつた。待つつもりで自分は彼女の部屋へ入

つて行つた。と、そこには薄暗い灯の下に、手提行李と大きな風呂敷包みが二つ、持ち出すばかりのやうにして置いてあつた。そして他には何一つなかつた。自分はハツとした。もう樺太へ發つ支度をしてしまつたのだらうか？ さう思ひさういふ荷物を見てゐると、一人遠く旅立つて行く彼女の姿が妙にはつきりと見えて來た。自分は急に不安になり苛立たしくなつた。そして火のない火鉢を抱えて無暗に煙草をふかしてゐた。一時間ほどぢり／＼しながらさうしてゐたが、彼女はまだかへつて來なかつた。自分は病院の方が急に氣がかりになつて來た。で、二時間以内に再び來る旨を書き置きし、宿の女中にもそれを頼んで、そこを出た。が、驛の近くまで來ると、下宿の方のことがまた堪らなく不安になつた。自分はそこからまた引きかへした。長い間、彼女と妻との間を彷徨してゐる自分の心は、いま具體的にもかうして彷徨してゐるのだと思ふと自分ながら不愉快であつた。

再び下宿へ行くと、彼女はつい今、荷物を一切持つて引き上げて行つたといふことであつた。今晩は牛込の余丁町の知り合ひの家へ泊り、明日樺太の方へ旅立つのださうです、と女中がつけ加へた。自分はもう腹が立つてしまつた。が、それだけ自分の心は彼女の後を追ひかけた。余丁町へ行くのなら、省線で新宿へ出てそれから市電に乗るだらうと自分は推定した。つい今、とい

ふなら何處かで追いつける、さう思つて自分は走るやうに驛へ引きかへした。

さうして自分は、彼女の後姿を、新宿驛前の廣場で見つけた。こゝで彼女を見つけたことは實は偶然のことであつたが、自分の神経は痛いほど鋭どく働いてゐたので、寧ろ當然のことに思へた。しかし自分はこゝで、彼女に對し名状しようのない或る氣持を味はせられた。

九

彼女は片手に手提行李、片手に二つの風呂敷包みを持つて、暮の賣出しで雑踏してゐる電車線路をよるぼりながら踏み越したが、そこで何かに蹴つまづき、彼女の影がだゞつびろく崩れたかと思ふと、パタリと前へのめつてしまつた。同時に二つの風呂敷包みがころ／＼と轉げ出した。自分はアツ！ と叫ぶ氣持ちで、そこへ走りつかうとした。が、彼女は瞬間に立ち上り、非常に慌てながら、風呂敷包みを拾ひ上げることゝ周圍を見廻すことゝを一しよにした。その様子は實に悲惨であつた。見てゐられなかつた。自分はもうそこへ寄りつけなかつた。

彼女は、往來の人々の視線が一せいに自分の身に注がれてゐると感じてゐるらしく、小さくなら深くこゝみ、匍ふやうにして近くの電柱の蔭まで行つた。そこで荷物を地べたへ置き、更らに

小さく深くこゝみで着物の裾の土を拂つてゐる。彼女はさうしてゐながら泣いてゐるだらうと思つた。が、彼女よりも自分の方が泣きたかつた。自分は十五年前から多くの戀する者の心理と同じく、彼女をそこらに歩いてゐる人間共より一段上の世界に置いてその存在に一種のノールさを感じてゐた。彼女が如何にみすばらしくなり頼りない姿になつても、このノールさは容易に消えようとしなかつた。それが今、かういふ場所ですういふ有様の彼女を見せられたのである。それはどう見ても、一個の哀れな惨めな女の存在であつた。自分は手の出しようがない氣持で、またさういふ彼女の態を自分が見てゐたことを彼女に知らしたくもなかつたので、呆然と廣場の中に立つてゐた。

彼女はやがて恐る／＼眼をあげて、周圍に見てゐるものゝないのを確かめると、荷物を取り上げて人混みの中へ潜るやうに入つて行つた。自分はそこで線路を横切り、彼女のあとを追つた。追分の終點の所で、自分は彼女の肩を叩いた。彼女はギク／＼として振り向いたが、そのまゝどん／＼先へ歩き出した。

「おい僕だよ、僕だよ」と自分は人中も構はず大きな聲を出した。

「知つてます！」彼女も高い聲を出した。自分は走り寄つて、手提行李と一つの包みを無理に引

つたくり、
「まあこつちへ来てくれ！」と叱るやうに言つて、再び線路を横切り、近くのSホテルの方へ歩き出した。

Sホテルの前で、自分は彼女の近づくのを待つて、

「今晚は、こゝへ泊つてくれないか」と静かに言つた。

「いやです！」彼女は息を弾ませてかんぶりを振つた。

「さう怒るな僕は今あの下宿まで行つて、それから夢中であなたの後を追ひかけて来たんだよ、大事な話があるのだから、今晚一晩は是非こゝへ泊つてくれ」

そこで自分は彼女の手をぐいと引いて、ドアを押して入つて行つた。二人は三階の一室、窓際に小さな圓卓と二つの曲木椅子、それを挟んで灰色の壁際に二つのベッドのある室へ通された。

スチームも通つてゐず、室内には空家のやうな冷たい空気が充ちてゐた。そして何となくゴムの匂ひがしてゐた。

「わたし、今晚寝やしませんわ」と彼女は一つのベッドを見下しながら言つた。そして椅子に腰を下すと、深い深い溜息をつき始めた。自分はこんなに深い長い溜息をつく女を始めて見るやう

な氣がした。

ノックをして女中が茶を運び、小さな鐵火鉢を運び、宿料を請求して、それからドアの鍵穴に合鍵を差しこみ、最後におやすみと言つて出て行つた。

自分はベッドの一つに腰を掛けて煙草をふかしてゐた。暮の街の騒音が妙に淋しい響きで窓硝子をふるはしてゐた。さうして二人はかなり長い間沈黙し合つてゐた。自分の氣持は、さつきの往來での彼女の惨めな様子を見てから、理屈なし彼女を劬はらうとしてゐた。

「どうしても樺太へ行つてしまふのだね？」やがて自分は出来るだけ彼女の神経に觸らないやうな口調で言ひ出した。

「……………えゝ」彼女は不性無性に答へた。

「しかしそれは取り止め shouldn't かね」

「……………今になつて、いやです。もう切符も買つてあるし、荷物もみんな送つてしまつたんですから」

「切符は無駄にしても構はないよ。荷物は送り返して貰へばいゝし」

「そんなこといやす！」

「まアさうブリ／＼言ふな。實はその問題であの後すぐにあなたの所へ行くつもりだったが、妻が盲腸炎で苦しむ、つゞいて入院して手術を受けるといふ始末で、まったく餘裕がなかつたのだよ。冷淡で行かずにゐたのちや決してなかつたのだからね」

彼女は寒さうな表情で自分の方を見ながら、何か言ひさうにしてまた溜息をついた。

「で、とにかく樺太行は止めて貰ひたいんだ。これから東京でさへ寒くなる一方なのに、何を好んであんな北國へ彷徨して行かうといふのか僕にはその氣持が知れない。まア謂はゞむしやくしや紛れに思ひついたことぢやないかね。そんなことで行くのぢや、あんな他國者の寄り集りの所ではとても辛棒しきれないよ。ましてあなたが今考へてゐるやうな金がどつさり取れる樂な仕事なんて決してありやしないし、行つたその日から幻滅してへたばるに極つてるよ。僕はこの夏に樺太の活動寫眞の實寫で、オットセイが蟻のごとく無數に海岸に匍ひ廻つてゐる所や、樺鱈が幾つもの大舟に山のやうになつて積み出される所を見て、樺太へ行きさへすりや道端に落ち散つてゐるものを拾つても、人間一匹呑氣に暮せさうに思はれたが、實際樺太へ行つた者から聞くと、いゝ加減な氣持で渡つて行つた大抵のものは、男は乞食のやうになつて野たれ死ぬか、女は賣春婦になるのが關の山だといふよ。まさかあなたがそんなどん底へ落ち込むとは思はないが、今考

へてゐるやうな夢は少しもありやしないんだからね。遠い北國、といふ所にロマンチックなあくがれも持つのだらうが、そんなことは文學少女に任せて置くがよい」

彼女はもう何も言はうとしなかつた。只肩をすぼめ寒さうに火鉢を抱きこんでゐた。

「考へて見ると、第一そんな北國へさまよつて行かねばならないほどの原因も動機も無いぢやないか。名古屋の良人のことも、もと／＼その良人が藝者と墮落ちをしたり、女中に手をつけたりしてあなたを奴隷扱ひにするところから、いつそ自由な一人になつて人間らしい生活をしたいとあなたは自分から離縁して來たのでせう。さういふ人にまた未練を起して、揚句が、自暴自棄になるとは今の時代の女のすることぢやないよ。自分の子供に惹かれる氣持はよく解る。それには僕も理屈は言はない。だからあなたは何かして早く獨立して、その子をこつちへ貰ひ受けるやうにすればいい。今度女中に子供が生れたといふなら、あなたの子は女ではあるし、先方は喜んであなたにくれてよこすに違ひない。さういふ風に解決をつけて行くことがこれからのあなたの仕事ぢやないか」

この時、彼女はキラリと自分の方を見て何か言ひさうにした。

「まア僕の言ふことを聞いてくれ。僕の妻とのことも、それほど氣に病む必要はないよ。妻は僕

を恨みこそすれ、あなたを恨んでゐやしないよ。まして夢にまで出て、あなたをいぢめるほどの根深い憎しみは持つてやしないよ。只僕があなたとのかつことを秘密にしてゐるといふのでそれを怒つてゐるのだ。が、これはそのうち凡てを妻に告白して、あなたとも直接會はせもし、出来るだけ正確に諒解して貰はうと思つてゐる。告白したつてさう恥かしいことはしてゐないのだからね。さうして公明正大になれば、この問題も自然と解決がつく。これは僕自身の仕事としてさういふ解決をつけるやうに努力する。それで残る問題はなくなる筈だし、樺太くんだけまで出奔して行く原因も動機も消え去る譯ぢやないか」

「いゝえ、決してそんな簡単に片づくものぢやありませんわ」と彼女はそこで顔をあげ、暗い表情の中にとげ／＼しいものを含めて言ひ出した。「いくらあなたと奥さんだつて、決してあなたの思ふやうにはなりませんから。それはわたしを保証しますわ。さうならないことをあなたもよく御存じだから、今までもわたしの事を告白できなかったのせう。告白できないとすれば奥さんの方へは只曖昧にしといて、わたしとのつき合ひの方を絶つより外はなかつたのせう。わたしの氣持がよく解りますの。そしてわたしはそれを決して恨みやしませんの。仕方のないことですもの。只わたしはあなたに會へなくなれば、もうだれ一人頼るものがなくなつてしまふの。と

いつてわたし一人ではとても立つていけないのですもの。わたしは十年間の結婚生活で片輪者になつてしまつてゐるのですもの……」

「しかし、たとへどうならうと、あなたを見殺しにするつもりは一つもありやしないよ」

「いゝえ、そんなつもりでないたつて自然さうなつてしまひますの。わたしには先がよく見えますわ。でも考へれば、あなたに頼らうとするのが第一間違つた考へなのですから、わたしはたとへ手足をもぎ取られた不具者のやうでも、生きられるだけ生きて行かうと、覺悟を極めたのです。それで、この事はまだあなたに内緒にしましたが、あなたがあれつきりわたしの所へ來なくなつてから、わたしは一生懸命職業を探しましたの。一度は女店員になるつもりで、三ヶ所も當つて見たのですけど、年が取りすぎてゐるといふ理由でみんな駄目でした。それから今度は思ひ切つて、上野の秋の展覽會場の女監を志願して見ましたの。これもすゑぶん苦心をしてやつと入れて貰ひましたが、二週間ばかり通ふうちひどい脚氣になり、兩脚が膨れちやつてまるで動けなくなつてしまつたの。それからわたしはもう食ふや食はずであの二階に寝てゐたのです。そして着物は全部あなたの名であなたの行きつけの質屋へ入れてしまつたのです——その利息は樺太で働いて送つてよこしますから、流さないやうにしといて下さいね——そんなですもの、これ以

上東京にゐられようはづがないぢやありませんか……」

そこまで言ふと彼女は、おゝ寒、おゝ寒、と言つてブル、と身を顫はした。そして火鉢の火を掻き立て、首を縮めて何か遠くの物音を聞くやうな風にしてゐたが、また言ひつゞけた。

「別れた良人とのことだつて、あなたには想像もつかない複雑した譯があるのですわ。あの子のことは、場合に依つてはわたしの方へよこしてもいいと、先だつて向うから言つて來ましたからわたしがさうしさへすれば、それで片がつかますが、わたし一人が食へずゐる所へ子供を引き取つたらどうなることせう。またたとへ引き取れたとしても、今になつてあの子を引き離さうとするその根性があんまり非道ぢやありませんか……そればかりか、わたしはあの人があんな女に子供を生ませたかと思ふと、どうにも我慢が出來ませんの。そのことには、わたしはもう意姑地になつてゐるのですわ。あの人と離縁してゐようとゐなからうとそんなことは關係しませんの。それはわたしでなければ解らない心持ですわ。こんな心持はひよつとしたら親譲りかも知れないの。ほんとうはわたしのお母さんも……」

彼女はそこまで來て、蹴つまづいたやうにピタリと口を噤んだが、もう今までの情性を止め得ないといふ風に、

「わたし、この話は今まで誰にもしたことがないんですから、あなたも絶対秘密にしてゐて下さる？」と恐い顔で言つた。

「大丈夫だ」自分は極印を押すやうに答へた。

「ほんとうは、わたしのお母さんもね、今のわたしと同じやうな境遇になつて、そして自殺してしまつたのですよ。病死したんぢやないのですよ。ほんとうは、剃刀で咽喉を突いて死んぢまつたのですよ……」

自分は、彼女の顔を正視できなかつた。

「……わたしそれを考へると今でも氣が變になりさうなのです。そして名古屋のあの人を殺すか自分が死ぬか、そんな氣になつて仕様がなひんです。わたしのお母さんもそんな氣持から自分を殺してしまつたのですわ。お母さんも不幸な結婚をしたのですよ。わたしが生れて誕生も來ないうちに、おとゝし亡くなつたあのお父さんは、わたし達母子を廣島へ置いたまゝハワイへ行つてしまつたのです。尤もそれはお母さんも賛成の上ださうですが、あとで、あのお父さんは一人の女を連れて行つたことが解つたのです。男つてみんなそんなのでせうか。それからお母さんの苦しみやうつたらなかつたさうです。半年もしないうちにまるで氣性が變つてしまつたさうです

もの、さうするうち三年ばかり過ぎて、お父さんはその女と二人の子供を連れて日本へ歸つて来たのですよ。これはさすがのお父さんも、お母さんに秘密で歸るつもりだつたらしいが、その前に、ハワイのお父さんの知人からお母さんの方へ内通があつたのですつて。で、お母さんは知らん顔して神戸まで出迎へに行つて見たのださうです。するとお父さんは果して親子四人づれで大きな顔をして棧橋を渡つて来たさうです。……その夜お母さんは一人廣島へ歸へると、寢床の中であたしを抱いたまゝ、剃刀で頸動脈を切つたのです。その時わたしは一番いゝ着物を着せられてゐたさうですから、お母さんはきつとわたしをも道づれにするつもりだつたらしいのです。——わたしその時さうして死んでゐた方がよつぽど幸福でしたわ——次の朝わたしは、身體中血にまみれ、ヒー／＼泣きながらお母さんのおつばいを吸つてゐたのださうですの……」

自分は譯もなくベッドから立ち上り、今まで息もしてゐなかつたやうに一度に幾つもの呼吸をして、今度は反對側のベットへ行つて腰を下した。

「こんな話、もう止ませうか？」

「いや、しまひまで話してくれ！」自分は重いものを支へ上げるやうな風に答へた。

「……………今の話は、わたしが十二の時、その事を書いた古い新聞を見せられて、伯母さん

から聞きましたの。伯母さんとお父さんが何かでひどく喧嘩をした時のことでしたわ。お父さんはそれでまたひどく、伯母さんと喧嘩をしました。わたしはそれを聞いてから幾晩も幾晩も眠れなかつたことをよく覚えてゐます。その頃のお父さんは、その女とも二人の子供とも別れて、少なくとも表面はわたしだけを大事に育てゝゐましたが、わたしはそれからといふもの、お父さんにまるでなづかなくなつてしまひましたの。何だか恐くつて寄りつけなかつたのです。そして物心がつくにつれて、わたしは人の心を裏切る者をとてひどく憎むやうになりましたの。自分に關係のないことでも、さういふ人を見るとのぼせ上るほど腹が立ちますの。名古屋のあの人の仕打に對してわたしがこんなに堪らなくなる心も、そんな時代から育つて来たのです。だから今更ら自分にもどうする事も出来ないのですわ。生れた時にそんな血にまみれたわたしの身體はいつまでも淨まらずに、その時の怨靈を死ぬまで宿してゐるに違ひないのです。といふのは今のわたしの境遇が昔のお母さんそつくりになつたのですの……………名古屋のあの人は社用でしよつちう東京へ出て來ますし、時には今の女や子供を連れて出て來るでせうし、そんな時、今晚のあなたとのやうに、何處かでひよつくりと出つくわさないとも限りません。そして今度わたしは……………何をするか知れやしませんわ。わたしはそれだけでももう一日も東京やこの近くにはゐ

たゞまらなくなつたのです……………」

彼女は終りの方を、せゝらぎの音が消えるやうにほそぼそと言ひ終ると、白い細い手の先をちつと見詰めてゐたが、またブル、と肩をふるはし、それからソーツと立ち上つて背後のベットへ縮まるやうに腹ばひになり、

「わたし、どうしてこんなに寒いのでせう！」と齒の根をガク／＼言はせながらつぶやいた。それははたら見ても、骨の芯から寒さに顫へてゐるやうに見えた。しかし自分はそれを只見てゐるほかしかたなかつた。しばらくすると、

「あなた、わたしのからだをおさへてゐて下さいね」と彼女は救ひを求めるやうに言つた。

自分は立つて行つて彼女の肩をおさへた。が、それでは應へがないので、彼女の身體を仰向きに寝かし、上から毛布をかけてその両手をしつかり持つてやつた。彼女の全身の顫ひは手を傳はつてこつちの身體まで顫はした。

「氣持が悪い？」

「うゝえ、いゝえ……………」

彼女は眼をかたく閉ぢ唇を喰ひしばつた。そして、彼女の方でもこつちの両手をしつかり掴ん

だ。それから彼女はその手を力一ばいゆすぶり始めた。ぐい／＼とゆすぶりながら彼女は何か言はうとした。その言葉が口まで出かゝつたのを、彼女はまた手綱を締めるやうにしつかりと締めつけた。それは見てゐるこつちが苦しくなるほどの努力であつた。

自分は彼女が言はうとすることをはつきりと感じた。それは手を傳つて自分の心臓に響いて來るやうに感じた。自分は彼女の手をほどいて、

「あんまり昂奮しないがいゝよ」と何かを両手でおさへるやうに言つた。

彼女は毛布を頭からかぶつてしまつた。

何十分か過ぎた。彼女は毛布をはぐつて靜かにベットのの上に起き直つた。その顔は凄いほど蒼ざめてゐた。その眼はちつと据つてゐた。自分はいきなり彼女の前へ立つて、両手で彼女の兩頬を包むやうにして、

「それで行つてしまはれては堪らない。もつと明るい和らいだ顔を見せてくれ！」と、母親が子供にいゝ顔を強ひるやうに言つた。自分は涙が出さうになつた。が、更らにまた嘆願するやうな調子も含め、全身の熱を彼女のからだに吹きかけるやう言つた、

「もつと明るく、もつと和らいで！」

けれど彼女は同じ顔同じ眼で、實に冷靜に、
「済みませんが、あなたはもうおかへりになつて下さいね」と言つた。

十

病室は、電燈に青い布がくるまつてゐて、どんよりと青く濁つてゐた。そして五人の患者も三人のつき添ひ人もひつそりと眠つてゐた。自分は忍び足でギブスを持ちこんだ。

妻は、青林檎のやうに青白くなつて、しつとりと眼を閉ぢてゐた。自分は息を殺してそれを見守つてゐた。

と、うつすらと白い眼が開いて、

「寒かつたでせう」と妻は言つた。自分はギクツとした。それで見ると妻は自分がこの病室へ入つて来る時からちゃんと知つてゐたのに違ひなかつた。それにしても、自分が豫期してゐたうらみ言の代りに、さういふ言葉が出たのには自分は氣味が悪くなつた。妻はその眼で、今夜の自分が今まで何處で何をしてゐたかをすつかり見抜いてゐるやうに思はれた。
「手術は、どうだつた？」それを自分はおづ／＼とそれを訊いた。

「……………盲腸がね、化膿してすつかり癒着してゐたんですつて。もう四五日ほつといたら、破けて、腹膜炎を起して、そして死なねばならなかつたんですつて」

妻はそれを何の感情も混へずに言ふと、またしつとりと眼を閉ぢてしまつた。自分はず／＼氣味悪くなつた。

「ギブスを持つて来たが、遅かつたね」

「さう、どうも有りがたう」

「手術のあとが痛むか？」

妻は眼を閉ぢたまゝ微かにうなづいた。自分は更らに息を殺して妻の顔を見守つてゐたが、ついに息苦しくなつた。沃度フォルムの匂ひが急に眼にしみて来た。自分は立ち上つて廊下へ出た。長い廊下を三遍ほど往復して妻の傍へ来ると、

「電車がなくなりやしませんか？」と妻は言つた。

「俺は今晚こゝへ泊るつもりだよ」

「いゝえ、看護婦さんが来てくれますから」

自分はまた廊下へ出た。窓を開けてほてつた頭をしばらく外氣に當てた。そして再び妻の傍へ

かへつた。妻はもう何も言はなかつた。眠つてゐるのか覺めてゐるのか、身動き一つせず深く静かに眼をつぶつてゐる。それはどこから見ても傍にゐる自分とは全く没交渉の存在のやうに見えた。没交渉どころか、自分の眼の及ばない遠い世界へ離れ去つてゐる存在のやうにすら見えた。

十

自分に對し没交渉に見えた妻の心は退院の後もそのまゝであつた。二週間の豫定が四週間になり、自分達は病院で年越しをして、そしてやうやく退院できたのであつたが、その間にも妻の氣持には一度の變化もなかつた。妻は相變らず、ぎつしりとギブスに寝たまゝ白い眼で自分を睨むやうにして暮してゐた。

「お前の心は、さうして何處まで頑固なのだね。あの女はね、もう一ト月も前に、樺太の方へ行つてしまつたのだよ。俺の今の心は最早何ものにも囚はれてやしないのだよ」自分は遠く離れ去つて行く妻を呼び返すやうなつもりで、よくさう言つた。

「そんなこと、どうだつて構ひませんわ」妻はいつもさう答へた。自分はさういふ妻を見て、曾つて自分の指に噛みついて來た當時の妻を今更らのやうに思ひ出した。同時に今はこのやうな妻

に手のつけようもなく、只呆んやりしてゐなければならぬ自分を顧みずにはゐられなかつた。呆んやりしてゐると、樺太へ去つた彼女の姿も遙か遠くに見えて來た。が、その彼女も自分の方に背中を向けてゐた。

「とにかく、さう僻ぎこんでゐちや仕様がないよ。寝てゐるばかりが薬でもあるまい。氣晴らしに正月の銀座へでも行つて見ようか。活動を見ようか、それとも芝居の方が香氣かな、まア今日は一度出て見ようぢやないか」

「何處へも行きたくありませんの」

「さう意地になるなよ。俺だつて堪らない。カリエスに觸らない程度で、これからちよい／＼賑やかな所へ出て見ることにしよう。こんなことをしてゐたら俺達は窒息してしまふからね」

自分はこれを一生懸命に言つた。そして妻を無理にギブスから起した。妻は着物を着がへながら少しよろぼつた。少々無理かなと自分は思つたが、妻も出て見る氣になつてゐたのでやつぱり連れ出した。もう夜になつてゐた。

新橋へ出てそこから尾張町まで歩いて來ると、妻は、詰らないから家へ歸ると言ひ出した。

「それぢや、淺草がいゝ、震災後の仲見世は見違へるやうになつたぜ」そんなことを言つて自分

は妻をバスに乗せた。

目に痛いほどの明るい仲見世の灯の中を歩きながら、自分は妻の欲しいものを何でも買つてやらうとした。が、妻は、子供がほしがるやうなものばかりだと言つて、そつけなく歩いてゐるばかりであつた。

活動街へ来て、喜劇大會をやつてゐる所へ妻を連れ込んだ。三十分ほどすると、妻は背中が痛み出したと言ひ、それにお腹の手術のあと痛み出したと言つた。

すぐ外へ出て、喫茶店へ寄つて休んだ。が、妻はお茶も飲まふとせず、テーブルの上に突つ伏してゐた。自分は妻の片腕を釣り上げるやうにしてそこを出た。

上野驛前でバスを降りた。そこから省線へ乗るつもりで、ガードの下まで来ると、妻はお腹をおさへて、そのコンクリートの柱の下へ蹲つてしまつた。考へて見ると、妻は七ヶ月もギブスへ寝てゐた上に、最近一ト月は、容易に癒らうとしない手術の傷を癒すため、病院のベットから離れずにゐたのであつた。その後健康は大分回復してゐたとは言へ、やつぱり無理だつたのだ。

「冷えたのが悪かつたのだね。ひどく痛むなら何處かこの邊の宿屋へ泊らうか」と自分は詫びる

やうに言つた。

「宿屋なんかいやですわ」妻はこつちの氣持を拂ひ除けるやうに答へた。

「それぢや我慢して早く家へ歸らう」

「家へ歸るのもいやです！」

「ぢや何處へ行つたらいいのだ？」

「……………」

何處へ行つたらいいのだ？ さう自分にも言つて見て、呆然と立つてゐると、實際自分にも行く處がないやうな氣がした。

「おい、そんなことをしてゐたら死んぢやうよ！」

自分はいやがる妻を無理矢理に抱き上げ、背中を向けてぐいと背負ひ上げた。妻の身體は凍えたやうに冷たく固かつた。それをゆり上げゆり上げ自分は冷たい風の吹き通るガード下の道を、醫者の家を探して歩いて行つた。歩いてゐると、何だかあのギブスをも背負つてゐるやうな氣がして來た。そのギブスが頭の上から例の不吉な影を眼の前に投げかけ、自分達を涯しのない闇の中へ彷徨ひ込ませさうに思はれてならなかつた。

兩腕を差し延べて

—或る若きルンペンの手記—

—

他人に見せるつもりで自分はこの記録を書くのではない。書かすにはゐられないので書くだけだ。

自分は今、濱松市の場末のモクチンに居る。東京洲崎埋立地の市營無料宿泊所を出てからざつと一ト月半たつ。その間、三日ほど仕事にありついたきり、あとはみんな奔走、(物乞ひ、或ひはいやく)しながら命をつなぎ、やつとこの濱松へ辿り着いたのだ。東京を發つ時は寒風が吹きすさんでゐたが、いつか、裏の田浦で蛙が鳴き出した。だが、そんなことはどうでもいい。

これから自分は何處へ行つて何をしたらいいか？これだけはどうでもいゝでは済まされない。

洲崎の埋立地を發つ前の夜、宮田與一といふよなげやが、顔中を涙にまみらせて、——畜生、この世がわからねえ、と言つて自分の頭をなぐりつけたが、全くその通りだ。

俺達ルンペンの仲間では、この、どうすればいいんだ？といふ誰かを叩きのめしたいやうなせつば詰つた氣持ちから、何の恨みもないもの同志が命のやりとりまですることが實にたびくあるのだ。

下關の下水工事人夫をしてゐた時、一九二九年の十一月の或る日のことだ。元村といふ土工と源といふ土工とが、いきなり喧嘩り合ひをはじめた。道路から七八尺掘り下げた溝の底だ。

「うるせい、馬鹿野郎。自分のことは自分で考へろ」源が喧嘩つた。

「なに！ 馬鹿野郎たア何だ！」

元村はさう喧嘩り返したかと思ふと、シャベルを持って立ち向つた。源は、持つてゐたツルハシを構へた。二三十秒間、二人は、しやも同志の喧嘩のやうに首をつき出して睨み合つてゐた。と、一撃、たゞの一撃だ。元村のシャベルが、源の横髪へ、くわんと飛んだかと思ふと、源は

兩腕を差し延べて

片手を宙に浮かせ、よろ／＼となつて、そのまゝどたりと、泥水の中へぶつ倒れてしまった。髪から溢れ出す血が、泥水へたく／＼注いで、水は紫色になつた。

源はそれきりであつた。

だが、こゝで一つ、自分をもつとびつくりさした事件が起つた。自分はこの事件以來、それまでの自分の生き方、考へ方を根本から立て直した。

泥水の中へ突つ込んだ源の片脚の、微動が止むか止まないうちのことだ。見てゐた親分は言つた。

「この渡り鳥め、（親分を持たない土工）世話を焼かせやがる。仕方がねえ、てめえ等が片つけちまへ」

居合せた四人の土工は、さう言はれると、源のからだを——まだ體温のあるからだを引きずり上げた。そしてそれから一時間の後、源のからだは、下水用の鐵筋管の中へ打ち込まれて、近くの海の中へ投げ込まれたのだ。

それから親分は、兒分の土工等から、十錢二十錢の金を集めて元村の手に掴ませ、「飛べ」と言つた。

翌朝現場へ行つて見ると、元村の姿は見えなかつた。この時、黒い厚い唇に煙草をくわへながらケロリとした顔で現場の監督をしてゐる親分を、自分は遠くから見て、自分に向つてかう言ひきかしたのである。

「この事實をよく見て置け。人間の命がどう取り扱はれてゐるかを」

二

この事實を、更らに深刻にした事件がその後にあつた。

それから四月ほどした昨年のもので、

自分は、九州のある鐵道敷設工事に働らいてゐた。乾いた西風が、毎日線路の埋め土を吹きたてゝゐた。

こゝには五十人ばかりの土工や女人足が働らいてゐたが、そのうち十五人ばかりは百姓の若者であつた。彼等は日當一圓の賃銀に對しては左程不平でなかつたが、毎日の激しい労働、しかもハンマーのやうな腕を持つた小頭の監視の下の労働にはまつたくへと／＼になつた。そして、次ぎ次ぎと逃げ歸つた。

兩腕を差し延べて

自分は、山砂利の採取場に廻されてゐたが、或る日、こゝで「犬」退治の事件が起つたのだ。「犬」とは、どこの工事場にも潜む奴で、つまり、われ／＼の直接搾取者である小頭の忠犬となつて、われ／＼仲間の秘密事を細大もらさず小頭へ密告する奴である。われ／＼はこの犬が、高島富太郎であることを確かめるためには、可成りの苦心をした。われ／＼はこの犬のために、小頭のハンマーのやうな腕で、幾度死ぬやうな目に會はされたか知れないのである。

この犬退治のために、先づ、熊次と豊造といふ土工が起つた。二人とも三十前後で、熊次は鷹のやうな鋭い目を持つてゐた。豊造はその額が鉞形に禿げてゐて、額がまむしのやうに出張つてゐた。

山砂利採取場の北側に、大きな一本の古楠があつた。それが、こんもりと廣い影をつくつてゐる。熊次と豊造は、われ／＼をそこへ呼び集めた。犬の高島は、鐵橋のアバットへ材料を運んで居り、小頭はトロ線路の砂利の敷詰を見廻つてゐたので、絶好の機會だつたのである。

熊次は、石にぶつつぶされたやうな聲を出して、みんなに呶鳴つた。

「犬といふものは、めつけたが最後、殺さうと生かさうと勝手なもんだ。どこの世界だつて昔からきまつてゐるんだ。ところで」と、こゝで熊次はそつくり反つて更に大聲に呶鳴つた。

「ところで、その犬は、あの高島富太郎だぞ！」

「しつかり頼むよ！」と、女人足の方から聲がかゝつた。熊次はそこですす／＼昂奮して「やるとも、やるとも！」と、地團駄を踏んだ。

すると、豊造が立ち上つた。彼はまむしのやうな出張つた額を打ち振つて、犬の高島をやつつける方法と、場所と、その時刻とを述べ立てた。彼は、一句切り毎に、

「いゝかみんな、解つたか！」と念を押した。

「わかつた。よくわかつた！」

みんな口々に答へた。

さて、翌日の正午から一時の間に、この計畫は實行されることになつた。みんなはこゝで、熊次と豊造とを中心に、絶対秘密を守ること、絶対裏切りをしないことを誓約した。

勿論自分もその誓約をしたが、しかし自分に取つてどう考へても腑に落ちないことがあつた。それは、犬の高島を退治することばかり言つて、より以上の敵である小頭に就ては何一つ話されないことであつた。ばかりか、小頭のすることを絶対的に承認し、恐れ且つ敬してさへゐることであつた。

兩腕を差し延べて

そこで自分は誓約の後、みんなが夫れれの仕事場へ就いたとき、傍にゐる相棒の介二といふ男へこの事を言つた。すると介二は、髯面の圓い顔をあげて答へた。

「そんなことを言つたつておめえ、小頭がゐなけりや、俺達ア仕事にはぐれちやふちやねえか」
 「だから、小頭がゐて悪いといふのぢやないよ。小頭のすることだ。俺達を強けら同様に見て、自分を守るためには、俺達の命の二つや三つを踏み潰すのを何とも思つてゐないそのやり方だ」
 「だつておめえ、そりや小頭の権利といふものだ。口惜しかつたらおめえも小頭に出世するがいのさ。實ア俺アな」さう言つて介二は、あたりに氣兼ねするやうに首をすくめ「實ア俺ア、女房を、あの小頭に横取りされちやつたんだ。半年ばかり前によ。だがそれも仕方がねえんだ。俺とあの小頭とを天秤に掛けたらどつちが目方があるか。つまり、女房は、二人を天秤にかけたんだ。それで……」

「馬鹿野郎！」

自分は堪らなく不愉快になつて我鳴つてやつた。介二は、びつくりして、

「そりや俺が馬鹿さ。だが仕方がねえちやねえか」

自分は口を噤んでしまつた。小頭は、砂利ふるひをやつてゐるおさわといふ百姓娘を、しよつ

ちう山蔭の杉森の中へ引き込んでひい／＼泣かしてゐるのを自分は知つてゐるので、介二の今の話をきくと、意氣地のない介二の姿などは目の前から消えてしまつて、その代りに、あの大きな赤鼻を持つた小頭の姿が映つて來たのだ。自分は決心した。犬退治をする前に、小頭對われ／＼土工の問題をみんなに持ち出さうと考へた。先づ、待遇改善の幾つかの條件を持ち出し、次に、命がけの闘争に移ることを。

しかし土工達の小頭に對する絶対服従の念をぶち毀すことは、一つのハンマーでコンクリートの鐵橋柱を毀すほどに困難だつた。全然受け付けなかつた。只の一人も動かすことが出來ないうちに、翌日の正午が來てしまつた。

みんなは楠の下に集つた。偵察の役をしてゐた一人の若い土工が、河の方から走つて歸ると、みんなへ言つた。

「大丈夫、小頭は今、鐵橋の下でひるめしを食つてゐる。今のうちだ」

さう言つてゐる所へ、犬の高島が砂利を積んだトロを押して俺達の方へやつて來た。熊次は、大股で近づいて行くや、トロを止めて胸の汗を拭かうとした高島の片手を、ぐつとひつつかまへた。

「おい、犬、てめえ、法律を知つてるか？」
「法律……？」

高島は、目を三角にして熊次の顔を見詰めた。

「とぼけるない。土工の法律だ！」

「……………」

そこへ、豊造が寄つて行つた。

「なアおい、土方の法律ア、世間の法律たア根ツから味が違ふんだよ。今、ちつとばかりその味を見せてやるぜ！」

豊造はさう言つて、

「おい、みんな集れ！」と、楠の下へ號令した。その聲で、みんな動き出した時だつた。高島はいきなり泣き出すやうな奇聲をあげたかと思ふと、バタリと、トロ線の上へうつ伏せに倒れてしまつた。

これにはみんな困つてしまつた。聲を出して笑つた奴もあつた。が、この方法は、高島に取つて最も巧みな戦術であつた。といふのは、自分から大地へひれ伏した無力者を、そのまゝ上から

踏み潰すやうなことは、土方の「法律」にはなかつたからである。

われ／＼は、シャベルを持つて高島の起き上るのを待つてゐた。と、その瞬間である。高島はまるで野鼠のやうな速さでチヨロリとトロの下へもぐり込んだかと思ふと、十ばかり並んでゐるトロ列の向う側へ抜け出し、そして風のやうに走り出した。

「畜生！」

熊次は叫んで、持つてゐたツルハシを投げつけた。それが、高島の二三間後の草原へ落ちたなと思ふと同時に、アーツ！ といふ別な悲鳴が飛び出した。みんなギクリとして首を延した。清太郎といふ百姓の若者がまつさきにトロを飛び越えて行つた。われ／＼もそれに續いて行つた。行つて見ると、一人の百姓娘の人足が、眉のあたりから眞黒い血を走らせて倒れてゐたのである。よく見ると、それは例のおさわであつた。しよつちう小頭の手ごめに會つてゐるおさわであつた。彼女は、小頭の忠犬である高島退治に加はることを恐れて、一人、そんな所の草原の中に隠れてゐたのであつた。

途方もない皮肉な結果が持ち上つたものだ。しかし、この結果はまたどんな結果を引き出したか。

兩腕を差し延べて